

館報 2006 55

ANNUAL REPORT

OF BRIDGESTONE MUSEUM OF ART & ISHIBASHI MUSEUM OF ART

石橋財団 ブリヂストン美術館
石橋財団 石橋美術館

館報 2006 55

ANNUAL REPORT

OF BRIDGESTONE MUSEUM OF ART & ISHIBASHI MUSEUM OF ART

石橋財団 ブリヂストン美術館

石橋財団 石橋美術館

館報55号(2006年度)

Annual Report of Bridgestone Museum of Art &
Ishibashi Museum of Art No.55 (2006)

編集・発行

Edited and published by

石橋財団ブリヂストン美術館
〒104-0031 東京都中央区京橋1-10-1

Bridgestone Museum of Art, Ishibashi Foundaion
1-10-1, Kyobashi, Chuo-ku, Tokyo 104-0031, Japan

石橋財団石橋美術館
〒839-0862 福岡県久留米市野中町1015

Ishibashi Museum of Art, Ishibashi Foundation
1015, Nonaka-machi, Kurume-shi, Fukuoka-ken 839-0862, Japan

印刷
モリモト印刷株式会社

Printed by
Morimoto Printing Co., Ltd.

2007年12月発行

©2007
Bridgestone Museum of Art,
Ishibashi Museum of Art,
Ishibashi Foundation

目次 Contents

1 設立趣旨、機構・運営	4
Brief Histories of the Museums, Organization and Management	5
2 展覧会	
• ブリヂストン美術館	
・ 特別展	6
・ 拡大常設展	20
• 石橋美術館	
・ 特別展	25
・ 企画展	43
3 教育普及	
• ブリヂストン美術館	59
• 石橋美術館	63
4 入場者数	67
5 新収蔵作品 New Acquisitions	68
6 新収図書	85
7 修復記録	86
8 作品貸出記録	
• ブリヂストン美術館	92
• 石橋美術館	94
9 刊行物一覧	95
10 研究報告	104
11 美術館案内 Guide to the Museums	124
12 石橋財団職員	125

設立趣旨

ブリヂストン美術館

ブリヂストン美術館は、株式会社ブリヂストンの創業者・石橋正二郎(1889-1976)が多年にわたって蒐集愛蔵した内外の美術品を、社会公共のため、広く一般の鑑賞に供し、文化向上の一端に貢献したいとの趣旨に基づき、1952(昭和27)年1月8日、ブリヂストンビルディング竣工とともに同ビル内に開設されたものである。その後1956(昭和31)年4月に設立された財団法人石橋財団がその経営を継承し、1961(昭和36)年9月には同財団が石橋正二郎から所蔵美術品の寄贈を受けた。なお、2003(平成15)年1月に一階部分の増床工事を行い、ティールームを開設した。

石橋美術館

石橋美術館は、石橋正二郎が1956(昭和31)年4月26日、同社の創立25周年を記念して、社会公共の福祉と文化向上のために、郷土久留米市に寄贈した石橋文化センターの中心施設である。1977(昭和52)年、石橋正二郎の遺族の寄付により増改築が行われ、同年4月以降、久留米市の要請により、石橋財団がその管理運営に当たっている。

なお、本館に付随する別館は、1995(平成7)年1月8日、石橋正二郎によって蒐集された石橋コレクションのうち、書画・陶磁器類を収蔵展示する施設として石橋幹一郎により久留米市に建設寄贈され、一年余の養生期間を経て1996(平成8)年10月17日に開館した。

機構・運営

石橋財団 (2006年12月31日現在)

理事長	石橋 寛						
理事	鵜澤昌和	加嶋昭男	中山 暁	平野 実	加瀬英明	島田紀夫	
監事	亀徳正之	湯浅達祐					
評議員	石井公一郎	高碓芳郎	高階秀爾	石樽和夫	遠藤長夫	村上 浩	小林 忠
	石橋知子	水戸岡鋭治					
美術館運営委員会							
委員長	石橋 寛						
委員	嘉門安雄	高階秀爾	富山秀男	小林 忠	島田紀夫	平野 実	中山 暁
寄付助成委員会							
委員長	鵜澤昌和						
委員	加嶋昭男	村上 浩	平野 実	島田紀夫			
常務理事							
	中山 暁						
事務局							
事務局長	遠藤長夫						
ブリヂストン美術館							
館長	島田紀夫						
石橋美術館							
館長	平野 実						

Brief Histories of the Museums

Bridgestone Museum of Art

On January 8, 1952, ISHIBASHI Shojiro (1889-1976), the founder of the Bridgestone Corporation, wishing to promote cultural development in Japan, opened to the public a museum of art within the newly-completed Bridgestone Building under the name of the "Bridgestone Gallery". The works of art, both Japanese and foreign, which he had collected over the years formed the nucleus of the exhibits. In April 1956, the Ishibashi Foundation was established to take over the management of the Gallery, and in September 1961, ISHIBASHI donated the works in the Gallery to the Foundation. In January 1968, the English name was changed from the "Bridgestone Gallery" to the "Bridgestone Museum of Art". In January 2003, the ground floor was enlarged and a tea room was opened.

Ishibashi Museum of Art

On April 26, 1956, in commemoration of the 25th anniversary of the Bridgestone Corporation, ISHIBASHI Shojiro donated the Ishibashi Cultural Center to his home town of Kurume to render a public service and promote cultural development. The Ishibashi Museum of Art (originally the Ishibashi Art Gallery) is the principal institution in the Center. In 1977, the Museum building was enlarged and renovated, thanks to a contribution from the Ishibashi family, and in April of the same year the city of Kurume entrusted the Ishibashi Foundation with the management of the Museum.

On January 8, 1995, ISHIBASHI Kan'ichiro, son of ISHIBASHI Shojiro donated to the city of Kurume a new museum especially designated to exhibit Shojiro's collection of Asian Arts, such as brush painting, calligraphy, porcelain works. It has been open to the public since October 17, 1996.

Organization and Management

Ishibashi Foundation (As of December 31, 2006)

President of the Board of Directors		ISHIBASHI Hiroshi		
Directors	UZAWA Masakazu	KASHIMA Akio	NAKAYAMA Akira	HIRANO Minoru
	KASE Hideaki	SHIMADA Norio		
Auditors	KITOKU Masayuki	YUASA Tatsusuke		
Council Members	ISHII Koichiro	TAKASAKI Yoshiro	TAKASHINA Shuji	ISHIKURE Kazuo
	ENDO Takeo	MURAKAMI Hiroshi	KOBAYASHI Tadashi	ISHIBASHI Tomoko
	MITOOKA Eiji			
Executive Committee of the Museums				
Chairman	ISHIBASHI Hiroshi			
Members	KAMON Yasuo	TAKASHINA Shuji	TOMIYAMA Hideo	KOBAYASHI Tadashi
	SHIMADA Norio	HIRANO Minoru	NAKAYAMA Akira	
Program Development Grant Committee				
Chairman	UZAWA Masakazu			
Members	KASHIMA Akio	MURAKAMI Hiroshi	HIRANO Minoru	SHIMADA Norio
Managing Director	NAKAYAMA Akira			
Administration				
Executive Secretary	ENDO Takeo			
Bridgestone Museum of Art				
Director	SHIMADA Norio			
Ishibashi Museum of Art				
Director	HIRANO Minoru			

〈特別展〉

石橋財団50周年記念 雪舟からポロックまで

2006年4月8日(土)ー6月4日(日)

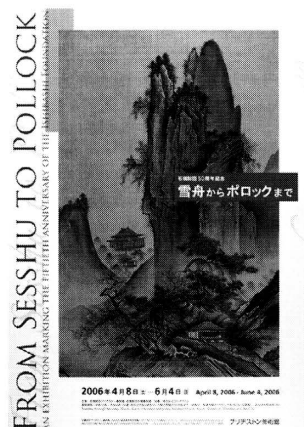
会場: 全館

主催: 石橋財団ブリヂストン美術館 / 石橋財団石橋美術館

協賛: 株式会社ブリヂストン

出品内容: 油彩, アクリル112点, 日本画14点, 水彩, パステル, グワッシュ, 墨
など11点, 彫刻26点, 陶磁器12点, その他2点 計177点

入場者総数: 48,973人(1日平均979人)



展覧会ポスター

出品目録:

1. バーバラ・ヘップワース《翼のある人物I》/ 1957年 / 真鍮, 鉄線 / H.145.5cm
2. アリスティド・マイヨール《欲望》/ 1905-08年 / ブロンズ(レリーフ) / 119.5×114.4cm
3. コンスタンティン・ブランクーシ《接吻》/ 1907-10年 / 石膏 / H.28.0cm
4. アレキサンダー・アーキベンコ《ゴンドラの船頭》/ 1914年 / ブロンズ / H.83.0cm
5. オシップ・ザツキン《母子》/ 1919年 / 着色されたセメント / H.48.6cm
6. オシップ・ザツキン《三美神》/ 1950年 / ブロンズ / H.76.7cm
7. オシップ・ザツキン《ボモナ(トルソ)》/ 1951年 / 黒檀 / H.131.0cm
8. ヘンリー・ムア《横たわる人体》/ 1976年 / ブロンズ / H.39.8cm
9. マリノ・マリニ《騎手》/ 1952年 / ブロンズ / H.58.0cm
10. オノレ・ドーミエ《ラタポワール》/ 1850年頃 / ブロンズ / H.43.5cm
11. エドガー・ドガ《右手で右足を持つ踊り子》/ 1896-1911年 / ブロンズ / H.50.3cm
12. オーギュスト・ロダン《立てるフォーネス》/ 1884年頃 / 大理石 / H.71.0cm
13. エミール=アントワーヌ・ブールデル《風の中のペートーヴェン》/ 1904-08年 / ブロンズ / H.124.8cm
14. パブロ・ピカソ《道化師》/ 1905年 / ブロンズ / H.40.6cm
15. アルベルト・ジャコメッティ《デイエゴの胸像》/ 1954-55年 / ブロンズ / H.55.0cm
16. 《女の胸像》/ シュメール / 紀元前24世紀 / 閃緑石 / H.55.0cm
17. 《人物像》/ パルミユラ / 1-2世紀 / 石灰石 / H.50.8cm
18. 《セクメト神像》/ エジプト / 紀元前14世紀 / 黒花崗岩 / H.177.0cm
19. レリーフ断片《アヌビス神礼拝図》/ エジプト / 紀元前13世紀 / 砂岩 / 66.0×58.0cm
20. 《彩色木棺》/ エジプト / 紀元前13世紀 / 木 / 110.0×43.0cm
21. 《聖猫》/ エジプト / 紀元前950-660年 / ブロンズ / H.48.2cm
22. 《獅子頭部》/ ギリシア / 紀元前5世紀 / 大理石 / H.42.0cm
23. 《哲人の顔》/ ギリシア / 紀元前4世紀 / 大理石 / H.29.4cm
24. 《ヴィーナス》/ ギリシア / ヘレニスティック期(紀元前323-30年) / 大理石 / H.139.0cm

-
25. コリントス球形アリュバロス「ルクスス・グループ」(?)《鷺と鶏図》/ギリシア/紀元前610-590年/
H.10.8cm
 26. アッティカ黒絵式頸部アンフォラ「プーローニユ441の画家」《ヘラクレスとケルベロス図》/ギリシア/
紀元前520-510年/H.35.2cm
 27. カンパニア赤絵式ヒュドリア「ラゲットの画家」《ディオスクーロイ図》/ギリシア/紀元前350年頃/
H.32.5cm
 28. 建築装飾フリーズ部分《泉水に向う二頭の馬》/エトルリア/紀元前550-540年/彩色テラコッタ/48.5×
50.7cm
 29. 壁画断片《ディオニュソス図》/ヘルクラネウム/1世紀/フレスコ/20.5×54.5cm
 30. レンブラント・ファン・レイン《聖書あるいは物語に取材した夜の情景》/1626-28年/油彩・銅板/
22.1×17.1cm
 31. カミュー・コロー《イタリアの女》/1826-28年/油彩・カンヴァス/33.4×21.3cm
 32. カミュー・コロー《ヴィル・ダヴレー》/1835-40年/油彩・カンヴァス/51.1×46.6cm
 33. カミュー・コロー《オンフルールのトゥータン農場》/1845年頃/油彩・カンヴァス/44.4×63.8cm
 34. カミュー・コロー《森の中の若い女》/1865年/油彩・板/54.7×38.9cm
 35. オノレ・ドーミエ《山中のドン・キホーテ》/1850年頃/油彩・板/39.6×31.2cm
 36. ギュスターヴ・クールベ《雪の中を駆ける鹿》/1856-57年頃/油彩・カンヴァス/93.5×148.8cm
 37. ウジェーヌ・ブーダン《トルーヴィル近郊の浜》/1865年頃/油彩・板/35.7×57.7cm
 38. エドゥワール・マネ《オペラ座の仮装舞踏会》/1873年/油彩・カンヴァス/46.7×38.2cm
 39. エドゥワール・マネ《自画像》/1878-79年/油彩・カンヴァス/95.4×63.4cm
 40. エドゥワール・マネ《メリー・ローラン》/1882年/パステル・カンヴァス/41.6×37.1cm
 41. エドガー・ドガ《レオポール・ルヴェールの肖像》/1874年頃/油彩・カンヴァス/65.0×54.0cm
 42. エドガー・ドガ《踊りの稽古場にて》/1895-98年/パステル・紙/45.9×89.8cm
 43. アルフレッド・シスレー《森へ行く女たち》/1866年/油彩・カンヴァス/65.2×92.2cm
 44. アルフレッド・シスレー《サン=マメス六月の朝》/1884年/油彩・カンヴァス/54.6×73.4cm
 45. クロード・モネ《アルジャントゥイユの洪水》/1872-73年/油彩・カンヴァス/54.4×73.3cm
 46. クロード・モネ《アルジャントゥイユ》/1874年/油彩・カンヴァス/43.0×70.0cm
 47. カミュー・ピサロ《ブージヴァルのセヌ河》/1870年/油彩・カンヴァス/51.4×82.2cm
 48. カミュー・ピサロ《菜園》/1878年/油彩・カンヴァス/55.2×45.9cm
 49. クロード・モネ《雨のベリール》/1886年/油彩・カンヴァス/60.5×73.7cm
 50. クロード・モネ《霧のテームズ河》/1901年/パステル・紙/31.1×48.0cm
 51. クロード・モネ《睡蓮》/1903年/油彩・カンヴァス/81.5×100.5cm
 52. クロード・モネ《睡蓮の池》/1907年/油彩・カンヴァス/100.6×73.5cm
 53. クロード・モネ《黄昏, ヴェネツィア》/1908年頃/油彩・カンヴァス/73.0×92.5cm
 54. ピエール=オーギュスト・ルノワール《すわるジョルジェット・シャルパンティエ嬢》/1876年/油彩・
カンヴァス/97.8×70.8cm
 55. ピエール=オーギュスト・ルノワール《少女》/1887年/パステル・紙/60.8×46.0cm
 56. ピエール=オーギュスト・ルノワール《カーニュのテラス》/1905年/油彩・カンヴァス/46.3×55.0cm
 57. 浅井忠《グレーの橋》/1902年/水彩・紙/28.4×43.5cm
 58. 黒田清輝《針仕事》/1890年/油彩・カンヴァス/81.2×65.0cm/石橋美術館
 59. 藤島武二《天平の面影》/1902年/油彩・カンヴァス/197.5×94.0cm/石橋美術館
 60. 山下新太郎《読書》/1908年/油彩・カンヴァス/100.0×73.1cm
 61. 青木繁《天平時代》/1904年/油彩・カンヴァス/45.3×75.5cm
 62. 青木繁《海の幸》/1904年/油彩・カンヴァス/70.2×182.0cm/石橋美術館
 63. 青木繁《わだつみのいろこの宮》/1907年/油彩・カンヴァス/180.0×68.3cm/石橋美術館
-

-
64. ギュスターヴ・モロー《化粧》/1885-90年頃/グワッシュ、水彩・紙/33.0×19.3cm
65. ポール・セザンヌ《鉢と牛乳入れ》/1873-77年頃/油彩・カンヴァス/20.0×18.1cm
66. ポール・セザンヌ《帽子をかぶった自画像》/1890-94年頃/油彩・カンヴァス/61.2×50.1cm
67. ポール・セザンヌ《サント=ヴィクトワール山とシャトー・ノワール》/1904-06年頃/油彩・カンヴァス/66.2×82.1cm
68. オディロン・ルドン《供物》/油彩・厚紙/33.2×13.7cm
69. オディロン・ルドン《神秘の語らい》/油彩・カンヴァス/52.1×31.5cm
70. オーギュスト・ロダン《カミーユ・クローデル》/1889年/ブロンズ/H.24.5cm
71. ポール・ゴーガン《馬の頭部のある静物》/1886年/油彩・カンヴァス/49.0×38.5cm
72. ポール・ゴーガン《ボン=タヴェン付近の風景》/1888年/油彩・カンヴァス/72.9×92.2cm
73. ポール・ゴーガン《乾草》/1889年/油彩・カンヴァス/55.4×46.2cm
74. フィンセント・ファン・ゴッホ《モンマルトルの風車》/1886年/油彩・カンヴァス/48.2×39.5cm
75. 藤島武二《黒扇》/1908-09年/油彩・カンヴァス/63.7×42.4cm
76. 藤島武二《屋島よりの遠望》/1932年/油彩・カンヴァス/52.9×72.5cm/石橋美術館
77. 藤島武二《東海旭光》/1932年/油彩・カンヴァス/65.2×90.9cm
78. ピエール・ボナール《灯下》/1899年/油彩・紙/42.5×50.4cm
79. ピエール・ボナール《桃》/1920年/油彩・カンヴァス/36.0×38.1cm
80. ピエール・ボナール《ヴェルノン付近の風景》/1929年/油彩・カンヴァス/63.4×62.4cm
81. ポール・シニャック《コンカルノー港》/1925年/油彩・カンヴァス/73.4×53.9cm
82. アンリ・マティス《画室の裸婦》/1899年/油彩・紙/66.3×50.5cm
83. アンリ・マティス《コリウール》/1905年/油彩・厚紙/24.5×32.4cm
84. アンリ・マティス《縞ジャケット》/1914年/油彩・カンヴァス/123.6×68.4cm
85. アンリ・マティス《横たわる裸婦》/1919年/油彩・カンヴァスボード/32.9×40.8cm
86. アンリ・マティス《両腕をあげたオダリスク》/1921年/油彩・カンヴァスボード/45.9×38.2cm
87. アンリ・マティス《ルー川のほとり》/1925年/油彩・カンヴァス/38.3×47.0cm
88. アンリ・マティス《青い胴着の女》/1935年/油彩・カンヴァス/46.0×33.0cm
89. ピート・モンドリアン《砂丘》/1909年/油彩、鉛筆・厚紙/29.6×39.1cm
90. モーリス・ド・ヴラマンク《運河船》/1905-06年/油彩・カンヴァス/60.2×73.0cm
91. アンドレ・ドラン《聖母子》/1913年頃/油彩・板/27.0×21.6cm
92. 安井曾太郎《薔薇》/1932年/油彩・カンヴァス/63.0×51.9cm
93. 安井曾太郎《安倍能成君像》/1955年/油彩・カンヴァス/66.9×47.0cm
94. 梅原龍三郎《脱衣婦》/1912年/油彩・カンヴァス/60.0×38.6cm
95. ジョルジュ・ルオー《郊外のキリスト》/1920-24年/油彩・紙/92.0×73.6cm
96. ジョルジュ・ルオー《ピエロ》/1925年/油彩・紙/75.2×51.2cm
97. モーリス・ユトリロ《サン=ドニ運河》/1906-08年/油彩・紙/53.4×74.5cm
98. アメデオ・モディリアーニ《若い農夫》/1918年頃/油彩・カンヴァス/73.4×50.3cm
99. 岸田劉生《麗子坐像》/1920年/水彩・紙/34.5×47.5cm
100. カイム・スーティン《大きな樹のある南仏風景》/1924年/油彩・紙/49.8×60.6cm
101. ゲオルゲ・グロス《ブロムナード》/1926年/油彩・カンヴァス/100.3×125.7cm
102. 関根正二《子供》/1919年/油彩・カンヴァス/60.9×45.7cm
103. アンリ・ルソー《イヴリー河岸》/1907年頃/油彩・カンヴァス/46.1×55.0cm
104. アンリ・ルソー《牧場》/1910年/油彩・カンヴァス/46.0×55.3cm
105. ラウル・デュフィ《静物》/1915-20年頃/油彩・カンヴァス/38.2×45.9cm
106. ラウル・デュフィ《オーケストラ》/1942年/油彩・カンヴァス/65.2×81.1cm
107. パブロ・ピカソ《ブルゴーニュのマール瓶、グラス、新聞紙》/1913年/油彩、砂、新聞紙・カンヴァス/
-

46.3×38.4cm

108. パブロ・ピカソ《生木と枯木のある風景》/1919年/油彩・カンヴァス/49.4×65.4cm
109. パブロ・ピカソ《女の顔》/1923年/油彩、砂・カンヴァス/46.1×38.1cm
110. パブロ・ピカソ《腕を組んですわるサルタンバンク》/1923年/油彩・カンヴァス/130.8×98.0cm
111. パブロ・ピカソ《茄子》/1946年/油彩、グワッシュ・紙/51.1×66.2cm
112. ジョルジュ・ブラック《梨と桃》/1924年/油彩・板/27.7×45.3cm
113. マリー・ローランサン《二人の少女》/1923年/油彩・カンヴァス/64.9×54.2cm
114. 小出楯重《帽子をかぶった自画像》/1924年/油彩・カンヴァス/126.0×91.3cm
115. 小出楯重《横たわる裸身》/1930年/油彩・カンヴァス/50.0×72.9cm
116. 長谷川利行《動物園風景》/1937年頃/油彩・カンヴァス/45.5×52.7cm/石橋美術館
117. 佐伯祐三《コルドヌリ(靴屋)》/1925年/油彩・カンヴァス/72.6×60.3cm/石橋美術館
118. 佐伯祐三《広告貼り》/1927年/油彩・カンヴァス/73.4×60.2cm/石橋美術館
119. 佐伯祐三《テラスの広告》/1927年/油彩・カンヴァス/54.2×65.4cm
120. パウル・クレー《鳥》/1932年/油彩、砂を混ぜた石膏・板/55.2×85.2cm
121. 藤田嗣治《横たわる女と猫》/1932年/油彩・カンヴァス/65.0×100.0cm/石橋美術館
122. 藤田嗣治《猫のいる静物》/1939-40年/油彩・カンヴァス/80.6×99.9cm
123. 藤田嗣治《ドルドーニュの家》/1940年/油彩・カンヴァス/45.5×53.3cm
124. ジョルジョ・デ・キリコ《吟遊詩人》/油彩・カンヴァス/62.4×49.8cm
125. 国吉康雄《夢》/1922年/油彩・カンヴァス/51.5×76.7cm
126. 国吉康雄《横たわる女》/1929年/油彩・カンヴァス/41.3×76.4cm
127. ジョアン・ミロ《絵画》/1927年/油彩・カンヴァス/24.1×33.0cm
128. 古賀春江《素朴な月夜》/1929年/油彩・カンヴァス/116.5×91.0cm/石橋美術館
129. 古賀春江《鳥籠》/1929年/油彩・カンヴァス/111.2×145.0cm/石橋美術館
130. 古賀春江《単純な哀話》/1930年/油彩・カンヴァス/116.7×91.4cm/石橋美術館
131. ジャン・フォートリエ《人質の頭部》/1945年/油彩・カンヴァスに貼られた紙/34.2×26.4cm
132. ジャン・フォートリエ《旋回する線》/1963年/油彩・カンヴァスに貼られた紙/59.9×73.1cm
133. 岡鹿之助《雪の発電所》/1956年/油彩・カンヴァス/72.8×90.9cm
134. ジャン・デュビュッフエ《暴動》/1961年/油彩・カンヴァス/105.0×80.8cm
135. 猪熊弦一郎《Sky Triangle》/1968年/油彩・カンヴァス/127.2×102.0cm
136. ピエール・アレシンスキー《田園の一隅》/1951年/油彩・カンヴァス/99.5×80.3cm
137. ベルナル・デュビュッフエ《アナベル夫人像》/1960年/油彩・カンヴァス/130.5×97.5cm
138. ハンス・ホフマン《Push and Pull II》/1950年/油彩・カンヴァス/122.5×92.1cm
139. アンリ・ミショー《無題》/1970年/水彩・紙/49.6×31.8cm
140. アンリ・ミショー《無題》/1973年/グワッシュ、アクリル・紙/33.0×50.2cm
141. アンリ・ミショー《無題》/1979-81年/墨、アクリル・紙/49.9×64.7cm
142. 斎藤義重《作品》/1961年/油彩・合板/90.9×116.8cm
143. 斎藤義重《作品》/1965年/油彩・合板/45.5×52.9cm
144. 川端実《無題》/1993年/アクリル・カンヴァス/163.0×213.5cm
145. ジャクソン・ポロック《Number 2, 1951》/1951年/油彩・カンヴァス/96.9×66.2cm
146. 菅井汲《OKA》/1961年/油彩・カンヴァス/99.7×81.3cm
147. ピエール・スーラージュ《絵画, 26 May 1969》/1969年/油彩・カンヴァス/72.9×54.1cm
148. 野見山曉治《風の便り》/1997年/油彩・カンヴァス/112.3×145.8cm/石橋美術館
149. ザオ・ウーキー《07.06.85》/1985年/油彩・カンヴァス/114.8×195.2cm
150. ザオ・ウーキー《風景 2004》/2004年/油彩・カンヴァス/97.1×195.1cm
151. 田淵安一《孤独の山 Montagne Solitaire》/1956年/油彩・カンヴァス/50.0×99.5cm

-
152. 堂本尚郎《連続の溶解9》/1964年/油彩, アクリル・カンヴァス / 199.7×150.7cm
153. 《古今和歌集巻第一断簡 高野切》/平安時代 11世紀/紙本墨書 / 25.8×48.8cm / 石橋美術館
154. 《伊勢集断簡 石山切(にさへや)》/平安時代 12世紀/紙本墨書 / 20.2×15.4cm / 石橋美術館
155. 《伊勢集断簡 石山切(ももしきの)》/平安時代 12世紀/紙本墨書 / 20.4×15.8cm / 石橋美術館
156. 《伊勢集断簡 石山切(みそめすも)》/平安時代 12世紀/紙本墨書 / 20.2×15.7cm / 石橋美術館
157. 因陀羅《禅機図断簡 丹霞焼仏図》/元時代 14世紀/紙本墨画 / 35.0×36.8cm / 石橋美術館
158. 片桐石州《桜の歌》/江戸時代 17世紀/紙本墨書 / 16.0×15.0cm / 石橋美術館
159. 雪舟《四季山水図》/室町時代 15世紀/絹本墨画淡彩 / 70.6×44.2cm(各幅)/ 石橋美術館
160. 宗達派《保元平治物語絵扇面》/江戸時代 17世紀/紙本著色 / 18.3×55.6cm(一面)/ 石橋美術館
161. 狩野典信《墨松墨梅図屏風》/江戸時代 18世紀後半/紙本金地墨画 / 180.0×544.0cm(各隻)/ 石橋美術館
162. 円山応挙《牡丹孔雀図屏風》/江戸時代 1781年/絹本著色 / 136.0×168.8cm / 石橋美術館
163. 青木木米《秋溪渡橋》/江戸時代 19世紀初頭/紙本墨画淡彩 / 24.4×19.8cm / 石橋美術館
164. 中村芳中《四季草花図扇面貼交屏風》/江戸時代 19世紀初頭/紙本著色 / 157.2×157.2cm(各隻)/ 石橋美術館
165. 鈴木其一《富士筑波山図屏風》/江戸時代 19世紀前半/紙本金地著色 / 128.3×274.4cm(各隻)/ 石橋美術館
166. 池田孤邨《青楓紅楓図屏風》/江戸時代 19世紀前半/紙本金地著色 / 66.2×205.4cm(各隻)/ 石橋美術館
167. 《青磁長頸花生》/南宋時代 12-13世紀/磁器 / H.30.6cm / 石橋美術館
168. 《飛青磁花瓶》/元時代 14世紀/磁器 / H.27.0cm / 石橋美術館
169. 《色絵菊流水文皿》/江戸時代 1660-1670年/磁器 / H.5.0cm, D.22.8cm / 石橋美術館
170. 《色絵竹梅虎文六角瓶》/江戸時代 1670-1700年/磁器 / H.29.0cm / 石橋美術館
171. 《萩茶碗》/江戸時代 17世紀/陶器 / H.8.5cm, D.12.7cm / 石橋美術館
172. 《伊羅保茶碗》/李朝 17世紀/陶器 / H.8.9cm, D.15.7cm / 石橋美術館
173. 《唐物文琳茶入 銘「宝袋」》/元時代 13世紀後半-14世紀/陶器 / H.6.2cm / 石橋美術館
174. 《薩摩肩衝茶入 銘「松波」》/江戸時代初期 17世紀初頭/陶器 / H.9.1cm / 石橋美術館
175. 《瀬戸肩衝茶入》/江戸時代初期 17世紀初頭/陶器 / H.8.3cm / 石橋美術館
176. 片桐石州《茶杓 銘「松」》/江戸時代 17世紀/竹 / L.16.7cm / 石橋美術館
177. 随流斎《茶杓 銘「碌々」》/江戸時代 17世紀後半/竹 / L.17.6cm / 石橋美術館

* 所蔵の表記のない作品は、すべてブリヂストン美術館蔵。

関連事業：

土曜講座「石橋財団コレクションを語る—時空を越えた東西美術の饗宴」→p.59
ギャラリートーク→p.61

広報記録：

新聞・雑誌：

武田博志「多彩な東西の名作—雪舟からポロックまで展」『日本経済新聞』2006年4月11日
中村邦子「石橋財団50周年記念 雪舟からポロックまで展」『新美術新聞』2006年4月11日
山盛英司「健闘 雪舟もポロックも」『朝日新聞』2006年5月2日夕刊

テレビ：

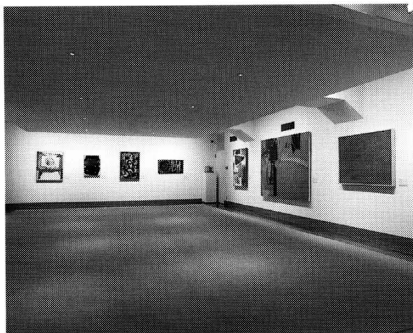
「新日曜美術館」（アートシーン）NHK教育テレビ，2006年5月14日放映
「迷宮美術館」NHK総合，2006年4月17日/NHK BS2，4月23日/NHKハイビジョン，5月19日放映



エントランス



会場風景



会場風景



会場風景

石橋美術館開館50周年記念 坂本繁二郎展

2006年6月16日(木)－7月8日(金)

会場：第1室, 第2室, 第4室－第10室

主催：石橋財団ブリヂストン美術館 / 石橋財団石橋美術館 / 日本経済新聞社

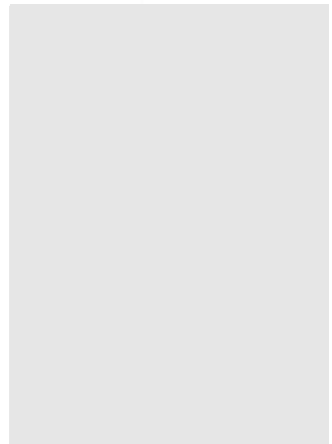
協賛：株式会社ブリヂストン

出品内容：油彩109点, 水彩など33件, 版画6件, その他5点, 資料19件 計172件

入場者総数：23,684人(1日平均1,184人)

出品目録：「展覧会 石橋美術館〈特別展〉」の同展の項を参照。

ただし, nos.13, 161, 175, 176は東京会場(ブリヂストン美術館)には不出品。



展覧会チラシ

関連事業：

土曜講座「坂本繁二郎を知る三週間」→ p.59

ギャラリートーク→p.61

広報記録：

新聞・雑誌：

西田健作「一展逸点：人柄がにじむ絵と逸話」『朝日新聞』2006年6月23日夕刊

Robert Reed, "How Hanjiro helped invent Japanese oil painting", *The Daily Yomiuri*, June 24, 2006

前田恭二「美術：坂本繁二郎展」『読売新聞』2006年6月29日

「Exhibition Special：坂本繁二郎展」『月刊ギャラリー』Vol.254, 2006年6月号, p.17

長谷川智恵子「この美術館のこの美術展」『婦人画報』1236号, 2006年7月号, p.414

テレビ：

「新日曜美術館」NHK教育テレビ, 2006年6月11日放映

「首都圏News」NHK総合, 2006年6月16日放映

ブリズム：オーストラリア現代美術展

2006年10月7日(土)－12月3日(日)

会場：第3室－第10室

主催：石橋財団ブリヂストン美術館

後援：オーストラリア大使館

協賛：株式会社ブリヂストン / RioTinto

協力：カンタス航空

企画協力：フリンダーズ大学フリンダーズ美術館

出品内容：計73点

入場者総数：15,403人(1日平均308人)

※石橋財団50周年記念展覧会のひとつであり、「2006年日豪交流年」公式
主要プログラムでもある。

展覧会ポスター

出品目録：

1. アビー・ロイ・ケマーレ 《ブッシュ・リーフ・ドリーミング》 / 2003年 / synthetic polymer paint on canvas / 153.0×122.0cm / Mayne Contemporary Art Fund 2004, Art Gallery of South Australia, Adelaide
2. アビー・ロイ・ケマーレ 《ボディ・ペインティング(アウィールヤ)》 / 2003年 / synthetic polymer paint on Belgian linen / 182.0×122.0cm / Collection of the Adelaide Festival Centre Trust. Donated by the Adelaide Festival Centre Foundation with funds gifted by the Adelaide City Council
3. アビー・ロイ・ケマーレ 《ボディ・ペイント》 / 2005年 / synthetic polymer paint on Belgian linen / 122.0×182.0cm / Private Collection, Gallerie Australis, Adelaide
4. アー・シアン 《ヒューマン、ヒューマン―花と鳥》 / 2000-01年 / resin, fibreglass cast, lacquer / 45.4×46.0×28.0cm / National Gallery of Victoria, Melbourne, Purchased with funds from the Victorian Foundation for Living Australian Artists, 2004
5. ブルック・アンドリュース 《セクシーでアブナイ》 / 1997年 / photographic print, mounted on clear perspex / 145.0×97.0cm / Courtesy of the artist and Greenaway Art Gallery, Adelaide
6. クリフォード・ポッサム・ジャバルジャリ 《男の恋の物語》 / 1978年 / synthetic polymer paint on canvas / 216.5×260.5cm / Visual Arts Board, Australian Contemporary Art Acquisitions Program 1980, Art Gallery of South Australia, Adelaide
7. クリフォード・ポッサム・ジャバルジャリ 《ウォーター・ドリーミング》 / 1983年 / synthetic polymer paint on canvas / 153.3×183.5cm / Collection of Flinders University Art Museum, Flinders University
8. クリントン・ネイン 《青の7日間 No.3, 6, 7》 / 2004年 / bleach on cotton / each 182.0×92.0cm / Collection of the Adelaide Festival Centre Trust. Donated by the Adelaide Festival Centre Foundation with funds gifted by the Adelaide City Council
9. ダレン・シーヴェス 《教会1》 / 2000年 / cibachrome photograph / 100.0×120.0cm / Collection of Flinders University Art Museum, Flinders University
10. ダレン・シーヴェス 《1901》 / 2004年 / cibachrome print / 120.0×100.0cm / Courtesy of the artist and Greenaway Art Gallery, Adelaide

-
11. ドロシー・ナバンガーディ 《カーラングー(穴掘り棒)》 / 2001年 / synthetic polymer paint on stretched linen / 198.0×122.0cm / Collection of the Adelaide Festival Centre Trust. Donated by the Adelaide Festival Centre Foundation with funds gifted by the Adelaide City Council
 12. ドロシー・ナバンガーディ 《ミナミナの塩》 / 2002年 / synthetic polymer paint on canvas / 122.0×198.0cm / Santos Fund for Aboriginal Art 2002, Art Gallery of South Australia, Adelaide
 13. エミリー・カーム・ウンワリイ 《無題》 / synthetic polymer paint on paper (4 from set of 5) / each 27.0×28.0 cm / Collection of Flinders University Art Museum, Flinders University
 14. エミリー・カーム・ウンワリイ 《アヌージャ(野生の芋)》 / 1989年 / synthetic polymer paint on canvas / 91.1×151.2cm / National Gallery of Victoria, Melbourne, Purchased from Admission Funds, 1990
 15. エミリー・カーム・ウンワリイ 《無題 No. 1-5》 / 1990年代 / synthetic polymer paint on canvas / 135.0×104.5cm / South Australian Government Grant 1995, Art Gallery of South Australia, Adelaide
 16. エミリー・カーム・ウンワリイ 《カーメ・サマー・アウィールヤ》 / 1992年 / synthetic polymer paint on Belgian linen / 121.0×208.0cm / Private Collection, Australia
 17. ユベナ・ナンピジン 《ケリジティ》 / 2004年 / synthetic polymer paint on canvas / 296.0×120.0cm / Courtesy of Beverly & Anthony Knight, Alcaston Gallery, Melbourne
 18. フィオナ・フォレイ 《バジュラの女》 / 1994年 / type C photograph, Edition 7/15 / 3× (45.0×35.0cm) / Courtesy of the artist and Niagara Galleries, Melbourne
 19. フィオナ・フォレイ 《先住民の血》 / 1994年 / type C photograph, Edition 6/15 / 40.0×50.0cm / Courtesy of the artist and Niagara Galleries, Melbourne
 20. フィオナ・ホール 《下層植物》 / 1999-2004年 / glass beads, silver wire, plastic, vitrine dimensions (180.0×170.0×90.0cm) / Courtesy of the artist and Roslyn Oxley9 Gallery, Sydney
 21. フィオナ・ホール 《運が向くとき》 / 2002-05年 / gouache on bank notes / multi-part installation, 100 parts / Courtesy of the artist and Roslyn Oxley9 Gallery, Sydney
 22. フレディ・ニャーマリニー・ティムス 《ボーアブ》 / 1997年 / synthetic polymer paint on stretched canvas / 120.0×120.0cm / Collection of the Adelaide Festival Centre Trust. Donated by the Adelaide Festival Centre Foundation with funds gifted by the Adelaide City Council
 23. ジンジャー・ライリー・マンドゥワラワラ 《海鷲とフォーアーチャーの丘》 / 1993年 / synthetic polymer paint on canvas / 171.0×288.7cm / National Gallery of Victoria, Melbourne, Purchased with the assistance of the National Gallery Society of Victoria, 1994
 24. ゴードン・ベネット 《Fig. one (gulf)》 / 1992年 / oil & synthetic polymer paint on canvas / a & b 130.4×162.0 cm / Moet & Chandon Art Acquisition Fund 1992, Art Gallery of South Australia, Adelaide
 - 25-1. ゴードン・ベネット 《Ask A Policeman》 / 1993年 / etching (from set of 12) / image 19.7×14.8cm / Collection of Flinders University Art Museum, Flinders University
 - 25-2. ゴードン・ベネット 《Apostle Of Silence》 / 1993年 / etching (from set of 12) / image 29.5×19.7cm / Collection of Flinders University Art Museum, Flinders University
 - 25-3. ゴードン・ベネット 《Culture Bag》 / 1993年 / etching (from set of 12) / image 19.7×14.8cm / Collection of Flinders University Art Museum, Flinders University
 - 25-4. ゴードン・ベネット 《Created By Flux》 / 1993年 / etching (from set of 12) / image 29.5×19.7cm / Collection of Flinders University Art Museum, Flinders University
 26. ゴードン・ベネット 《バスキアへの言葉(シティ)》 / 2002年 / synthetic polymer paint on linen / 152.0×182.5cm / South Australian Government Grant 2002, Art Gallery of South Australia, Adelaide
 27. ホセイン・ヴァラマネシュ 《錠剤のドット・ペインティング》 / 1999年 / tablet and paper / 44.0×44.0cm / Collection of Flinders University Art Museum, Flinders University
 28. ホセイン・ヴァラマネシュ & アンジェラ・ヴァラマネシュ 《無題》 / 2003年 / Rice paper, stick, brass pins / 63.0 × 99.5 × 6.0 cm / Courtesy of the artists and Greenaway Art Gallery, Adelaide
-

-
29. ホセイン・ヴァラマネシュ 《落ちていた枝》 / 2005年 / bronze / 7.0 × 160.0 cm (diam) / Gift of the Art Gallery of South Australia Contemporary Collectors 2005, Art Gallery of South Australia, Adelaide
 30. イマンツ・ティラーズ 《プリズム》 / 1986年 / synthetic polymer paint and oil stick on 165 canvas boards / 260.0 × 571.0 cm / Private Collection, Sydney
 31. イマンツ・ティラーズ 《自然は語る D》 / 2005年 / synthetic polymer paint, gouache on 16 canvas boards / 102.0 × 142.0 cm / Courtesy of the artist
 32. イマンツ・ティラーズ 《自然は語る H》 / 2006年 / synthetic polymer paint, gouache on 16 canvas boards / 102.0 × 142.0 cm / Courtesy of the artist
 33. ジョン・マウンジュル 《ミルミルンキャンの水溜まり》 / 2002年 / natural ochres on bark / 186.0 × 78.5 cm / Santos Fund for Aboriginal Art 2003, Art Gallery of South Australia, Adelaide
 34. ジュディ・ワトソン 《盾》 / 1991年 / pigment, charcoal, ink, synthetic polymer paint and pastel on canvas / 189.0 × 147.0 cm / Collection of Wollongong City Gallery, purchased with assistance from the NSW Ministry for the Arts 1998
 35. ジュディ・ワトソン 《母語を奪われて》 / 1997年 / etching, coloured ink on paper / image 28.8 × 67.8 cm, mount 66.2 × 81.3 cm / Collection of Flinders University Art Museum, Flinders University
 36. ジュディ・ワトソン 《博物館に展示された祖先の皮膚》 / 1997年 / etching, black ink on paper / image 29.8 × 21.1 cm, mount 61.8 × 45.6 cm / Collection of Flinders University Art Museum, Flinders University
 37. ジュディ・ワトソン 《博物館に展示された祖先の髪》 / 1998年 / etching, black ink on paper / image 30.4 × 21.5 cm, mount 61.8 × 45.6 cm / Collection of Flinders University Art Museum, Flinders University
 38. ジュディ・ワトソン 《流し網》 / 1998年 / pigment, cotton, cord and stringy bark on canvas / 180.0 × 136.0 cm / National Gallery of Victoria, Melbourne, Purchased, 1999
 39. ジュリー・ドーリング 《ペーパー・ドレス》 / 2003年 / synthetic polymer paint and earth pigment on canvas / 150.0 × 120.0 cm / Collection of the Adelaide Festival Centre Trust. Donated by the Adelaide Festival Centre Foundation with funds gifted by the Adelaide City Council
 40. キャサリン・ペチャリ 《山魔王トカゲのドリーミング(冬の砂嵐)》 / 1996年 / synthetic polymer paint on canvas / 183.5 × 183.5 cm / Aileen Thompson Bequest Fund through the Art Gallery of South Australia Foundation 1996, Art Gallery of South Australia, Adelaide
 41. キャサリン・ペチャリ 《山魔王トカゲのドリーミング(ひょうの降ったあとで)》 / 1997年 / synthetic polymer paint on canvas / 152.6 × 153.0 cm / National Gallery of Victoria, Melbourne, Presented through The Art Foundation of Victoria by Gallerie Australis, Member 1997
 42. キャサリン・ペチャリ 《棘魔王トカゲのドリーミング(水路と岩穴)》 / 2004年 / synthetic polymer paint on Belgian linen / 167.0 × 107.5 cm / Private Collection, Gallerie Australis, Adelaide
 43. ケン・サイデイ・シニア 《タイガー・シャークの頭飾り》 / 1990-91年 / plywood, wire, nylon strings, chicken feathers / 69.0 × 52.0 × 40.0 cm / Gift of Janet Worth 2000, Art Gallery of South Australia, Adelaide
 44. リー・キング=スミス 《無題 No. 10(内なる対話シリーズより)》 / 1991年 / direct positive colour photograph / 121.4 × 105.0 cm / Moet & Chandon Art Acquisition Fund 1994, Art Gallery of South Australia, Adelaide
 45. リー・キング=スミス 《無題(内なる対話シリーズより)》 / 1992年 / type C photograph (ed 2/25) / image 94.2 × 94.0 cm, sheet 102.0 × 102.0 cm / National Gallery of Victoria, Melbourne, Purchased, 2002
 46. マーガレット・ターナー・アペチャー 《プッシュ・オレンジ・ドリーミング》 / 2004年 / synthetic polymer paint on linen / 210.5 × 181.0 cm / Gift of the Art Gallery of South Australia Foundation 2005, Art Gallery of South Australia, Adelaide
 47. マーガレット・ターナー・アペチャー 《ボディペイント》 / 2005年 / synthetic polymer paint on Belgian linen / 122.0 × 182.0 cm / Private Collection, Gallerie Australis, Adelaide
 48. マイケル・ライリー 《無題(聖書: 雲より)》 / 2000年 / chromogenic pigment print, edition of 5 / 110.0 × 155.0 cm / Courtesy of Stills Gallery and the Michael Riley Foundation
-

-
49. マイケル・ライリー 《無題(ブーメラン:雲より)》/2000年 / chromogenic pigment print, edition of 5 / 110.0 × 155.0 cm / Courtesy of Stills Gallery and the Michael Riley Foundation
50. パンズィ・ナパンガーティ 《無題》/1989年 / synthetic polymer paint on canvas / 121.0 × 182.8 cm / Courtesy National Gallery of Victoria, Melbourne, Purchased from Admission Funds, 1989
51. バトリシア・ピッチニーニ 《実験室で(サイエンス・ストーリー・シリーズより)》/2002年 / c type photograph / Image 100.0 × 200.0 cm, Sheet 126.0 × 227.0 cm / South Australian Government Grant 2002, Art Gallery of South Australia, Adelaide
52. バトリシア・ピッチニーニ 《ファイアスターター(サイクルパップス・シリーズより)》/2005年 / fibre-glass, automotive paint, leather and stainless steel / 40.0 × 110.0 × 50.0 cm / Collection of Austcorp Group Ltd.
53. バトリシア・ピッチニーニ 《マンティス(サイクルパップス・シリーズより)》/2005年 / fibreglass, automotive paint, leather and stainless steel / 40.0 × 110.0 × 50.0 cm / Collection of Dr. Dick Quan
54. バトリシア・ピッチニーニ 《ネビュラ(サイクルパップス・シリーズより)》/2005年 / fibreglass, automotive paint, leather and stainless steel / 40.0 × 110.0 × 50.0 cm / Private collection, Sydney
55. バトリシア・ピッチニーニ 《私の赤ちゃんが...》/2005年 / (still), DVD 3 min 30 secs, edition of 6 / Courtesy of the artist and Roslyn Oxley9 Gallery, Sydney
56. バトリシア・ピッチニーニ 《自然の小さな救済者ー耐鉛害ボッサムの祖先》/2005年 / silicon, fibreglass, leather, plywood, hair / 2 parts : 90.0 × 45.0 × 45.0 cm; 70.0 × 35.0 × 35.0 cm, edition of 3 / Private Collection, Tasmania
57. バトリシア・ピッチニーニ 《自然の小さな救済者ー耐鉛害ボッサムの子孫》/2005年 / silicon, fibreglass, leather, plywood, hair / 2 parts : 90.0 × 45.0 × 45.0 cm; 70.0 × 35.0 × 35.0 cm, edition of 3 / Collection of Michael and Eleonora Triguboff
58. リー 《至近距離で撃て》/1999年 / type C photographs, glass, perspex, CD, Dimensions variable / South Australian Government Grant and Moet & Chandon Art Acquisition Fund 2000, Art Gallery of South Australia, Adelaide
59. ローズマリー・ラング 《燃えるエアーズロック No. 1》/2003年 / type C photograph / 85.0 × 135.0 cm / Collection of Lachlan Astle & Neil Matthews
60. ローズマリー・ラング 《燃えるエアーズロック No. 6》/2003年 / type C photograph / 110.0 × 224.0 cm / Collection of Peter Thomas, Melbourne
61. ローズマリー・ラング 《燃えるエアーズロック No. 12》/2003年 / type C photograph, 80.0 × 148.0 cm / Courtesy the artist and Tolarno Galleries, Melbourne
62. ロス・デイヴィス 《無題》/1971年 / poster paint with PVA Bondcrete glue on scrap particle board / 54.0 × 9.5 cm / Private Collection, Gallerie Australis, Adelaide
63. ローヴァ・トマス 《フクロウの物語》/1988年 / natural pigments on canvas / 139.0 × 99.0 cm / A.M. and A.R. Ragless Bequest Fund 1988, Art Gallery of South Australia, Adelaide
64. ローヴァ・トマス 《パルク湖》/1991年 / natural pigments on canvas / 168.0 × 183.0 cm / South Australian Government Grant 1991, Art Gallery of South Australia, Adelaide
65. サミュエル・ナマンジャ 《グンギュラ(風のドリーミング)》/2005年 / natural pigments on eucalyptus bark / 149.5 × 66.0 cm / d'Auvergne Boxall Bequest Fund 2005, Art Gallery of South Australia, Adelaide
66. ティム・ルーラ・ジャパルジャリ 《ロックワラビーのドリーミング》/1982年 / synthetic polymer paint on canvas / 120.8 × 179.0 cm / National Gallery of Victoria, Melbourne, Purchased from Admission Funds, 1987
67. トレイシー・モファット 《空高く No. 9》/1997年 / colour photolithograph on paper / 61.0 × 76.0 cm / South Australian Government Grant 1998, Art Gallery of South Australia, Adelaide
68. トレイシー・モファット 《空高く No. 12》/1997年 / colour photolithograph on paper / 61.0 × 76.0 cm / South Australian Government Grant 1998, Art Gallery of South Australia, Adelaide
69. トレイシー・モファット 《Love》/2003年 / DVD 21 min / Collection of the Adelaide Festival Centre Trust.
-

Donated by the Adelaide Festival Centre Foundation with funds gifted by the Adelaide City Council

70. ターキー・トルソン・ジュブルラ 《イリンガウンガウで槍をまっすぐにする》 / 1990年 / synthetic polymer paint on canvas / 181.5 × 243.5 cm / Gift of the Friends of the Art Gallery of South Australia 1990, Art Gallery of South Australia, Adelaide

関連事業：

10月8日(日)アーティスト・フロアトークを開催。

第4展示室：イマンツ・ティラーズ氏

第10展示室：フィオナ・ホール氏

第9展示室：キャサリン・ペチャリ氏

土曜講座「オーストラリア＆日本—現代美術の熱い息吹き」→p.60

ギャラリートーク→p.61

広報記録：

新聞・雑誌：

ナタリー・キング「プリズム：オーストラリア現代美術展」『ART iT』第13号, No.334, 2006年9月, p.20

「プリズム：オーストラリア現代美術展—多様であることの豊かさ」『朝日新聞』2006年9月14日夕刊

「プリズム：オーストラリア現代美術展」『月刊ギャラリー』Vol.258, 2006年10月号, p.23

Deborah Cameron, "It's not all sun and beaches", *The Age*, October 3, 2006

"Prism: Contemporary Australian Art", *The Japan Times*, October 5, 2006

「プリズム」『上毛新聞』2006年10月6日

"Review: Ted Snell examines an ambitious exhibition in Tokyo that overturned Australian cultural assumptions", *Weekend Australian*, October 9, 2006

「豪の現代美術展 文明の衝突など問題提起」『日本経済新聞』2006年10月11日

「オーストラリアの現代アートが大規模に紹介する試み」『Weeklyぴあ』No.1170, 2006年10月12日号, p.152, 153

「ミュージアム通信：プリズム—豪現代アートの代表作」『産経新聞』2006年10月19日

Edan Corkill, "Aboriginal art on top at down under exhibition", *International Herald Tribune The Asahi Shinbun*, October 20, 2006

「『日豪交流年』公式の現代美術展」『読売新聞』2006年10月26日夕刊

"Prism: Contemporary Australian Art", *The Japan Times*, October 27, 2006

Andrew Conti, "Prism: Contemporary Australian Art -- The Bridgestone Museum opens the door to contemporary arts and culture from down under", *Metropolis*, Vol.657, October 27, 2006

Michael Fitzgerald, "Both sides now", *TIME*, October 30, 2006, p.64-66

「プリズム：オーストラリア現代美術展」『月刊ギャラリー』Vol.259, 2006年11月号, p.80-81

「プリズム：オーストラリア現代美術展」『ミセス』No.622, 2006年11月号, p.392

「多様なアイデンティティが反映されたアートープリズム：オーストラリア現代美術展」『美術手帖』Vol.58, No.888, 2006年11月号, p.214

「プリズムのような『オーストラリア現代美術』」『週刊新潮』51巻41号, 2006年11月2日号, p.42

「プリズム：オーストラリア現代美術展」『週刊新潮』51巻42号, 2006年11月9日号

「美・博ピックアップ：多文化国家を映す『鏡』」『朝日新聞』2006年11月16日夕刊

「プリズム：オーストラリア現代美術展」『ゴムタイムズ』2006年11月20日

黒沢綾子「オーストラリアの“プリズム”」『産経新聞』2006年11月24日

Thomasina Larkin, "Calendar: Multi-media contemporary art from down under", *J SELECT*, Vol.33, No.12, 2006, p.6

「オーストラリアの多様で流動的な文化を一挙公開『プリズム：オーストラリア現代美術展』」『Papyrus』

Vol.9, 2006年12月号, p.249

「多文化国家の個性が渦巻く, オーストラリアの美術シーン『プリズム：オーストラリア現代美術展』」『Pen』

No.188, 2006年12月1日号, p.95

イーデン・コーキル「プリズムーオーストラリア現代美術展」『美術手帖』Vol.59, No.890, 2007年1月号, p.236-237

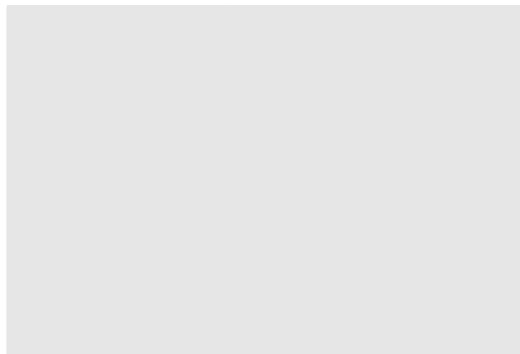
編集部「アートが照らし出す多民族, 多文化の国, オーストラリア」『いけばな龍生』No.561, 2007年1月号, p.28-30

終 准司「プリズム：オーストラリア現代美術展」『Bien美庵』Vol.43, Spring, 2007年2月号

テレビ：

「BS週間シティー情報」NHK BS, 2006年10月21日放映

「新日曜美術館」(アートシーン)NHK教育テレビ, 2006年10月22日放映



西側広報ウィンドー



東側広報ウィンドー



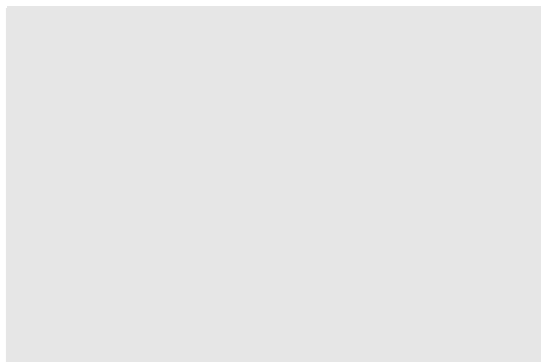
開会式(10月6日)当日に展示室でおこなわれた作家の記者会見
(右より)フィオナ・ホール氏、ホセイン・ヴァラマネシュ氏、
アンジェラ・ヴァラマネシュ氏、イマンツ・ティラーズ氏、
キャサリン・ペチャリ氏、クリスティン・ニコールズ氏(ペチャリ
氏の通訳役)



(左より)作家の方々、中山朋子氏(プリズム展コーディネーター)、
島田紀夫(ブリヂストン美術館館長)



(中央、左より)マレー・マクレーン氏(駐日オーストラリア大使)、
富山秀男氏(前ブリヂストン美術館館長、後ろ姿)、石橋寛氏
(石橋財団理事長)



会場風景



会場風景

〈拡大常設展〉

常設展示—印象派と20世紀の美術

2005年10月15日(土)－2006年3月26日(日)

会場：全館

出品内容：絵画132点, 彫刻34点, 陶器14点 計180点

入場者総数：33,280人(1日平均238人)

出品目録：館報54号(2005年度)p.20-25参照。

なつの常設展示—印象派から21世紀へ

2006年7月15日(土)－9月18日(月)

会場：全館

出品内容：絵画122点, 版画2点, 彫刻29点, 陶器13点 計166点

入場者総数：19,647人(1日平均339人)

出品目録：

1. クリスチャン・ダニエル・ラウホ《勝利の女神》/大理石/H.231.0cm
 2. バーバラ・ヘップワース《翼のある人物I》/1957年/真鍮, 鉄線/H.145.5cm
 3. アリスティド・マイヨール《欲望》/1905-08年/ブロンズ(レリーフ)/119.5×114.4cm
 4. コンスタンティン・ブランクーシ《接吻》/1907-10年/石膏/H.28.0cm
 5. アレキサンダー・アーキベンコ《ゴンドラの船頭》/1914年/ブロンズ/H.83.0cm
 6. ヘンリー・ムア《横たわる人体》/1976年/ブロンズ/H.39.8cm
 7. マリノ・マリーニ《騎手》/1952年/ブロンズ/H.58.0cm
 8. オーギュスト・ロダン《立てるフォーネス》/1884年頃/大理石/H.71.0cm
 9. オーギュスト・ロダン《考える人》/1902年頃/ブロンズ/H.37.7cm
 10. オーギュスト・ロダン《青銅時代》/1904年/ブロンズ/H.63.5cm
 11. エミール=アントワヌ・ブールデル《風の中のベートーヴェン》/1904-08年/ブロンズ/H.124.8cm
 12. エミール=アントワヌ・ブールデル《ベネロープ》/1909年/ブロンズ/H.118.8cm
 13. エミール=アントワヌ・ブールデル《弓をひくヘラクレス》/1909年/ブロンズ/H.78.5cm
 14. 《女の胸像》/シユメール/紀元前24世紀/閃緑石/H.55.0cm
 15. 《人物像》/パルミュラ/1-2世紀/石灰石/H.55.3cm
 16. 《セクメト神像》/エジプト/紀元前14世紀/黒花崗岩/H.177.0cm
-

-
17. レリーフ断片《柘榴と葡萄》/エジプト/アマルナ時代(紀元前1360年頃)/石灰岩/22.5×36.0cm
 18. レリーフ断片《アヌビス神礼拝図》/エジプト/紀元前13世紀/砂岩/66.0×58.0cm
 19. レリーフ断片《神牛》/エジプト/紀元前1300-1200年/石/29.0×30.2cm
 20. 《彩色木棺》/エジプト/紀元前13世紀/木/110.0×43.0cm
 21. レリーフ断片《ホルス神》/エジプト/紀元前1000-350年/大理石/26.0×28.0cm
 22. 《聖猫》/エジプト/紀元前950-660年/ブロンズ/H.48.2cm
 23. 《獅子頭部》/ギリシア/紀元前5世紀/大理石/H.42.0cm
 24. 《哲人の顔》/ギリシア/紀元前4世紀/大理石/H.29.4cm
 25. 《ヴィーナス》/ギリシア/ヘレニズム期(紀元前3-紀元前1世紀)/大理石/H.139.0cm
 26. 《アテナ頭部》/ギリシア/グレコ=ローマン様式/大理石/H.37.0cm
 27. コリントス球形アリュバロス《鷲と鶏》/紀元前610-590年/H.10.8cm
 28. アッティカ黒像式アンフォラ《ヘラクレスとケルペロス》/紀元前520-510年/H.35.2cm
 29. アッティカ黒像式オイノコエ《ディオニュソスとマイナス》/紀元前500年頃/H.23.0cm
 30. アッティカ黒像式レキュトス《ディオニュソス、サテュロスとマイナス》/紀元前490-480年/H.19.2cm
 31. アッティカ黒像式レキュトス《ディオニュソスとアリアドネ》/紀元前490-480年/H.19.2cm
 32. アッティカ黒像式レキュトス《ディオニュソスとマイナス》/紀元前490-480年/H.18.8cm
 33. アッティカ赤像式キュリクス《サテュロス》/紀元前5世紀中頃/H.7.3cm, D.25.5cm
 34. アッティカ白地レキュトス《墓参図》/紀元前425-400年頃/H.29.7cm
 35. アッティカ赤像式レベス・ガミコス《ニケと女性》/紀元前400-375年頃/H.16.5cm
 36. カンパニア赤像式魚文皿/紀元前375-350年頃/H.6.0cm, D.22.0cm
 37. カンパニア赤像式ヒュドリア《ディオスクーロイ》/紀元前350年頃/H.32.5cm
 38. カンパニア赤像式ヒュドリア《エロス》/紀元前350-325年頃/H.23.5cm
 39. アプリア赤像式柱形把手クラテル《男女図》/紀元前330年頃/H.44.5cm
 40. 建築装飾フリーズ部分《泉水に向かう二頭の馬》/エトルリア/紀元前550-540年/彩色テラコッタ/
48.5×50.7cm
 41. 《ヴィーナスの頭部》/ローマ/大理石/H.29.0cm
 42. 壁画断片《ディオニュソス図》/ヘルクラネウム/1世紀/フレスコ/19.6×53.0cm
 43. モザイク断片《牧羊頭部》/ローマ/1世紀/45.6×40.8cm
 44. カミーユ・コロー《イタリアの女》/1826-28年/油彩・カンヴァス/33.4×21.3cm
 45. カミーユ・コロー《ヴィル・ダヴレー》/1835-40年/油彩・カンヴァス/51.1×46.6cm
 46. カミーユ・コロー《オンフルールのトゥータン農場》/1845年頃/油彩・カンヴァス/44.4×63.8cm
 47. カミーユ・コロー《森の中の若い女》/1865年/油彩・板/54.7×38.9cm
 48. ジャン=フランソワ・ミレー《乳しぼりの女》/1854-60年/油彩・カンヴァス/59.0×72.4cm
 49. シャルル=フランソワ・ドービニー《レ・サーブル=ドロヌ》/油彩・板/39.1×67.1cm
 50. ギュスターヴ・クールベ《雪の中を駆ける鹿》/1856-57年頃/油彩・カンヴァス/93.5×148.8cm
 51. ギュスターヴ・クールベ《石切り場の雪景色》/1870年頃/油彩・カンヴァス/43.0×60.2cm
 52. ウジェーヌ・ブーダン《トルーヴィル近郊の浜》/1865年頃/油彩・板/35.7×57.7cm
 53. カミーユ・ピサロ《ブージュヴァルのセーヌ河》/1870年/油彩・カンヴァス/51.4×82.2cm
 54. カミーユ・ピサロ《菜園》/1878年/油彩・カンヴァス/55.2×45.9cm
 55. アルフレッド・シスレー《森へ行く女たち》/1866年/油彩・カンヴァス/65.2×92.2cm
 56. アルフレッド・シスレー《サン=マメス六月の朝》/1884年/油彩・カンヴァス/54.6×73.4cm
 57. 浅井忠《グレーの洗濯場》/1901年/油彩・カンヴァス/33.3×45.5cm
 58. エドゥワール・マネ《オペラ座の仮装舞踏会》/1873年/油彩・カンヴァス/46.7×38.2cm
 59. エドゥワール・マネ《自画像》/1878-79年/油彩・カンヴァス/95.4×63.4cm
 60. エドガー・ドガ《レオポール・ルヴェールの肖像》/1874年頃/油彩・カンヴァス/65.0×54.0cm
-

-
61. クロード・モネ《アルジャントウイユの洪水》/1872-73年/油彩・カンヴァス/54.4×73.3cm
 62. クロード・モネ《アルジャントウイユ》/1874年/油彩・カンヴァス/43.0×70.0cm
 63. クロード・モネ《雨のベリール》/1886年/油彩・カンヴァス/60.5×73.7cm
 64. クロード・モネ《睡蓮》/1903年/油彩・カンヴァス/81.5×100.5cm
 65. クロード・モネ《睡蓮の池》/1907年/油彩・カンヴァス/100.6×73.5cm
 66. クロード・モネ《黄昏、ヴェネツィア》/1908年頃/油彩・カンヴァス/73.0×92.5cm
 67. ピエール=オーギュスト・ルノワール《すわるジョルジュ・シャルパンティエ嬢》/1876年/油彩・カンヴァス/97.8×70.8cm
 68. ピエール=オーギュスト・ルノワール《カーニユのテラス》/1905年/油彩・カンヴァス/46.3×55.0cm
 69. ピエール=オーギュスト・ルノワール《すわる水浴の女》/1914年/油彩・カンヴァス/55.0×44.2cm
 70. ピエール=オーギュスト・ルノワール《花のついた帽子の女》/1917年/油彩・カンヴァス/40.6×50.2cm
 71. 黒田清輝《ブレハの少女》/1891年/油彩・カンヴァス/80.6×54.0cm
 72. 山下新太郎《供物》/1915年/油彩・カンヴァス/55.2×46.1cm
 73. 梅原龍三郎《ナポリよりソレントを望む》/1921年/油彩・カンヴァス/45.5×60.7cm
 74. ポール・セザンヌ《鉢と牛乳入れ》/1873-77年頃/油彩・カンヴァス/20.0×18.1cm
 75. ポール・セザンヌ《帽子をかぶった自画像》/1890-94年頃/油彩・カンヴァス/61.2×50.1cm
 76. ポール・セザンヌ《サント=ヴィクトワール山とシャトー・ノワール》/1904-06年頃/油彩・カンヴァス/66.2×82.1cm
 77. オディロン・ルドン《神秘の語らい》/油彩・カンヴァス/52.1×31.5cm
 78. オディロン・ルドン《供物》/油彩・厚紙/33.2×13.7cm
 79. ポール・ゴーガン《馬の頭部のある静物》/1886年/油彩・カンヴァス/49.0×38.5cm
 80. ポール・ゴーガン《ボン=タヴェン付近の風景》/1888年/油彩・カンヴァス/72.9×92.2cm
 81. ポール・ゴーガン《乾草》/1889年/油彩・カンヴァス/55.4×46.2cm
 82. フィンセント・ファン・ゴッホ《モンマルトルの風車》/1886年/油彩・カンヴァス/48.2×39.5cm
 83. ピエール・ボナール《灯下》/1899年/油彩・紙/42.5×50.4cm
 84. ピエール・ボナール《桃》/1920年/油彩・カンヴァス/36.0×38.1cm
 85. 中村彝《自画像》/1909年/油彩・カンヴァス/80.6×61.0cm
 86. 藤島武二《糸杉(ヴィラ・ファルコニエリ)》/1908-09年/油彩・カンヴァス/39.5×36.6cm
 87. 藤島武二《東海旭光》/1932年/油彩・カンヴァス/65.2×90.9cm
 88. 青木繁《天平時代》/1904年/油彩・カンヴァス/45.3×75.5cm
 89. 青木繁《海景(布良の海)》/1904年/油彩・カンヴァス/36.6×73.0cm
 90. アンリ・ルソー《イヴリー河岸》/1907年頃/油彩・カンヴァス/46.1×55.0cm
 91. アンリ・ルソー《牧場》/1910年/油彩・カンヴァス/46.0×55.3cm
 92. ポール・シニャック《コンカルノー港》/1925年/油彩・カンヴァス/73.4×53.9cm
 93. ピエール・ボナール《ヴェルノン付近の風景》/1929年/油彩・カンヴァス/63.4×62.4cm
 94. ピート・モンドリアン《砂丘》/1909年/油彩、鉛筆・厚紙/29.6×39.1cm
 95. モーリス・ド・ヴラマンク《運河船》/1905-06年/油彩・カンヴァス/60.2×73.0cm
 96. ラウル・デュフィ《ドーヴィルの突堤》/油彩・カンヴァス/54.3×80.9cm
 97. ラウル・デュフィ《静物》/1915-20年頃/油彩・カンヴァス/38.2×45.9cm
 98. アンドレ・ドラン《聖母子》/1913年頃/油彩・板/27.0×21.6cm
 99. ジョルジュ・ブラック《梨と桃》/1924年/油彩・板/27.7×45.3cm
 100. ジョルジュ・ルオー《芝居の呼び込み》/1906年/油彩・紙/28.1×45.0cm/寄託作品
 101. ジョルジュ・ルオー《郊外のキリスト》/1920-24年/油彩・紙/92.0×73.6cm
 102. ジョルジュ・ルオー《ピエロ》/1925年/油彩・紙/75.2×51.2cm
 103. ジョルジュ・ルオー《裁判所のキリスト》/1935年/油彩・紙/75.0×105.0cm/寄託作品
-

-
104. ジョルジュ・ルオー《赤鼻のクラウン》/1925-29年/油彩・紙/75.0×52.0cm/寄託作品
105. 岸田劉生《南瓜を持てる女》/1914年/油彩・カンヴァス/80.0×60.2cm
106. 岸田劉生《冬瓜》/1927年/油彩・カンヴァス/38.0×45.5cm/寄託作品
107. アンリ・マティス《画室の裸婦》/1899年/油彩・紙/66.3×50.5cm
108. アンリ・マティス《コリウール》/1905年/油彩・厚紙/24.5×32.4cm
109. アンリ・マティス《縞ジャケット》/1914年/油彩・カンヴァス/123.6×68.4cm
110. アンリ・マティス《横たわる裸婦》/1919年/油彩・カンヴァスボード/32.9×40.8cm
111. アンリ・マティス《両腕をあげたオダリスク》/1921年/油彩・カンヴァスボード/45.9×38.2cm
112. アンリ・マティス《ルー川のほとり》/1925年/油彩・カンヴァス/38.3×47.0cm
113. アンリ・マティス《オダリスク》/1926年/油彩・カンヴァス/55.5×46.8cm
114. アンリ・マティス《青い胴着の女》/1935年/油彩・カンヴァス/46.0×33.0cm
115. アンリ・マティス《石膏のある静物》/1927年/油彩・カンヴァス/52.0×64.0cm/寄託作品
116. パブロ・ピカソ《道化師》/1905年/ブロンズ/H.40.6cm
117. パブロ・ピカソ《ブルゴーニュのマール瓶, グラス, 新聞紙》/1913年/油彩, 砂, 新聞紙・カンヴァス/46.3×38.4cm
118. パブロ・ピカソ《カップとスプーン》/1922年/油彩・カンヴァス/16.0×27.2cm
119. パブロ・ピカソ《女の顔》/1923年/油彩, 砂・カンヴァス/46.1×38.1cm
120. パブロ・ピカソ《腕を組んですわるサルタンバンク》/1923年/油彩・カンヴァス/130.8×98.0cm
121. パブロ・ピカソ《茄子》/1946年/油彩, グワッシュ・紙/51.1×66.2cm
122. モーリス・ユトリロ《サン=ドニ運河》/1906-08年/油彩・紙/53.4×74.5cm
123. マリー・ローランサン《二人の少女》/1923年/油彩・カンヴァス/64.9×54.2cm
124. アメデオ・モディリアーニ《若い農夫》/1918年頃/油彩・カンヴァス/73.4×50.3cm
125. 藤田嗣治《インク壺の静物》/1926年/油彩・カンヴァス/22.0×26.9cm
126. 藤田嗣治《猫のいる静物》/1939-40年/油彩・カンヴァス/80.6×99.9cm
127. 藤田嗣治《ドルドーニュの家》/1940年/油彩・カンヴァス/45.5×53.3cm
128. 小出楯重《横たわる裸身》/1930年/油彩・カンヴァス/50.0×72.9cm
129. 安井曾太郎《薔薇》/1932年/油彩・カンヴァス/63.0×51.9cm
130. 安井曾太郎《F夫人像》/1939年/油彩・カンヴァス/88.0×66.0cm/寄託作品
131. 国吉康雄《夢》/1922年/油彩・カンヴァス/51.5×76.7cm
132. 国吉康雄《横たわる女》/1929年/油彩・カンヴァス/41.3×76.4cm
133. カイム・スーティン《大きな樹のある南仏風景》/1924年/油彩・紙/49.8×60.6cm
134. ゲオルゲ・グロス《プロムナード》/1926年/油彩・カンヴァス/100.3×125.7cm
135. 古賀春江《涯しなき逃避》/1930年/油彩・カンヴァス/116.7×91.3cm
136. 古賀春江《感傷の静脈》/1931年/油彩・カンヴァス/117.1×91.5cm
137. 佐伯祐三《テラスの広告》/1927年/油彩・カンヴァス/54.2×65.4cm
138. 佐伯祐三《ガラージュ》/1927-28年/油彩・カンヴァス/60.6×73.6cm
139. 岡鹿之助《雪の発電所》/1956年/油彩・カンヴァス/72.8×90.9cm
140. パウル・クレー《島》/1932年/油彩, 砂を混ぜた石膏・板/55.2×85.2cm
141. ジャン・アルプ《コンポジション》/木版/35.5×33.0cm
142. ジョアン・ミロ《絵画》/1927年/油彩・カンヴァス/24.1×33.0cm
143. ジャン・フォートリエ《人質の頭部》/1945年/油彩・カンヴァスに貼られた紙/34.2×26.4cm
144. ジャン・フォートリエ《旋回する線》/1963年/油彩・カンヴァスに貼られた紙/59.9×73.1cm
145. ルチオ・フォンタナ《No.6 空間概念》/1964年/レリーフプリント/52.5×36.5cm
146. ジャン・デュビュッフェ《スカーフを巻くエディット・ボワソナス》/1947年/油彩・紙/48.6×32.3cm
147. ジャン・デュビュッフェ《暴動》/1961年/油彩・カンヴァス/105.0×80.8cm
-

-
148. 山口長男《累形》/1958年/油彩・板/91.0×91.0cm/石橋美術館
 149. 猪熊弦一郎《Sky Triangle》/1968年/油彩・カンヴァス/127.2×102.0cm
 150. 脇田和《鳥を飼う人》/1958年/油彩・カンヴァス/49.7×60.7cm/石橋美術館
 151. アントニ・クラウヴェ《王》/油彩・カンヴァス/116.7×72.8cm
 152. ベルナール・ビュッフェ《アナベル夫人像》/1960年/油彩・カンヴァス/130.5×97.5cm
 153. ハンス・ホフマン《Push and Pull II》/1950年/油彩・カンヴァス/122.5×92.1cm
 154. 斎藤義重《作品》/1961年/油彩・合板/90.9×116.8cm
 155. 斎藤義重《作品》/1965年/油彩・合板/45.4×52.9cm
 156. 川端実《無題》/1993年/アクリル・カンヴァス/163.0×213.5cm
 157. ジャクソン・ポロック《Number 2, 1951》/1951年/油彩・カンヴァス/96.9×66.2cm
 158. モーゲンス・アンデルセン《コンポジション》/1977年/油彩・カンヴァス/162.6×195.0cm
 159. ピエール・スーラージュ《絵画, 26 May 1969》/1969年/油彩・カンヴァス/72.9×54.1cm
 160. 野見山暁治《風の便り》/1997年/油彩・カンヴァス/112.3×145.8cm/石橋美術館
 161. ザオ・ウーキー《24.02.70》/1970年/油彩・カンヴァス/130.0×162.4cm
 162. ザオ・ウーキー《07.06.85》/1985年/油彩・カンヴァス/114.8×195.2cm
 163. ザオ・ウーキー《風景 2004》/2004年/油彩・カンヴァス/97.1×195.1cm
 164. 田淵安一《孤独の山 Montagne Solitaire》/1956年/油彩・カンヴァス/50.0×99.5cm
 165. 菅井汲《OKA》/1961年/油彩・カンヴァス/99.7×81.3cm
 166. 堂本尚郎《連続の溶解9》/1964年/油彩, アクリル・カンヴァス/199.7×150.7cm

* 所蔵の表記のない作品は、すべてブリヂストン美術館蔵。

〈特別展〉

石橋美術館開館50周年記念 坂本繁二郎展

2006年4月27日(木)－6月4日(日)

会場：本館, 別館

主催：石橋財団石橋美術館 / 石橋財団ブリヂストン美術館 / 西日本新聞社 /
日本経済新聞社 / TVQ九州放送

後援：久留米市 / 久留米市教育委員会 / 財団法人久留米文化振興会

協賛：株式会社ブリヂストン

出品内容：油彩110点, 水彩など33件, 版画6件, その他5点, 資料22件
計176件

入場者総数：17,905人(1日平均511人)

展覧会ポスター

出品目録：

1 洋画との出会いと模索 1898-1920

1. 《夏野》 / 1898年 / 油彩・カンヴァス / 71.0×116.5cm / 寄託作品
2. 《水繩山風景》 / 1898年 / 水彩・紙 / 56.5×74.5cm / 寄託作品
3. 《刈入れ》 / 1898年頃 / 水彩・絹 / 53.1×78.5cm / 北九州市立美術館寄託
4. 《秋の朝日》 / 1899年 / 油彩・紙 / 26.4×35.2cm / 京都国立近代美術館
5. 《節分》 / 1901年 / 紙本墨画 / 146.0×156.0cm / 久留米市教育委員会
6. 《石膏像》 / 1903年 / コンテ・紙 / 63.5×48.0cm
7. 《町裏》 / 1904年 / 油彩・カンヴァス / 80.3×60.5cm / 寄託作品
8. 《早春》 / 1905年 / 油彩・カンヴァス / 80.5×60.0cm
9. 《風景》 / 1905年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 32.7×50.0cm / 寄託作品
10. 《大島の一部》 / 1907年 / 油彩・カンヴァス / 116.3×73.0cm / 福岡市美術館
11. 《北茂安村の一部》 / 1907年 / 油彩・カンヴァス / 143.9×136.5cm / 株式会社西日本シティ銀行
12. 《新聞》 / 1910年 / 油彩・カンヴァス / 80.5×60.7cm / 寄託作品
13. 《張り物》 / 1910年 / 油彩・カンヴァス / 117.6×71.5cm
- 14-1. 《草画舞台姿 沢村宗之助の皆鶴姫》 / 1911年 / 木版 / 22.5×16.0cm
- 14-2. 《草画舞台姿 沢村宗十郎の榛沢平九郎》 / 1911年 / 木版 / 22.5×16.0cm
- 14-3. 《草画舞台姿 初瀬浪子の秋山静子》 / 1911年 / 木版 / 22.5×16.0cm
- 14-4. 《草画舞台姿 市川高麗太郎の長作》 / 1911年 / 木版 / 22.5×16.0cm
- 14-5. 《草画舞台姿 沢村訥子の松平吉峰》 / 1911年 / 木版 / 22.5×16.0cm
- 14-6. 《草画舞台姿 市川高麗蔵の姉輪平次》 / 1911年 / 木版 / 22.5×16.0cm
15. 《魚を持ってきた海女》 / 1913年 / 油彩・カンヴァス / 117.0×80.6cm / 石橋財団石橋美術館
16. 《海岸の牛》 / 1914年 / 油彩・カンヴァス / 71.0×116.8cm / 北九州市立美術館
17. 《豚》 / 1915年 / 油彩・カンヴァス / 56.0×56.0cm / 東京国立近代美術館
18. 《海岸の家》 / 1915年 / 油彩・カンヴァス / 64.0×60.5cm / 愛知県美術館

-
19. 《牛》/ 1915年 / 油彩・カンヴァス / 73.0×116.5cm / 新潟県立近代美術館・万代島美術館
 20. 《牛》/ 1915年 / 油彩・カンヴァス / 69.0×115.5cm / 島根県立美術館
 21. 《三月頃の牧場》/ 1915年 / 油彩・カンヴァス / 60.9×80.4cm
 22. 《馬》/ 1916年 / 油彩・カンヴァス / 72.9×117.0cm
 23. 《あらしの海》/ 1917年 / 油彩・板 / 23.2×33.0cm / 石橋財団石橋美術館
 24. 《髪洗い》/ 1917年 / 油彩・カンヴァス / 81.0×61.0cm / 大原美術館
 25. 《静物》/ 1918年 / 油彩・カンヴァス / 45.0×60.5cm / 石橋財団石橋美術館
 - 26-1. 《日本風景版画筑紫之部 榎寺神社》/ 1918年 / 木版 / 17.4×23.5cm / 石橋財団石橋美術館
 - 26-2. 《日本風景版画筑紫之部 神湊》/ 1918年 / 木版 / 17.0×23.5cm / 石橋財団石橋美術館
 - 26-3. 《日本風景版画筑紫之部 水縄山》/ 1918年 / 木版 / 17.0×23.5cm / 石橋財団石橋美術館
 - 26-4. 《日本風景版画筑紫之部 筑後川》/ 1918年 / 木版 / 16.9×23.2cm / 石橋財団石橋美術館
 - 26-5. 《日本風景版画筑紫之部 火の海》/ 1918年 / 木版 / 17.0×23.4cm / 石橋財団石橋美術館
 27. 《牛》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / 71.0×116.5cm / 石橋財団石橋美術館

2 フランス留学と自己への確信 1921-1924

28. 《巴里近郊 ヴィラ・グルネー》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 33.3×41.1cm / 財団法人ひろしま美術館
29. 《少女》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 40.8×32.8cm / 石橋財団石橋美術館
30. 《婦人像》/ 1922-68年 / 油彩・カンヴァス / 81.0×64.8cm / 寄託作品
31. 《ブルターニュ》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 45.9×54.8cm / 愛媛県美術館
32. 《ヴァンヌ郊外》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 33.0×40.8cm / 京都国立近代美術館
33. 《パリ郊外》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 53.0×65.0cm / 石橋財団石橋美術館
34. 《読書の女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 40.8×31.7cm / 石橋財団石橋美術館
35. 《帽子を持てる女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 80.7×65.0cm / 石橋財団石橋美術館
36. 《巴里の乞食》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 40.0×32.8cm / 福岡県立美術館
37. 《老婆》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 41.0×32.8cm / 寄託作品
38. 《家政婦》/ 1923-27年 / 油彩・カンヴァス / 80.6×100.2cm
39. 《自画像》/ 1923年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 27.7×21.9cm
40. 《競馬場にて》/ 1923年 / 水彩・紙 / 18.0×16.3cm
41. 《ブルターニュ》/ 1923年 / 水彩・紙 / 18.8×21.7cm
42. 《老婆》/ 1923年 / パステル, 水彩・紙 / 27.8×20.8cm
43. 《ヴァンヌ風景》/ 1923年頃 / 鉛筆, 水彩・紙 / 17.8×25.8cm / 北九州市立美術館
44. 《婦人(滞欧スケッチ)》/ 1923年頃 / 鉛筆, 水彩・紙 / 30.6×23.5cm
45. 《キャンペレ(滞欧スケッチ)》/ 1923年頃 / 鉛筆, 水彩・紙 / 14.2×23.6cm
46. 《ヴァンヌ(滞欧スケッチ)》/ 1923年頃 / 鉛筆, 水彩・紙 / 13.2×20.5cm
47. 《オルナン》/ 1924年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 15.5×23.8cm
- 48-1. 《滞欧スケッチ帖1》/ 1921-24年 / 14.5×22.5cm
- 48-2. 《滞欧スケッチ帖2》/ 1921-24年 / 14.5×22.6cm
- 48-3. 《滞欧スケッチ帖3》/ 1921-24年 / 15.6×24.0cm
- 48-4. 《滞欧スケッチ帖4》/ 1921-24年 / 23.6×15.5cm

3 美しき郷里と馬 1925-1942

49. 《放水路の雲》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / 31.6×41.5cm
50. 《柿》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 45.8×61.0cm / 福岡県立美術館
51. 《母の像》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 52.9×45.8cm / 寄託作品
52. 《楠の新緑》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 60.7×45.5cm

-
53. 《放水路の雲》 / 1927年 / 油彩・カンヴァス / 38.0×45.5cm / 京都国立近代美術館
54. 《熟稲》 / 1927年 / 油彩・カンヴァス / 72.0×116.7cm
55. 《春郊牧牛》 / 1929年 / 油彩・カンヴァス / 32.0×41.0cm
56. 《自画像鏡像》 / 1929年 / 油彩・紙 / 45.5×37.5cm / 石橋財団石橋美術館
57. 《自像》 / 1923-30年 / 油彩・カンヴァス / 52.5×45.0cm / 石橋財団石橋美術館
58. 《黄馬》 / 1930年 / 油彩・カンヴァス / 44.0×58.5cm / 大原美術館
59. 《放牧二馬》 / 1930年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 19.2×18.5cm
60. 《雨中馬(銅版画稿)》 / 1931年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 12.0×13.0cm
61. 《雨中馬》 / 1931年 / 銅版 / 12.0×12.1cm
62. 《母仔馬》 / 1931年 / 銅版 / 12.0×12.2cm
63. 《鳶形山》 / 1932年 / 油彩・板 / 23.1×33.0cm
64. 《雲》 / 1931-32年頃 / 油彩・板 / 15.8×22.7cm
65. 《放牧三馬》 / 1932年 / 油彩・カンヴァス / 79.6×99.0cm / 石橋財団石橋美術館
66. 《繫馬》 / 1934年 / 油彩・カンヴァス / 91.0×116.8cm / 財団法人ひろしま美術館
67. 《引水》 / 1934年 / 水彩・紙 / 13.2×17.2cm / 馬の博物館
68. 《厨の白馬》 / 1934年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 15.0×15.6cm
69. 《肉弾三勇士》 / 1935年 / 油彩・カンヴァス / 53.0×80.0cm / 石橋財団石橋美術館
70. 《三仔馬》 / 1935年 / 油彩・カンヴァス / 31.1×40.2cm
71. 《放牧牛馬》 / 1935年 / 油彩・カンヴァス / 50.4×60.6cm
72. 《牛》 / 1935年 / 水彩・紙 / 14.0×22.9cm
73. 《松間馬》 / 1935年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 14.0×15.8cm
74. 《水より上る馬》 / 1935年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 14.2×23.1cm
75. 《水より上る馬》 / 1935年 / 水彩・紙 / 15.8×21.4cm / 石橋財団石橋美術館
76. 《松間馬》 / 1936年 / 油彩・カンヴァス / 50.0×60.7cm
77. 《放牧二馬》 / 1936年 / 油彩・カンヴァス / 91.0×116.5cm / 寄託作品
78. 《松間馬》 / 1936年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 14.2×18.1cm
79. 《水より上る馬》 / 1937年 / 油彩・カンヴァス / 80.0×116.2cm / 東京国立近代美術館
80. 《松間馬》 / 1938年 / 油彩・カンヴァス / 90.8×116.8cm / 京都国立近代美術館
81. 《林間馬》 / 1938年 / 油彩・カンヴァス / 50.0×60.7cm / メナード美術館
82. 《筑後川》 / 1938年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 15.0×22.5cm
83. 《母仔馬》 / 1939年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 14.1×23.0cm
84. 《黄馬》 / 1939年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 13.8×20.5cm
85. 《窓の馬》 / 1940年 / 油彩・カンヴァス / 31.6×41.2cm

4 深まる芸術—能面と静物 1943-1963

86. 《甘藍》 / 1941年 / 油彩・カンヴァス / 80.3×100.3cm / 大分県立芸術会館
87. 《鶏卵》 / 1942年 / 油彩・カンヴァス / 38.2×45.6cm
88. 《柿》 / 1942年 / 油彩・カンヴァス / 38.2×45.5cm
89. 《砥石》 / 1943年 / 油彩・カンヴァス / 45.6×53.3cm
90. 《二馬図》 / 1943年 / 油彩・カンヴァス / 50.0×60.8cm / 京都国立近代美術館
91. 《壁画下図》 / 1944年 / 油彩・カンヴァス / 60.2×60.3cm
92. 《能面》 / 1944年 / 油彩・カンヴァス / 40.0×52.0cm / 晴明会館(晴明教)
93. 《柿》 / 1944年 / 油彩・カンヴァス / 45.3×52.5cm / 石橋財団石橋美術館
94. 《梨》 / 1944年 / 油彩・カンヴァス / 38.2×45.5cm
95. 《煉瓦と瓦》 / 1944-50年頃 / 油彩・カンヴァス / 45.5×53.0cm / 財団法人ウッドワン美術館
-

-
96. 《八女風景》/ 1946年 / 油彩・カンヴァス / 32.0×41.4cm
97. 《林間馬》/ 1947年 / 油彩・カンヴァス / 45.5×53.0cm
98. 《能面と謡本》/ 1947年 / 油彩・カンヴァス / 45.5×53.2cm / メナード美術館
99. 《香炉》/ 1947年 / 油彩・カンヴァス / 31.9×41.2cm
100. 《盆》/ 1948年 / 油彩・カンヴァス / 38.0×45.9cm
101-1. 《阿蘇五景版画稿 表紙絵》/ 1948年 / 水彩・紙 / 12.8×15.0cm
101-2. 《阿蘇五景版画稿 根子嶽の朝》/ 1948年 / 水彩・紙 / 17.0×24.2cm
101-3. 《阿蘇五景版画稿 放牧》/ 1948年 / 水彩・紙 / 17.0×24.2cm
101-4. 《阿蘇五景版画稿 噴火口》/ 1948年 / 水彩・紙 / 17.0×24.2cm
101-5. 《阿蘇五景版画稿 南郷谷》/ 1948年 / 水彩・紙 / 17.0×24.2cm
101-6. 《阿蘇五景版画稿 波野の月》/ 1948年 / 水彩・紙 / 17.0×24.2cm
102. 《蛙》/ 1949年 / 油彩・カンヴァス / 41.2×60.3cm / 福岡市美術館
103. 《玩具》/ 1949年 / 油彩・カンヴァス / 31.7×41.1cm
104. 《能面》/ 1949年 / 油彩・カンヴァス / 45.5×53.2cm / メナード美術館
105. 《能面》/ 1950年 / 油彩・カンヴァス / 49.2×60.2cm
106. 《能面》/ 1950年 / 油彩・カンヴァス / 31.8×41.2cm
107-1. 《阿蘇五景 表紙絵》/ 1950年 / 木版 / 12.9×14.8cm / 石橋財団石橋美術館
107-2. 《阿蘇五景 扉絵》/ 1950年 / 木版 / 12.9×14.8cm / 石橋財団石橋美術館
107-3. 《阿蘇五景 南郷谷》/ 1950年 / 木版 / 25.0×36.0cm / 石橋財団石橋美術館
107-4. 《阿蘇五景 噴火口》/ 1950年 / 木版 / 25.1×36.0cm / 石橋財団石橋美術館
107-5. 《阿蘇五景 波野の月》/ 1950年 / 木版 / 25.2×36.1cm / 石橋財団石橋美術館
107-6. 《阿蘇五景 根子嶽の朝》/ 1950年 / 木版 / 25.2×36.1cm / 石橋財団石橋美術館
107-7. 《阿蘇五景 放牧》/ 1950年 / 木版 / 25.3×36.0cm / 石橋財団石橋美術館
108. 《母仔馬》/ 1950年頃 / 鉛筆, 水彩・紙 / 13.5×20.0cm
109. 《塩屋の娘人形》/ 1951年 / 油彩・カンヴァス / 40.7×31.5cm / 寄託作品
110-1. 《馬三題1》/ 1951年 / 木版 / 22.1×31.2cm
110-2. 《馬三題2》/ 1951年 / 木版 / 23.5×33.2cm
110-3. 《馬三題3》/ 1951年 / 木版 / 23.5×32.7cm
111. 《モーター(モートルの図)》/ 1952年 / 油彩・カンヴァス / 61.2×73.0cm / 株式会社安川電機
112. 《暁明の根子嶽》/ 1953年 / 油彩・カンヴァス / 60.6×72.7cm / 財団法人国立公園協会
113. 《暁明の根子嶽》/ 1953年 / 油彩・カンヴァスボード / 23.8×33.0cm
114. 《能面》/ 1954年 / 油彩・カンヴァス / 38.0×45.5cm / 寄託作品
115. 《石》/ 1954年 / 水彩・紙 / 39.5×49.9cm / 福岡県立美術館
116. 《能面》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 33.5×49.5cm / 福岡県立美術館
117. 《植木鉢》/ 1956年 / 油彩・板 / 23.8×33.0cm
118. 《蜜柑と林檎》/ 1956年 / 油彩・板 / 32.5×41.4cm / 宮崎県立美術館寄託
119. 《泊船暁光》/ 1956年 / 水彩・紙 / 16.5×23.2cm / 京都国立近代美術館
120. 《箱》/ 1957年 / 油彩・カンヴァス / 31.0×41.0cm / 何必館・京都現代美術館
121. 《茄子に甘藷など》/ 1957年 / 油彩・カンヴァス / 44.8×52.5cm
122. 《茄子馬鈴薯など》/ 1957年 / 水彩・紙 / 24.2×32.5cm
123. 《林檎 蜜柑 柿》/ 1958年 / 油彩・カンヴァス / 32.5×41.5cm / 石橋財団石橋美術館
124. 《菊慈童と中将面》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / 32.1×41.4cm / ポーラ美術館(ポーラ・コレクション)
125. 《箱》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / 45.5×53.0cm / 八女市
126. 《書籍》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / 38.4×45.7cm / 財団法人泉美術館
127. 《植木鉢》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / 38.3×45.5cm / 久留米市立篠山小学校(石橋美術館寄託)
-

-
128. 《植木鉢》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / 37.0×44.0cm / ポーラ美術館(ポーラ・コレクション)
129. 《母仔馬》/ 1960年 / 油彩・カンヴァス / 38.4×45.7cm / 京都国立近代美術館
130. 《母仔馬》/ 1960年 / 油彩・カンヴァス / 45.3×52.7cm / ポーラ美術館(ポーラ・コレクション)
131. 《女面と謡本》/ 1960年 / 油彩・カンヴァス / 38.3×45.5cm / 財団法人泉美術館
132. 《箱》/ 1960年 / 油彩・カンヴァス / 38.0×45.7cm / 三重県立美術館
133. 《母仔馬》/ 1960年頃 / 色鉛筆, 水彩・紙 / 40.3×63.5cm
134. 《鼓胴と能面》/ 1962年 / 油彩・カンヴァス / 37.9×45.5cm

5 晩年のはなやぎ一月と馬 1964-1969

135. 《鉢》/ 1964年 / 油彩・カンヴァス / 31.7×40.5cm
136. 《達磨》/ 1964年 / 油彩・カンヴァス / 45.5×53.1cm
137. 《桃》/ 1964年頃 / パステル, 水彩・紙 / 31.3×45.8cm
138. 《月》/ 1964年 / 油彩・板 / 33.3×24.2cm
139. 《月》/ 1964年 / 鉛筆, 水彩・紙 / 22.9×15.9cm
140. 《牛》/ 1919-65年 / 油彩・カンヴァス / 60.5×80.3cm / 寄託作品
141. 《雲上の月》/ 1965年 / 油彩・カンヴァス / 38.1×45.8cm
142. 《朝》/ 1965年 / 色鉛筆, 水彩・紙 / 24.7×31.7cm
143. 《馬》/ 1966年 / 油彩・板 / 33.4×24.0cm
144. 《月》/ 1966年 / 油彩・カンヴァス / 60.5×73.0cm / 無量寿院(福岡県立美術館寄託)
145. 《馬屋の月》/ 1966年 / 油彩・板 / 24.2×33.3cm
146. 《八女平野》/ 1966年 / オイルパステル・紙 / 23.3×32.5cm
147. 《放牧場》/ 1967年 / 油彩・カンヴァス / 33.6×46.0cm / 福岡県立美術館
148. 《馬屋の月》/ 1967年 / 油彩・カンヴァス / 31.5×40.7cm / ポーラ美術館(ポーラ・コレクション)
149. 《櫨の月》/ 1967年 / 油彩・カンヴァス / 38×45.5cm / メナード美術館
150. 《月光》/ 1968年 / 油彩・カンヴァス / 36.5×44.2cm / 馬の博物館
151. 《雨中馬》/ 1968年 / 色鉛筆・紙 / 18.3×28.0cm
152. 《八女平野》/ 油彩・板 / 15.0×22.5cm
153. 《八女の月》/ 1969年 / 油彩・カンヴァス / 41.0×32.0cm / 京都国立近代美術館
154. 《幽光》/ 1969年 / 油彩・カンヴァス / 31.7×41.0cm / 寄託作品

資料

155. 森三美宛書簡(葉書)/ 1902年 / 寄託作品
156. 権藤千之助宛書簡(封書)/ 1902年 / 久留米市教育委員会
157. 森三美宛書簡(葉書)/ 1903年 / 寄託作品
158. 松田諦晶宛書簡(封書)/ 1913年 / 石橋財団石橋美術館
159. 坂井義三郎宛書簡(葉書)/ 1923年 / 石橋財団石橋美術館
160. 坂井義三郎宛書簡(封書)/ 1925年 / 石橋財団石橋美術館
161. 青木繁之碑建設の辞 / 1948年 / 石橋財団石橋美術館
162. 公園の昨今(『東京パック』第4巻第11号)/ 1908年 / 竹久夢二美術館
163. 明治39年9月22日付葉書(『審美』第2号)/ 1907年
164-1. 宵月(『方寸』第1巻第2号)/ 1907年 / 野田宇太郎文学資料館
164-2. UNMEI(『方寸』特別漫画号)/ 1909年 / 野田宇太郎文学資料館
164-3. あやつり舌切雀(花屋敷にて催ふす)(『方寸』第3巻第8号)/ 1909年 / 野田宇太郎文学資料館
164-4. 干しもの(『方寸』第4巻第3号)/ 1910年 / 野田宇太郎文学資料館
164-5. 雪解(『方寸』第5巻第1号)/ 1911年 / 野田宇太郎文学資料館

-
- 164-6. 室の一隅(『方寸』第5巻第2号)/1911年/野田宇太郎文学資料館
165. 蒲原有明(隼雄)『春鳥集』(カバー意匠)/1905年
166. 三木露風『白き手の獵人』/1913年/石橋財団石橋美術館
167. 三木露風『幻の田園』/1915年/石橋財団石橋美術館
168. 三木露風『信仰の曙』/1922年/石橋財団石橋美術館
169. 前田夕暮『生くる日に』/1914年/石橋財団石橋美術館
170. 『西部美術』第2号/1946年/石橋財団石橋美術館
171. 丸山豊『地下水』/1947年/石橋財団石橋美術館
172-1. 遺品(中将)
172-2. 遺品(女面)
172-3. 遺品(鼓胴)
172-4. 遺品(舞扇)
172-5. 遺品(レンガ)
172-6. 遺品(石)
172-7. 遺品(パレット)
172-8. 遺品(油絵筆)
172-9. 遺品(パレットナイフ)
173. 坂本繁二郎旧蔵本/寄託資料
174. 森三美旧蔵 A. F. グレース著『油彩風景画の指南書』/1885年/石橋財団石橋美術館
175. 今里龍生《坂本繁二郎像》/1961年/ブロンズ/H.33.0cm/石橋財団石橋美術館
176. 大村清隆《坂本繁二郎像》/1968年/ブロンズ/H.52.0cm/寄託作品

*所蔵の表記のない作品, 資料は, すべて個人蔵。

関連事業:

開催記念美術講座 → p.63

サポートボランティアによる坂本アトリエツアー

実施日: 4月29日(土), 4月30日(日), 5月3日(水), 5月4日(木), 5月5日(金), 5月7日(日),
5月14日(日), 5月21日(日), 5月28日(日), 6月4日(日)

時間: 14:00-14:30

参加者総数: 428名

広報記録:

新聞・雑誌:

『西日本新聞』4月1日〈こちら編集局 4月のNishinippon Newsletter〉

森山秀子, 植野健造「坂本繁二郎展から 1~6」『西日本新聞』2006年4月17~22日夕刊

「よかナビ九州 八女の自然と向き合いながら描く」『西日本新聞』2006年4月29日九州版

「哲人画家坂本繁二郎の素顔1~6」『西日本新聞』2006年4月30日~5月5日筑後版

「坂本繁二郎展」『新美術新聞』5月1, 11日合併号 No.1087

「生涯つづる 154作品と22の資料」『西日本新聞』2006年5月13日夕刊

「二十四年ぶりの大回顧展」『アート・トップ』4, 5月号 vol.209 〈Exhibition Close-up〉

渡辺亮一「石橋美術館で坂本繁二郎展 瞑想的な芸術の深化」『毎日新聞』2006年5月27日

田内正宏「坂本繁二郎に寄せて 月にみる『晩年のはなやぎ』」『西日本新聞』2006年6月1日

石橋財団50周年記念 雪舟からポロックまで

2006年6月15日(木)－7月2日(日)

会場：本館, 別館

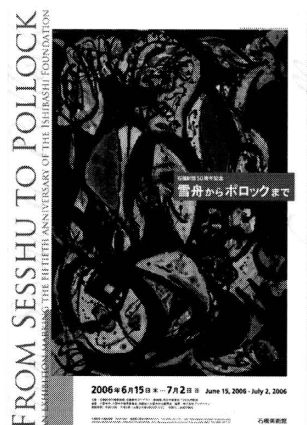
主催：石橋財団石橋美術館 / 石橋財団ブリヂストン美術館 / 西日本新聞社 /
TVQ九州放送

後援：久留米市 / 久留米市教育委員会 / 財団法人久留米文化振興会

協賛：株式会社ブリヂストン

出品内容：絵画132点, 彫刻13点, 陶磁器2点 計147点

入場者総数：14,675人(1日平均816人)



展覧会ポスター

出品目録：

1. エジプト《聖猫》/紀元前950-660年/ブロンズ/H.48.2cm/ブリヂストン美術館
2. ヘルクラネウム《壁画断片「ディオニュソス図」》/1世紀/フレスコ/19.6×53.0cm/ブリヂストン美術館
3. レンブラント・ファン・レイン《聖書あるいは物語に取材した夜の情景》/1626-28年/油彩・銅板/
22.1×17.1cm/ブリヂストン美術館
4. ジャン=フランソワ=ドミニク・アングル《若い女の頭部》/油彩・カンヴァス/40.8×32.3cm/ブリヂ
ストン美術館
5. カミュー・コロエ《オンフルールのトゥータン農場》/1845年頃/油彩・カンヴァス/44.4×63.8cm/ブリ
ヂストン美術館
6. カミュー・コロエ《ヴィル・ダヴレー》/1835-40年/油彩・カンヴァス/51.1×46.6cm/ブリヂストン美
術館
7. カミュー・コロエ《森の中の若い女》/1865年/油彩・板/54.7×38.9cm/ブリヂストン美術館
8. ギュスターヴ・クールベ《雪の中を駆ける鹿》/1856-57年頃/油彩・カンヴァス/93.5×148.8cm/ブリヂ
ストン美術館
9. オノレ・ドーミエ《ラタポワール》/1850年頃/ブロンズ/H.43.5cm/ブリヂストン美術館
10. オノレ・ドーミエ《山中のドン・キホーテ》/1850年頃/油彩・カンヴァス/39.6×31.2cm/ブリヂストン
美術館
11. エドゥワール・マネ《オペラ座の仮装舞踏会》/1873年/油彩・カンヴァス/46.7×38.2cm/ブリヂストン
美術館
12. エドゥワール・マネ《自画像》/1878-79年/油彩・カンヴァス/95.4×63.4cm/ブリヂストン美術館
13. エドゥワール・マネ《メリー・ローラン》/1882年/パステル・カンヴァス/41.6×37.1cm/ブリヂストン
美術館
14. エドガー・ドガ《踊りの稽古場にて》/1895-98年/パステル・紙/45.9×89.8cm/ブリヂストン美術館
15. エドガー・ドガ《右手で右足を持つ踊り子》/1896-1911年/ブロンズ/H.50.3cm/ブリヂストン美術館
16. エドガー・ドガ《レオポール・ルヴェールの肖像》/1874年頃/油彩・カンヴァス/65.0×54.0cm/ブリヂ

ストーン美術館

17. ウジェーヌ・ブーダン《トルーヴィル近郊の浜》/1865年頃/油彩・板/35.7×57.7cm/ブリヂストン美術館
 18. アルフレッド・シスレー《森へ行く女たち》/1866年/油彩・カンヴァス/65.2×92.2cm/ブリヂストン美術館
 19. アルフレッド・シスレー《サン＝マメス六月の朝》/1884年/油彩・カンヴァス/54.6×73.4cm/ブリヂストン美術館
 20. カミーユ・ピサロ《ブージヴァルのセヌ河》/1870年/油彩・カンヴァス/51.4×82.2cm/ブリヂストン美術館
 21. カミーユ・ピサロ《菜園》/1878年/油彩・カンヴァス/55.2×45.9cm/ブリヂストン美術館
 22. 黒田清輝《針仕事》/1890年/油彩・カンヴァス/81.2×65.0cm
 23. 浅井忠《グレーの橋》/1902年/水彩・紙/28.4×43.5cm/ブリヂストン美術館
 24. ピエール＝オーギュスト・ルノワール《少女》/1887年/パステル・紙/60.8×46.0cm/ブリヂストン美術館
 25. ピエール＝オーギュスト・ルノワール《すわるジョルジェット・シャルパンティエ嬢》/1876年/油彩・カンヴァス/97.8×70.8cm/ブリヂストン美術館
 26. ピエール＝オーギュスト・ルノワール《カーニユのテラス》/1905年/油彩・カンヴァス/46.3×55.0cm/ブリヂストン美術館
 27. 梅原龍三郎《脱衣婦》/1912年/油彩・カンヴァス/60.0×38.6cm/ブリヂストン美術館
 28. 山下新太郎《読書》/1908年/油彩・カンヴァス/100.0×73.1cm/ブリヂストン美術館
 29. 藤島武二《黒扇》1908-09年/油彩・カンヴァス/63.7×42.4cm/ブリヂストン美術館
 30. 青木繁《わだつみのいろこの宮》/1907年/油彩・カンヴァス/180.0×68.3cm
 31. 青木繁《天平時代》/1904年/油彩・カンヴァス/45.3×75.5cm/ブリヂストン美術館
 32. 藤島武二《天平の面影》/1902年/油彩・カンヴァス/197.5×94.0cm
 33. オディロン・ルドン《神秘の語らい》/油彩・カンヴァス/52.1×31.5cm/ブリヂストン美術館
 34. オディロン・ルドン《供物》/油彩・厚紙/33.2×13.7cm/ブリヂストン美術館
 35. ギュスターヴ・モロー《化粧》/1885-90年頃/グワッシュ、水彩・紙/33.0×19.3cm/ブリヂストン美術館
 36. クロード・モネ《霧のテムズ河》/1901年/パステル・紙/31.1×48.0cm/ブリヂストン美術館
 37. クロード・モネ《雨のベリール》/1886年/油彩・カンヴァス/60.5×73.7cm/ブリヂストン美術館
 38. クロード・モネ《睡蓮》/1903年/油彩・カンヴァス/81.5×100.5cm/ブリヂストン美術館
 39. クロード・モネ《睡蓮の池》/1907年/油彩・カンヴァス/100.6×73.5cm/ブリヂストン美術館
 40. クロード・モネ《黄昏、ヴェネツィア》/1908年頃/油彩・カンヴァス/73.0×92.5cm/ブリヂストン美術館
 41. クロード・モネ《アルジャントウイユの洪水》/1872-73年/油彩・カンヴァス/54.4×73.3cm/ブリヂストン美術館
 42. クロード・モネ《アルジャントウイユ》/1874年/油彩・カンヴァス/43.0×70.0cm/ブリヂストン美術館
 43. オーギュスト・ロダン《カミーユ・クロデル》/1889年/ブロンズ/H.24.5cm/ブリヂストン美術館
 44. ボール・セザンヌ《帽子をかぶった自画像》/1890-94年頃/油彩・カンヴァス/61.2×50.1cm/ブリヂストン美術館
 45. ボール・セザンヌ《サント＝ヴィクトワール山とシャトー・ノワール》/1904-06年頃/油彩・カンヴァス/66.2×82.1cm/ブリヂストン美術館
 46. ボール・セザンヌ《鉢と牛乳入れ》/1873-77年頃/油彩・カンヴァス/20.0×18.1cm/ブリヂストン美術館
 47. オーギュスト・ロダン《立てるフォーネス》/1884年頃/大理石/H.71.0cm/ブリヂストン美術館
 48. 青木繁《海の幸》/1904年/油彩・カンヴァス/70.2×182.0cm
-

-
49. 狩野典信《墨松墨梅図屏風》/江戸時代 18世紀後半/紙本金地墨画/180.0×544.0cm(各隻)
 50. 池田孤村《青楓紅楓図屏風》/江戸時代 19世紀前半/紙本金地著色/66.2×205.4cm(各隻)
 51. 円山応挙《牡丹孔雀図屏風》/江戸時代 1781年/絹本著色/136.0×168.8cm
 52. 中村芳中《四季草花図扇面貼交屏風》/江戸時代 19世紀初頭/紙本著色/157.2×157.2cm(各隻)
 53. 《古今和歌集卷第一断簡 高野切》/平安時代 11世紀/紙本墨書/25.8×48.4cm
 54. 《伊勢集断簡 石山切(みそめすも)》/平安時代 12世紀/紙本墨書/20.2×15.7cm
 55. 《青磁長頸花生》/南宋時代 12-13世紀/磁器/H.30.6cm
 56. 雪舟《四季山水図》/室町時代 15世紀/絹本墨画淡彩/70.6×44.2cm
 57. 《飛青磁花瓶》/元時代 14世紀/磁器/H.27.0cm
 58. 因陀羅《禅機図断簡 丹霞焼仏図》/元時代 14世紀/紙本墨画/35.0×36.8cm
 59. 藤島武二《東海旭光》/1932年/油彩・カンヴァス/65.2×90.9cm/ブリヂストン美術館
 60. 藤島武二《屋島よりの遠望》/1932年/油彩・カンヴァス/52.9×72.5cm
 61. フィンセント・ファン・ゴッホ《モンマルトルの風車》/1886年/油彩・カンヴァス/48.2×39.5cm/ブリヂストン美術館
 62. ポール・ゴーガン《馬の頭部のある静物》/1886年/油彩・カンヴァス/49.0×38.5cm/ブリヂストン美術館
 63. ポール・ゴーガン《ポン=タヴェン付近の風景》/1888年/油彩・カンヴァス/72.9×92.2cm/ブリヂストン美術館
 64. ポール・ゴーガン《乾草》/1889年/油彩・カンヴァス/55.4×46.2cm/ブリヂストン美術館
 65. ピエール・ボナール《桃》/1920年/油彩・カンヴァス/36.0×38.1cm/ブリヂストン美術館
 66. ピエール・ボナール《灯下》/1899年/油彩・紙/42.5×50.4cm/ブリヂストン美術館
 67. ジョルジュ・ルオー《郊外のキリスト》/1920-24年/油彩・紙/92.0×73.6cm/ブリヂストン美術館
 68. ジョルジュ・ルオー《ピエロ》/1925年/油彩・紙/75.2×51.2cm/ブリヂストン美術館
 69. 岸田劉生《麗子坐像》/1920年/水彩・紙/34.5×47.5cm/ブリヂストン美術館
 70. 関根正二《子供》/1919年/油彩・カンヴァス/60.9×45.7cm/ブリヂストン美術館
 71. 長谷川利行《動物園風景》/1937年頃/油彩・カンヴァス/45.5×52.7cm
 72. 安井曾太郎《玉蟲先生像》/1934年/油彩・カンヴァス/47.5×39.0cm
 73. 安井曾太郎《薔薇》/1932年/油彩・カンヴァス/63.0×51.9cm/ブリヂストン美術館
 74. ポール・シニャック《コンカルノー港》/1925年/油彩・カンヴァス/73.4×53.9cm/ブリヂストン美術館
 75. アンリ・マティス《コリウール》/1905年/油彩・厚紙/24.5×32.4cm/ブリヂストン美術館
 76. アンリ・マティス《両腕をあげたオダリスク》/1921年/油彩・カンヴァスボード/45.9×38.2cm/ブリヂストン美術館
 77. アンリ・マティス《ルー川のほとり》/1925年/油彩・カンヴァス/38.3×47.0cm/ブリヂストン美術館
 78. アンリ・マティス《青い胴着の女》/1935年/油彩・カンヴァス/46.0×33.0cm/ブリヂストン美術館
 79. アンリ・マティス《横たわる裸婦》/1919年/油彩・カンヴァスボード/32.9×40.8cm/ブリヂストン美術館
 80. アンリ・マティス《縞ジャケット》/1914年/油彩・カンヴァス/123.6×68.4cm/ブリヂストン美術館
 81. アンリ・マティス《画室の裸婦》/1899年/油彩・紙/66.3×50.5cm/ブリヂストン美術館
 82. ピエール・ボナール《ヴェルノン付近の風景》/1929年/油彩・カンヴァス/63.4×62.4cm/ブリヂストン美術館
 83. ラウル・デュフィ《静物》/1915-20年頃/油彩・カンヴァス/38.2×45.9cm/ブリヂストン美術館
 84. ラウル・デュフィ《オーケストラ》/1942年/油彩・カンヴァス/65.2×81.1cm/ブリヂストン美術館
 85. カイム・スーティン《大きな樹のある南仏風景》/1924年/油彩・紙/49.8×60.6cm/ブリヂストン美術館
 86. アンリ・ルソー《イヴリー河岸》/1907年頃/油彩・カンヴァス/46.1×55.0cm/ブリヂストン美術館
 87. アンリ・ルソー《牧場》/1910年/油彩・カンヴァス/46.0×55.3cm/ブリヂストン美術館
-

-
88. アンドレ・ドラン《聖母子》/1913年頃/油彩・板/27.0×21.6cm/ブリヂストン美術館
 89. モーリス・ド・ヴラマンク《運河船》/1905-06年/油彩・カンヴァス/60.2×73.0cm/ブリヂストン美術館
 90. モーリス・ユトリロ《サン＝ドニ運河》/1906-08年/油彩・紙/53.4×74.5cm/ブリヂストン美術館
 91. アメデオ・モディリアーニ《若い農夫》/1918年頃/油彩・カンヴァス/73.4×50.3cm/ブリヂストン美術館
 92. 藤田嗣治《横たわる女と猫》/1932年/油彩・カンヴァス/65.0×100.0cm
 93. 藤田嗣治《猫のいる静物》/1939-40年/油彩・カンヴァス/80.6×99.9cm/ブリヂストン美術館
 94. 藤田嗣治《ドルドーニュの家》/1940年/油彩・カンヴァス/45.5×53.3cm/ブリヂストン美術館
 95. マリー・ローランサン《二人の少女》/1923年/油彩・カンヴァス/64.9×54.2cm/ブリヂストン美術館
 96. ケース・ヴァン・ドンゲン《シャンゼリゼ大通り》/1924-25年/油彩・カンヴァス/68.0×52.2cm/ブリヂストン美術館
 97. 佐伯祐三《テラスの広告》/1927年/油彩・カンヴァス/54.2×65.4cm/ブリヂストン美術館
 98. 佐伯祐三《コルドヌリ(靴屋)》/1925年/油彩・カンヴァス/72.6×60.3cm
 99. 佐伯祐三《広告貼り》/1927年/油彩・カンヴァス/73.4×60.2cm
 100. ベルナール・ビュッフェ《アナベル夫人像》/1960年/油彩・カンヴァス/130.5×97.5cm/ブリヂストン美術館
 101. ゲオルゲ・グロッス《プロムナード》/1926年/油彩・カンヴァス/100.3×125.7cm/ブリヂストン美術館
 102. ジョアン・ミロ《絵画》/1927年/油彩・カンヴァス/24.1×33.0cm/ブリヂストン美術館
 103. ジョルジュ・ブラック《梨と桃》/1924年/油彩・板/27.7×45.3cm/ブリヂストン美術館
 104. パブロ・ピカソ《ブルゴーニュのマル瓶, グラス, 新聞紙》/1913年/油彩, 砂, 新聞紙・カンヴァス/46.3×38.4cm/ブリヂストン美術館
 105. パブロ・ピカソ《茄子》/1946年/油彩, グワッシュ・紙/51.1×66.2cm/ブリヂストン美術館
 106. パブロ・ピカソ《生木と枯木のある風景》/1919年/油彩・カンヴァス/49.4×65.4cm/ブリヂストン美術館
 107. パブロ・ピカソ《道化師》/1905年/ブロンズ/H.40.6cm/ブリヂストン美術館
 108. パブロ・ピカソ《腕を組んですわるサルタンバンク》/1923年/油彩・カンヴァス/130.8×98.0cm/ブリヂストン美術館
 109. パブロ・ピカソ《女の顔》/1923年/油彩, 砂・カンヴァス/46.1×38.1cm/ブリヂストン美術館
 110. 小出楢重《帽子をかぶった自画像》/1924年/油彩・カンヴァス/126.0×91.3cm/ブリヂストン美術館
 111. 小出楢重《横たわる裸身》/1930年/油彩・カンヴァス/50.0×72.9cm/ブリヂストン美術館
 112. 岡鹿之助《雪の発電所》/1956年/油彩・カンヴァス/72.8×90.9cm/ブリヂストン美術館
 113. 国吉康雄《横たわる女》/1929年/油彩・カンヴァス/41.3×76.4cm/ブリヂストン美術館
 114. 国吉康雄《夢》/1922年/油彩・カンヴァス/51.5×76.7cm/ブリヂストン美術館
 115. 古賀春江《素朴な月夜》/1929年/油彩・カンヴァス/116.5×91.0cm
 116. 古賀春江《単純な哀話》/1930年/油彩・カンヴァス/116.7×91.4cm
 117. ジョルジョ・デ・キリコ《吟遊詩人》/油彩・カンヴァス/62.4×49.8cm/ブリヂストン美術館
 118. ピート・モンドリアン《砂丘》/1909年/油彩, 鉛筆・厚紙/29.6×39.1cm/ブリヂストン美術館
 119. パウル・クレー《鳥》/1932年/油彩, 砂を混ぜた石膏・板/55.2×85.2cm/ブリヂストン美術館
 120. ジャン・フォートリエ《人質の頭部》/1945年/油彩・カンヴァスに貼られた紙/34.2×26.4cm/ブリヂストン美術館
 121. ジャン・フォートリエ《旋回する線》/1963年/油彩・カンヴァスに貼られた紙/59.9×73.1cm/ブリヂストン美術館
 122. ジャン・デュビュッフェ《暴動》/1961年/油彩・カンヴァス/100.0×80.8cm/ブリヂストン美術館
-

-
123. ジャクソン・ポロック 《Number. 2, 1951》/ 1951年 / 油彩・カンヴァス / 96.9×66.2cm / プリヂストン美術館
124. ピエール・スーラージュ 《絵画, 26 May 1969》/ 1969年 / 油彩・カンヴァス / 72.9×54.1cm / プリヂストン美術館
125. ピエール・アレシンスキー 《田園の一隅》/ 1951年 / 油彩・カンヴァス / 99.5×80.3cm / プリヂストン美術館
126. 山口長男 《累形》/ 1958年 / 油彩・板 / 90.3×90.7cm
127. ハンス・ホフマン 《Push and Pull II》/ 1950年 / 油彩・カンヴァス / 122.5×92.1cm / プリヂストン美術館
128. 齋藤義重 《作品》/ 1961年 / 油彩・合板 / 90.9×116.8cm / プリヂストン美術館
129. 齋藤義重 《作品》/ 1965年 / 油彩・合板 / 45.4×52.9cm / プリヂストン美術館
130. 川端実 《無題》/ 1993年 / アクリル・カンヴァス / 163.0×213.5cm / プリヂストン美術館
131. 猪熊弦一郎 《Sky Triangle》/ 1968年 / 油彩・カンヴァス / 127.2×102.0cm / プリヂストン美術館
132. 堂本尚郎 《連続の溶解9》/ 1964年 / 油彩, アクリル・カンヴァス / 199.7×150.7cm / プリヂストン美術館
133. 田淵安一 《孤独の山 Montagne Solitaire》/ 1956年 / 油彩・カンヴァス / 50.0×99.5cm / プリヂストン美術館
134. 野見山暁治 《風の便り》/ 1997年 / 油彩・カンヴァス / 112.3×145.8cm
135. 菅井汲 《OKA》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / 99.7×81.3cm / プリヂストン美術館
136. コンスタンティン・ブランクーシ 《接吻》/ 1907-10年 / 石膏 / H.28.0cm / プリヂストン美術館
137. ザオ・ウーキー 《07.06.85》/ 1985年 / 油彩・カンヴァス / 114.8×195.2cm / プリヂストン美術館
138. ザオ・ウーキー 《風景 2004》/ 2004年 / 油彩・カンヴァス / 97.1×195.1cm / プリヂストン美術館
139. アンリ・ミショー 《無題》/ 1973年 / グワッシュ, アクリル・紙 / 33.0×50.2cm / プリヂストン美術館
140. アンリ・ミショー 《無題》/ 1970年 / 水彩・紙 / 49.6×31.8cm / プリヂストン美術館
141. アンリ・ミショー 《無題》/ 1979-81年 / 墨, アクリル・紙 / 49.9×64.7cm / プリヂストン美術館
142. オシップ・ザツキン 《母子》/ 1919年 / 着色されたセメント / H.48.6cm / プリヂストン美術館
143. アルベルト・ジャコメッティ 《ディエゴの胸像》/ 1954-55年 / ブロンズ / H.55.0cm / プリヂストン美術館
144. マリノ・マリーニ 《騎手》/ 1952年 / ブロンズ / H.58.0cm / プリヂストン美術館
145. アレキサンダー・アーキペンコ 《ゴンドラの船頭》/ 1914年 / ブロンズ / H.83.0cm / プリヂストン美術館
146. ヘンリー・ムア 《横たわる人体》/ 1976年 / ブロンズ / H.39.8cm / プリヂストン美術館
147. オシップ・ザツキン 《三美神》/ 1950年 / ブロンズ / H.76.7cm / プリヂストン美術館

*所蔵の表記のない作品は、すべて石橋美術館蔵。

関連事業：

開催記念講演会 → p.63

広報記録：

新聞・雑誌：

「みるきくあそぶ 雪舟からポロックまで」『西日本新聞』2006年6月10日夕刊

平間理香, 森山秀子, 植野健造, 後藤純子「半世紀のコレクション 石橋財団の名品1～6」『西日本新聞』2006年6月12～17日夕刊

「洋の東西, 時代を問わぬコレクション」『西日本新聞』2006年6月17日

「美術作家の赤瀬川原平さん 石橋文化センターで24日講演」『西日本新聞』2006年6月18日

「雪舟やピカソ147点一堂に」『朝日新聞』2006年6月20日

「美への扉 石橋財団の逸品上, 中, 下」『西日本新聞』2006年6月20～22日

「赤瀬川さん名画の見方伝授」『西日本新聞』2006年6月25日

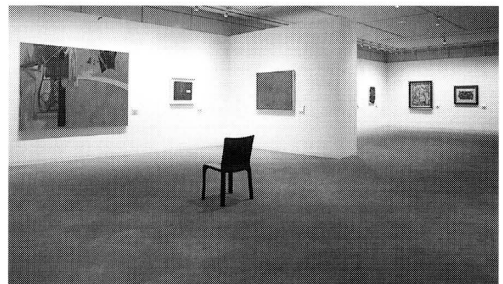
「ベスト展」『読売新聞』2006年7月11日

テレビ：

「はぴはぴテレビ」(ギャラリー情報)NHK佐賀放送局, 2006年6月16日放映



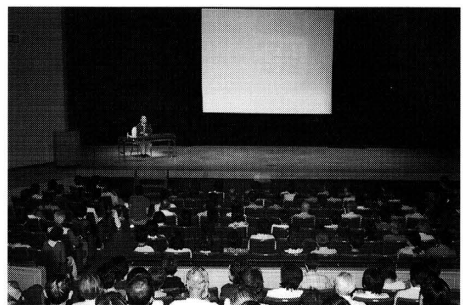
会場風景



会場風景



会場風景



講演会風景

国立美術館巡回展—名作と出会う 洋画・日本画・工芸・彫刻

2006年11月3日(金・祝)－12月17日(日)

会場：本館、別館

主催：京都国立近代美術館 / 石橋財団石橋美術館 / 福岡県教育委員会 / 西日本新聞社 / TVQ九州放送

後援：久留米市 / 久留米市教育委員会 / 財団法人久留米文化振興会

出品内容：洋画78点、日本画27点、工芸21点、彫刻4点 計130点

入場者総数：15,624人(1日平均347人)



展覧会チラシ

出品目録：

第1章 京都の洋画、久留米の洋画

〔京都の洋画〕

1. 小山三造・博成社《本願寺》/ 1889年頃 / 石版、紙 / 額 / 24.2×35.2cm / 石橋財団石橋美術館
2. 伊藤快彦《厨の春》/ 1895年頃 / 油彩、麻布 / 額 / 32.0×43.0cm / 京都国立近代美術館
3. 印藤真楯《夜桜》/ 1897年 / 油彩、麻布 / 額 / 60.5×87.5cm / 京都国立近代美術館
4. 浅井忠《編みもの》/ 1901年 / 油彩、麻布 / 額 / 64.3×48.7cm / 京都国立近代美術館
5. 都鳥英喜《諸寄村》/ 1913年 / 油彩、麻布 / 額 / 68.8×74.6cm / 京都国立近代美術館
6. 太田喜二郎《少女》/ 1915年 / 油彩、麻布 / 額 / 129.0×145.0cm / 京都国立近代美術館
7. 黒田重太郎《マドレエヌ・ルパンチ》/ 1922年 / 油彩、麻布 / 額 / 59.3×72.8cm / 京都国立近代美術館
8. 津田青楓《頬杖の女》/ 1930年 / 油彩、麻布 / 額 / 52.0×44.4cm / 京都国立近代美術館
9. 河合新蔵《緑蔭》/ 1934年 / 水彩、紙 / 額 / 76.0×54.4cm / 京都国立近代美術館
10. 里見勝蔵《女》/ 1928年頃 / 油彩、麻布 / 額 / 92.0×65.2cm / 京都国立近代美術館
11. 須田国太郎《鶉》/ 1952年 / 油彩、麻布 / 額 / 71.5×90.0cm / 京都国立近代美術館
12. 須田国太郎《禰原風景》/ 1955年 / 油彩、麻布 / 額 / 65.0×80.0cm / 石橋財団石橋美術館
13. 今井憲一《ターミナル》/ 1954年 / 油彩、麻布 / 額 / 116.6×90.5cm / 京都国立近代美術館

〔久留米の洋画〕

14. 森三美《筑後風景》/ 1910年 / 油彩、板 / 額 / 22.2×31.6cm / 石橋財団石橋美術館
15. 早川銑太郎《戦場の図》/ 油彩、麻布 / 額 / 42.7×58.3cm / 石橋財団石橋美術館
16. 青木繁《海》/ 1904年 / 油彩、麻布 / 額 / 36.5×73.0cm / 石橋財団石橋美術館
17. 青木繁《大穴牟知命》/ 1905年 / 油彩、麻布 / 額 / 75.5×127.0cm / 石橋財団石橋美術館
18. 坂本繁二郎《魚を持って来た海女》/ 1913年 / 油彩、麻布 / 額 / 117.0×80.6cm / 石橋財団石橋美術館
19. 坂本繁二郎《牛》/ 1920年 / 油彩、麻布 / 額 / 71.0×116.5cm / 石橋財団石橋美術館
20. 古賀春江《無題》/ 1921年頃 / 油彩、麻布 / 額 / 72.5×72.5cm / 石橋財団石橋美術館
21. 古賀春江《厳しき伝統》/ 1931年 / 油彩、麻布 / 額 / 111.2×144.0cm / 石橋財団石橋美術館

-
22. 松田諦晶《刈跡》/ 1914年 / 油彩, 麻布 / 額 / 52.1×71.2cm / 石橋財団石橋美術館
 23. 高田力蔵《雨後のサン=マメス》/ 1967年 / 油彩, 麻布 / 額 / 50.0×60.5cm / 石橋財団石橋美術館
 24. 坂宗一《久住(晩秋)》/ 油彩, 麻布 / 額 / 67.5×72.5cm / 石橋財団石橋美術館
 25. 伊東静尾《解放》/ 1953年 / 油彩, 麻布 / 額 / 162.5×130.3cm / 石橋財団石橋美術館
 26. 内野秀美《羨の花》/ 1980年 / 油彩, 麻布 / 額 / 116.8×91.0cm / 石橋財団石橋美術館

第2章 近代洋画の名作

27. 百武兼行《臥裸婦》/ 1881年頃 / 油彩, 麻布 / 額 / 97.3×188.0cm / 石橋財団石橋美術館
28. 黒田清輝《針仕事》/ 1890年 / 油彩, 麻布 / 額 / 81.2×65.0cm / 石橋財団石橋美術館
29. 和田英作《チュエリッパ》/ 1927年 / 油彩, 麻布 / 額 / 80.3×65.0cm / 石橋財団石橋美術館
30. 岡田三郎助《水浴の前》/ 1916年 / 油彩, 麻布 / 額 / 197.0×76.2cm / 石橋財団石橋美術館
31. 藤島武二《天平の面影》/ 1902年 / 油彩, 麻布 / 額 / 197.5×94.0cm / 石橋財団石橋美術館
32. 藤島武二《花籠》/ 1913年 / 油彩, 麻布 / 額 / 63.0×41.0cm / 京都国立近代美術館
33. 青木繁《海の幸》/ 1904年 / 油彩, 麻布 / 額 / 70.2×182.0cm / 石橋財団石橋美術館
34. 青木繁《わだつみのいろこの宮》/ 1907年 / 油彩, 麻布 / 額 / 180.0×68.3cm / 石橋財団石橋美術館
35. 小杉未醒(放庵)《山幸彦》/ 1917年 / 油彩, 麻布 / 額 / 194.6×300.5cm / 石橋財団石橋美術館
36. 岸田劉生《麗子像》/ 1922年 / テンペラ, 麻布 / 額 / 41.0×31.9cm / 石橋財団石橋美術館
37. 小出楯重《裸婦》/ 1925年 / 油彩, 麻布 / 額 / 70.0×46.0cm / 石橋財団石橋美術館
38. 小出楯重《横たわる裸女(B)》/ 1928年 / 油彩, 麻布 / 額 / 41.0×56.0cm / 京都国立近代美術館
39. 中川紀元《風景》/ 1920年 / 油彩, 麻布 / 額 / 114.3×78.5cm / 京都国立近代美術館
40. 川口軌外《スズニール》/ 1932年 / 油彩, 麻布 / 額 / 116.5×80.4cm / 京都国立近代美術館
41. 古賀春江《素朴な月夜》/ 1929年 / 油彩, 麻布 / 額 / 116.5×91.0cm / 石橋財団石橋美術館
42. 佐伯祐三《コルドヌリ(靴屋)》/ 1925年 / 油彩, 麻布 / 額 / 72.6×60.3cm / 石橋財団石橋美術館
43. 国吉康雄《鶏に餌をやる少年》/ 1923年 / 油彩, 麻布 / 額 / 73.7×59.7cm / 京都国立近代美術館
44. 石垣栄太郎《鞭うつ》/ 1925年 / 油彩, 麻布 / 額 / 145.5×106.5cm / 京都国立近代美術館
45. 野田英夫《風景》/ 1937年 / 油彩, 麻布 / 額 / 45.5×53.0cm / 京都国立近代美術館
46. 坂本繁二郎《帽子を持てる女》/ 1923年 / 油彩, 麻布 / 額 / 80.7×65.0cm / 石橋財団石橋美術館
47. 坂本繁二郎《放牧三馬》/ 1932年 / 油彩, 麻布 / 額 / 79.6×99.0cm / 石橋財団石橋美術館
48. 坂本繁二郎《林檎と馬鈴薯》/ 1940年 / 油彩, 麻布 / 45.4×53.1cm / 京都国立近代美術館
49. 安井曾太郎《婦人像》/ 1930年 / 油彩, 麻布 / 額 / 115.2×87.5cm / 京都国立近代美術館
50. 安井曾太郎《玉蟲先生像》/ 1934年 / 油彩, 麻布 / 額 / 47.5×39.0cm / 石橋財団石橋美術館
51. 藤田嗣治《横たわる女と猫》/ 1932年 / 油彩, 麻布 / 額 / 65.0×100.0cm / 石橋財団石橋美術館
52. 藤田嗣治《メキシコに於けるマドレーヌ》/ 1934年 / 油彩, 麻布 / 額 / 91.0×72.5cm / 京都国立近代美術館
53. 岡鹿之助《雪の街》/ 1930年 / 油彩, 麻布 / 額 / 81.0×100.0cm / 京都国立近代美術館
54. 小磯良平《娘達》/ 1938年 / 油彩, 麻布 / 額 / 72.7×53.0cm / 京都国立近代美術館
55. 吉原治良《潜水夫と犬》/ 1931年頃 / 油彩, 麻布 / 額 / 145.5×112.1cm / 京都国立近代美術館
56. 長谷川三郎《蝶の軌跡》/ 1937年 / 油彩, 麻布 / 額 / 130.0×161.5cm / 京都国立近代美術館
57. 薮光《花(やまあららぎ)》/ 1942年 / 油彩, 麻布 / 額 / 34.9×26.9cm / 京都国立近代美術館

第3章 戦後美術の展開

58. 長谷川潔《白い花瓶に挿した草花》/ 1948年 / 油彩, 麻布 / 額 / 56.6×46.0cm / 京都国立近代美術館
59. 山口薫《季節の哀歎「田圃と鳥」》/ 1953年 / 油彩, 麻布 / 額 / 130.0×162.0cm / 京都国立近代美術館
60. 金山康喜《静物(焼栗の屋台)》/ 1953年 / 油彩, 麻布 / 額 / 83.0×102.0cm / 京都国立近代美術館
61. 児島善三郎《海芋とキリン草》/ 1954年 / 油彩, 麻布 / 額 / 91.0×72.9cm / 石橋財団石橋美術館
62. 熊谷守一《化粧》/ 1956年 / 油彩, 紙に板 / 額 / 43.0×35.0cm / 京都国立近代美術館

-
63. 金山平三《溪流(十和田湖)》/1956-64年/油彩,麻布/額/50.1×65.3cm/京都国立近代美術館
 64. 香月泰男《奇術》/1958年/油彩,麻布/額/73.0×117.0cm/京都国立近代美術館
 65. 堂本尚郎《絵画》/1957年/油彩,糸,麻布/額/80.0×130.0cm/京都国立近代美術館
 66. 山口長男《累形》/1958年/油彩,板/額/90.3×90.7cm/石橋財団石橋美術館
 67. 今井俊満《WORK》/1958年/ミクストメディア,麻布/額/149.4×166.9cm/京都国立近代美術館
 68. 斎藤義重《作品7》/1960年/油彩,合板(ドリル使用)/額/91.0×130.0cm/京都国立近代美術館
 69. 杉全直《キッコウ》/1961年/油彩,麻布/額/227.0×182.0cm/石橋財団石橋美術館
 70. 山田正亮《WORK C.102》/1961-62年/油彩,麻布/額/162.0×114.0cm/京都国立近代美術館
 71. 難波田龍起《相剋》/1962-63年/油彩,エナメル,麻布/額/130.3×97.0cm/京都国立近代美術館
 72. 白髪一雄《天暴星両頭蛇》/1962年/油彩,麻布/額/182.0×273.3cm/京都国立近代美術館
 73. 田中敦子《作品'63》/1963年/アクリル,合板,パネル/額/193.5×122.5cm/京都国立近代美術館
 74. 菅井汲《時速280キロ》/1965年/アクリル,麻布/額/146.0×112.0cm/京都国立近代美術館
 75. 吉原治良《作品(黒地に白い点の円)》/1971年/油彩,麻布/額/183.0×183.0cm/京都国立近代美術館
 76. 田淵安一《三相万華Ⅳ》/1972年/油彩,麻布/額/145.0×114.0cm/京都国立近代美術館
 77. 平野遼《朝》/1991年/油彩,麻布/額/87.6×144.6cm/石橋財団石橋美術館
 78. 野見山暁治《風の便り》/1997年/油彩,麻布/額/112.3×145.8cm/石橋財団石橋美術館

第4章 日本画に見る伝統と革新

79. 岸竹堂《月鴉図》/1896年頃/絹本墨画/軸/140.4×50.4cm/京都国立近代美術館
 80. 野口小嶺《谿山暈翠図》/1899年/絹本着色/軸/157.8×70.5cm/石橋財団石橋美術館
 81. 菱田春草《春野》/1901年頃/絹本着色/軸/116.1×41.2cm/京都国立近代美術館
 82. 浅井忠《パリ婦人散歩図》/1903年/紙本墨画/軸/132.7×29.7cm/京都国立近代美術館
 83. 土田麦僊《罰》/1908年/絹本着色/額/154.3×198.8cm/京都国立近代美術館
 84. 橋本関雪《函峽帰帆図》/1928年/絹本着色/軸/43.4×56.7cm/石橋財団石橋美術館
 85. 小野竹喬《郷土風景》/1917年/絹本着色/額/175.0×170.0cm/京都国立近代美術館
 86. 甲斐庄楠音《秋心》/1917年/絹本着色/額/214.0×86.0cm/京都国立近代美術館
 87. 秦テルヲ《絶望》/1917年頃/麻布着色/額/60.7×91.0cm/京都国立近代美術館
 88. 速水御舟《ひよこ》/1924年/絹本着色/軸/32.0×41.5cm/東京国立近代美術館
 89. 横山大観《神州第一峰》/1930年/絹本着色/軸/67.8×114.8cm/石橋財団石橋美術館
 90. 富田溪仙《梢白鷺》/1930年頃/絹本着色/軸/139.5×50.2cm/石橋財団石橋美術館
 91. 山口八九子《月夜》/1931年/紙本墨画淡彩/額/173.2×122.5cm/京都国立近代美術館
 92. 堂本印象《冬朝》/1932年/絹本着色/額/170.5×171.5cm/京都国立近代美術館
 93. 村上華岳《冬ばれの山》/1934年/紙本着色/軸/44.1×62.9cm/京都国立近代美術館
 94. 水越松南《虎穴図》/1936年/紙本墨画淡彩/軸/183.6×95.0cm/京都国立近代美術館
 95. 山崎隆《歴史》/1940年/紙本着色/額/198.5×237.0cm/京都国立近代美術館
 96. 竹内栖鳳《海幸》/1942年/絹本着色/軸/63.7×73.9cm/東京国立近代美術館
 97. 福田平八郎《白梅》/1942年/絹本着色/額/54.3×72.5cm/東京国立近代美術館
 98. 福田平八郎《雨》/1953年/紙本着色/額/108.7×86.5cm/東京国立近代美術館
 99. 堂本尚郎《日曜日のシャルトル》/1953-54年/紙本着色/額/136.2×166.5cm/京都国立近代美術館
 100. 小倉遊亀《少女》/1956年/紙本着色/額/146.5×113.0cm/東京国立近代美術館
 101. 東山魁夷《木霊》/1958年/紙本着色/額/121.0×86.0cm/東京国立近代美術館
 102. 玉村方久斗《港町寸景》/1932年頃/紙本着色/額/60.0×60.0cm/京都国立近代美術館
 103. 三上誠《作品 1964-は》/1964年/木,着色/額/152.0×152.0cm/京都国立近代美術館
 104. 下村良之介《鳥不動》/1965年/紙粘土,着色/額/185.0×235.0cm/京都国立近代美術館
 105. 堂本元次《風なごむ丘》/1983年/紙本着色/額/145.0×215.0cm/京都国立近代美術館
-

第5章 工芸, 彫刻

106. 赤塚自得《竹林図蒔絵硯箱及び文台》/ 1923年 / 高5.4×幅21.7×奥24.8cm、高11.0×幅61.0×奥35.1cm / 京都国立近代美術館
107. 板谷波山《水華磁葡萄文花瓶》/ 1927-30年 / 高39.0×径34.0cm / 石橋財団石橋美術館
108. 五代清水六兵衛《青華蘭四方花瓶》/ 1924年 / 高50.7×幅20.0×奥20.0cm / 京都国立近代美術館
109. 五代清水六兵衛《爛漫水指》/ 1934年 / 高18.0×幅19.0×奥14.5cm / 京都国立近代美術館
110. 富本憲吉《色絵花柳文水指》/ 昭和前期 / 高18.6×径16.3cm / 石橋財団石橋美術館
111. 河井寛次郎《三彩双魚瓶子》/ 1922年 / 高18.5×径14.5cm / 京都国立近代美術館
112. 河井寛次郎《鉄葉丸紋鉢》/ 1938年 / 高10.0×径42.0cm / 京都国立近代美術館
113. 六代清水六兵衛《紫陽花花瓶》/ 1941年 / 高37.2×幅28.0×奥25.6cm / 京都国立近代美術館
114. 六代清水六兵衛《古稀彩菌朶花瓶》/ 1974年 / 高43.0×径40.5cm / 石橋財団石橋美術館
115. 北大路魯山人《磁器赤絵筋文中皿》/ 1950年 / 高5.0×径30.8cm / 京都国立近代美術館
116. 北大路魯山人《色絵金彩椿文鉢》/ 1955年 / 高20.0×径36.0cm / 京都国立近代美術館
117. 中里太郎右衛門《叩きづくりの壺》/ 1966年 / 高32.0×径32.0cm / 京都国立近代美術館
118. 加藤土師萌《碧釉木菟文鉢》/ 1961年頃 / 高11.5×径30.5cm / 京都国立近代美術館
119. 高鶴元《古上野釉組鉢》/ 1969年 / 高10.0×径35.0cm～高6.0×径22.2cm / 京都国立近代美術館
120. 八木一夫《距離》/ 1974年 / 高27.5×幅60.0×奥行16.6cm / 京都国立近代美術館
121. 北原千鹿《鶉文金彩壺》/ 昭和前期 / 高19.0×径24.5cm / 京都国立近代美術館
122. 豊田勝秋《春日》/ 1930年 / 高48.0cm×径21.0cm / 石橋財団石橋美術館
123. 豊田勝秋《銅広口花瓶》/ 1937年 / 高40.0×径35.0cm / 京都国立近代美術館
124. 香取秀真《木菟香炉》/ 1948年 / 高11.0×幅7.0×奥7.0cm / 京都国立近代美術館
125. 香取秀真《木菟香炉》/ 1953年 / 高13.5×幅9.5×奥9.5cm / 京都国立近代美術館
126. 加守田章二《銀陶六面鉢》/ 1967年 / 高13.5×径26.0cm / 京都国立近代美術館
127. 高村光太郎《裸婦坐像》/ 1917年 / ブロンズ / 幅14.0×奥15.0×高29.5cm / 京都国立近代美術館
128. 辻晋堂《呪術者》/ 1961年 / 陶彫 / 幅51.0×奥29.0×高61.0cm / 京都国立近代美術館
129. 堀内正和《エヴァからもらった大きなリング》/ 1966年 / 合金 / 幅30.3×奥26.5×高18.5cm / 京都国立近代美術館
130. 豊福知徳《レリーフ 金Ⅱ》/ 1967年 / ブロンズ / 幅59.0×奥15.0×高47.7cm / 石橋財団石橋美術館

関連事業：

開催記念美術講座 → p.63

広報記録：

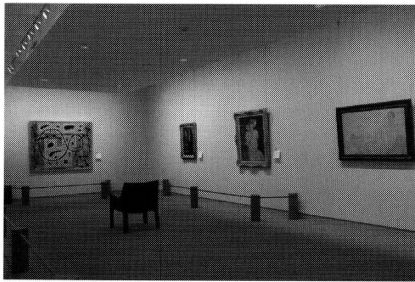
新聞・雑誌：

「彩事館 名作, 地方で一堂 近代美術館所蔵作品と石橋コレクション」『西日本新聞』2006年10月14日夕刊
「石橋美術館できょうから巡回展」『西日本新聞』2006年11月3日

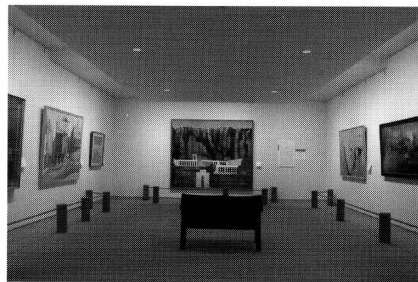
「文化の日各地で催し 石橋美術館で国立美術館展」『西日本新聞』2006年11月4日筑後版
「国立美術館巡回展始まる」『毎日新聞』2006年11月4日筑後版
「国立美術館の名作並ぶ 石橋美術館で巡回展 106人の130点」『読売新聞』2006年11月5日
植野健造「異なるジャンルの名作が一堂に 国立美術館巡回展」『西日本新聞』2006年11月18日
「巡回展の作品を解説 石橋美術館で美術講座」『西日本新聞』2006年11月27日筑後版
渡辺亮一「ときめきアート 名画に“ごった煮”の味わい」『毎日新聞』2006年11月28日夕刊
「3館の代表作一堂に並ぶ 石橋美術館で国立美術館巡回展」『朝日新聞』2006年12月2日
「入場者1万人突破 久留米・石橋美術館 国立美術館巡回展で」『西日本新聞』2006年12月6日
植野健造「名作の競演 国立美術館巡回展」(1)～(6)『西日本新聞』2006年11月6～11日夕刊
「名作を見て 国立美術館巡回展」(1)～(5)『西日本新聞』2006年12月5～9日筑後版

テレビ:

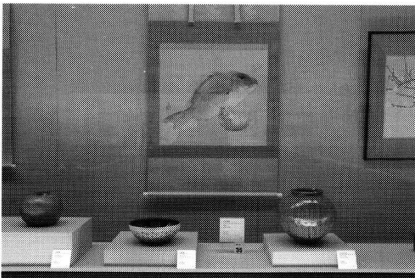
「はぴはぴテレビ」(ギャラリー情報)NHK佐賀放送局, 2006年11月10日放映



会場風景



会場風景



会場風景



会場風景

〈企画展〉

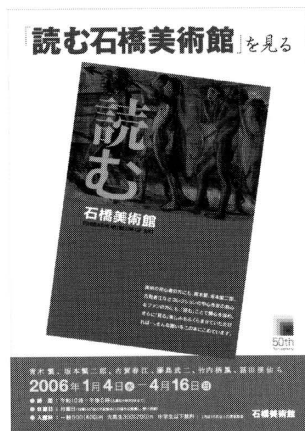
『読む石橋美術館』を見る

2006年1月4日(水)－4月16日(日)

会場：本館, 別館

出品内容：絵画160点, 彫刻2点, 陶磁器12点, 漆器5点, その他4点 計183点

入場者総数：7,052人(1日平均79人)



展覧会ポスター

出品目録：

1. 豊福知徳《透過する立像(白)》/ 1991年 / 木(マホガニー)・彩色 / H.216.0cm
2. 豊福知徳《半円柱1》/ 1964年 / ブロンズ / H.205.5cm

明治の洋画

3. 中丸精十郎《瀑》/ 1890年 / 油彩・カンヴァス / 107.6×70.2cm
4. 百武兼行《臥裸婦》/ 1881年頃 / 油彩・カンヴァス / 97.3×188.0cm
5. 原田直次郎《童女図》/ 1885年頃 / 油彩・カンヴァス / 51.0×41.0cm
6. 原田直次郎《男の人》/ 1887年 / 油彩・厚紙 / 33.1×23.9cm
7. 黒田清輝《針仕事》/ 1890年 / 油彩・カンヴァス / 81.2×65.0cm / 3月26日まで
8. 黒田清輝《鉄砲百合》/ 1909年 / 油彩・カンヴァス / 60.3×80.0cm
9. 岡田三郎助《薔薇の少女》/ 1901年 / 油彩・カンヴァス / 119.0×78.8cm
10. 岡田三郎助《髪梳く女》/ 1915年 / 油彩・カンヴァス / 60.3×45.3cm
11. 岡田三郎助《水浴の前》/ 1916年 / 油彩・カンヴァス / 197.0×76.2cm
12. 早川銈太郎《戦場の図》/ 油彩・カンヴァス / 42.7×58.3cm
13. 森三美《鶏のいる風景》/ 1910年頃 / 油彩・板 / 27.9×22.4cm / 寄託作品
14. 森三美《農夫》/ 1910年頃 / 油彩・板 / 31.5×22.2cm / 寄託作品
15. 森三美《筑後風景(肥前田舎風景)》/ 1910年頃 / 油彩・板 / 22.2×31.6cm / 寄託作品
16. 和田英作《読書》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / 73.6×54.0cm
17. 和田英作《チューリップ》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 80.3×65.0cm / 3月28日から
18. 和田英作《早春(富士)》/ 1939年 / 油彩・カンヴァス / 52.7×65.0cm

藤島武二

19. 藤島武二《天平の面影》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / 197.5×94.0cm / 3月26日まで
20. 藤島武二《自画像》/ 1903年頃 / 油彩・カンヴァス / 46.0×33.4cm

-
21. 藤島武二《ヴェルサイユ風景》/ 1906-07年 / 油彩・カンヴァス / 72.7×91.0cm
 22. 藤島武二《ネミ湖》/ 1908年 / 油彩・板 / 26.0×34.8cm
 23. 藤島武二《チョチャラ》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / 45.5×38.0cm
 24. 藤島武二《ボンベイ》/ 1908-09年 / 油彩・板 / 26.1×35.0cm
 25. 藤島武二《雲(ローマ)》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / 22.1×38.1cm
 26. 藤島武二《池畔の女》/ 1908-09年 / 油彩・紙 / 28.4×30.4cm
 27. 藤島武二《噴水のある池》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァスボード / 24.0×32.6cm
 28. 藤島武二《ヴィラ・デステの池》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァスボード / 23.8×32.7cm
 29. 藤島武二《糸杉》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァスボード / 32.8×23.9cm
 30. 藤島武二《池》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァスボード / 30.0×25.9cm
 31. 藤島武二《朝鮮婦人》/ 1914年頃 / 油彩・紙 / 78.2×29.0cm / 3月28日から
 32. 藤島武二《朝鮮婦人》/ 1914年頃 / 油彩, パステル・紙 / 77.9×29.2cm / 3月28日から
 33. 藤島武二《浪(大洗)》/ 1931年 / 油彩・カンヴァス / 33.3×45.6cm
 34. 藤島武二《五剣山の日の出》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 52.8×72.6cm
 35. 藤島武二《屋島よりの遠望》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 52.9×72.5cm / 3月26日まで
 36. 藤島武二《奈良風景》/ 1934年 / 油彩・カンヴァス / 52.8×45.2cm
 37. 藤島武二《旭光(新高山)》/ 1935年 / 油彩・カンヴァス / 38.0×45.8cm
 38. 藤島武二《蒙古の日の出》/ 1937年 / 油彩・カンヴァス / 40.9×53.0cm

青木繁

39. 青木繁《車中風景》/ 1902年 / 鉛筆, 淡彩・紙 / 14.4×19.0cm / 3月5日まで
40. 青木繁《神塞妙義》/ 1902年 / 鉛筆, 淡彩・紙(2枚) / 左: 13.9×21.6cm; 右: 13.9×22.6cm / 3月5日まで
41. 青木繁《碓氷川積》/ 1902年 / 鉛筆, 淡彩・紙(2枚) / 各14.7×19.2cm / 3月5日まで
42. 青木繁《汗の妙義山スケッチ行》/ 1902年 / 鉛筆, 淡彩・紙 / 14.5×19.0cm / 寄託作品 / 3月28日から
43. 青木繁《麓より妙義山を望む》/ 1902年 / 鉛筆・紙 / 14.5×19.0cm / 寄託作品 / 3月28日から
44. 青木繁《スケッチする男》/ 1902年 / 鉛筆・紙 / 15.4×23.9cm / 寄託作品 / 3月28日から
45. 青木繁《山上のスケッチ》/ 1902年 / 鉛筆・紙 / 19.1×14.5cm / 寄託作品 / 3月28日から
46. 青木繁《自画像》/ 1903年 / 油彩・カンヴァス / 80.5×60.5cm
47. 青木繁《閻威弥尼》/ 1903年 / 油彩・板 / 14.7×10.3cm
48. 青木繁《輪転》/ 1903年 / 油彩・カンヴァス / 26.8×37.8cm
49. 青木繁《海》/ 1904年 / 油彩・板 / 10.3×14.7cm
50. 青木繁《海の幸》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / 70.2×182.0cm / 3月26日まで
51. 青木繁《農家》/ 1904年 / 油彩・板 / 23.3×33.0cm
52. 青木繁《木立(森の暮色)》/ 1904年 / 油彩・板 / 33.0×23.0cm
53. 青木繁《女の顔》/ 1904年 / 油彩・板(羽子板) / 33.0×9.5cm
54. 青木繁《風景》/ 1904年 / 水彩・絹(扇面) / 15.6×51.2cm / 3月28日から
55. 青木繁《水浴》/ 1904年 / 水彩・紙 / 19.0×34.2cm / 3月28日から
56. 青木繁《海》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / 36.5×73.0cm
57. 青木繁《光明皇后》/ 1905年 / 油彩・カンヴァス / 37.6×71.0cm / 3月28日から
58. 青木繁《大穴牟知命》/ 1905年 / 油彩・カンヴァス / 75.5×127.0cm
59. 青木繁《雪景》/ 1906年 / 油彩・板 / 23.0×32.8cm
60. 青木繁《狂女》/ 1906年 / 水彩・紙 / 29.1×15.5cm / 3月28日から
61. 青木繁《わだつみのいろこの宮》/ 1907年 / 油彩・カンヴァス / 180.0×68.3cm / 3月26日まで
62. 青木繁《月下滞船図》/ 1908年 / 油彩・カンヴァス / 42.5×60.0cm

画家の留学

63. 浅井忠《樹下の女》/1901年頃/油彩・カンヴァス/45.8×37.8cm
64. 満谷国四郎《坐婦》/1913年/油彩・カンヴァス/64.8×54.8cm
65. 満谷国四郎《ブルターニュ風景》/1913年頃/油彩・カンヴァス/46.5×55.4cm
66. 和田英作《コロー〈カステル・ガンドルフの思い出〉の模写》/1903年/油彩・カンヴァス/59.2×72.2cm
67. 山下新太郎《ヴェラスケス〈マルガリータ王女〉の模写》/1907年/油彩・カンヴァス/72.3×59.8cm
68. 山下新太郎《読書》/1908年/油彩・カンヴァス/100.0×73.1cm/ブリヂストン美術館/3月26日まで
69. 山下新太郎《ブルターニュの女》/1908年/油彩・板/44.0×32.2cm
70. 山下新太郎《ノラ・ファルク嬢》/1908年/油彩・カンヴァス/46.0×38.0cm
71. 山下新太郎《グレーのホテルの女》/1908年/油彩・板/17.9×13.6cm/3月28日から
72. 山下新太郎《シュザンヌ》/1909年/油彩・カンヴァス/53.1×42.9cm
73. 山下新太郎《コンセル・ルージュにて》/1909年/油彩・板/17.5×13.5cm/3月28日から
74. 坂本繁二郎《少女》/1922年/油彩・カンヴァス/40.8×32.8cm
75. 坂本繁二郎《読書の女》/1923年/油彩・カンヴァス/40.8×31.7cm
76. 坂本繁二郎《パリ郊外》/1923年/油彩・カンヴァス/53.0×65.0cm
77. 坂本繁二郎《老婆》/1923年/油彩・カンヴァス/41.0×32.8cm/寄託作品
78. 青山熊治《男の像》/1921年/油彩・カンヴァス/90.6×60.5cm
79. 遠山五郎《婦人読書図》/1922年/油彩・カンヴァス/80.9×64.7cm
80. 梅原龍三郎《ナポリよりソレントを望む》/1921年/油彩・カンヴァス/45.5×60.7cm/ブリヂストン美術館
81. 伊原宇三郎《アルル風景》/1925年/油彩・カンヴァス/54.0×65.0cm
82. 伊原宇三郎《椅子によれる》/1929年/油彩・カンヴァス/115.7×89.0cm
83. 林倭衛《フランス風景》/1924-25年頃/油彩・カンヴァス/44.6×53.7cm

大正から昭和初期の洋画

84. 小杉未醒(放庵)《山幸彦》/1917年/油彩・カンヴァス/194.6×300.5cm
85. 山下新太郎《供物》/1915年/油彩・カンヴァス/55.2×46.1cm/ブリヂストン美術館
86. 山下新太郎《端午》/1915年/油彩・カンヴァス/55.3×46.0cm/ブリヂストン美術館
87. 石井柏亭《傘松(ナポリ風景)》/1923年/油彩・カンヴァス/49.6×60.4cm
88. 石井柏亭《ソレント》/1923年/油彩・カンヴァス/45.7×55.0cm
89. 辻永《春(パリ郊外)》/1921年/油彩・カンヴァス/53.2×72.6cm
90. 小出楯重《裸婦》/1925年/油彩・カンヴァス/70.0×46.0cm
91. 片多徳郎《芙蓉》/1924年/油彩・カンヴァス/45.5×37.8cm
92. 牧野虎雄《ひまわり》/1929年/油彩・カンヴァス/116.7×90.8cm
93. 岸田劉生《画家の妻》/1914年/油彩・カンヴァス/53.0×45.7cm
94. 岸田劉生《麗子像》/1922年/テンペラ・カンヴァス/41.0×31.9cm
95. 長谷川利行《裸婦》/1938年/油彩・カンヴァス/45.4×52.7cm
96. 佐伯祐三《コルドヌリ(靴屋)》/1925年/油彩・カンヴァス/72.6×60.3cm/3月26日まで
97. 佐伯祐三《広告貼り》/1927年/油彩・カンヴァス/73.4×60.2cm/3月26日まで
98. 佐伯祐三《休息(鉄道工夫)》/1927年頃/油彩・カンヴァス/59.4×71.3cm

坂本繁二郎

99. 坂本繁二郎《魚を持ってきた海女》/1913年/油彩・カンヴァス/117.0×80.6cm
100. 坂本繁二郎《牛》/1919-65年/油彩・カンヴァス/60.5×80.3cm/寄託作品

-
101. 坂本繁二郎《牛》/1920年/油彩・カンヴァス/71.0×116.5cm
 102. 坂本繁二郎《帽子を持てる女》/1923年/油彩・カンヴァス/80.7×65.0cm
 103. 坂本繁二郎《自像》/1923-30年/油彩・カンヴァス/52.5×45.0cm
 104. 坂本繁二郎《放牧三馬》/1932年/油彩・カンヴァス/79.6×99.0cm
 105. 坂本繁二郎《放牧二馬》/1936年/油彩・カンヴァス/91.0×116.5cm/寄託作品
 106. 坂本繁二郎《柿》/1944年/油彩・カンヴァス/45.3×52.5cm
 107. 坂本繁二郎《能面》/1954年/油彩・カンヴァス/38.0×45.5cm/寄託作品
 108. 坂本繁二郎《林檎 蜜柑 柿》/1958年/油彩・カンヴァス/32.5×41.5cm
 109. 坂本繁二郎《植木鉢》/1959年/油彩・カンヴァス/38.3×45.5cm/寄託作品
 110. 坂本繁二郎《幽光》/1969年/油彩・カンヴァス/31.7×41.0cm/寄託作品

古賀春江

111. 古賀春江《筑後川》/1914年頃/水彩・紙/51.4×61.8cm
112. 古賀春江《無題》/1921年頃/油彩・カンヴァス/72.5×72.5cm
113. 古賀春江《二階より》/1922年/油彩・カンヴァス/61.0×73.5cm
114. 古賀春江《海水浴の女》/1923年/油彩・カンヴァス/89.7×115.1cm
115. 古賀春江《海女》/1923年/油彩・カンヴァス/116.0×91.0cm
116. 古賀春江《曲衆につく》/1923年/油彩・カンヴァス/89.0×115.0cm/寄託作品
117. 古賀春江《誕生》/1924年/油彩・カンヴァス/91.0×116.8cm
118. 古賀春江《静物》/1925年頃/水彩・紙/38.7×51.0cm
119. 古賀春江《素朴な月夜》/1929年/油彩・カンヴァス/116.5×91.0cm/3月26日まで
120. 古賀春江《鳥籠》/1929年/油彩・カンヴァス/111.2×145.0cm/3月26日まで
121. 古賀春江《単純な哀話》/1930年/油彩・カンヴァス/116.7×91.4cm/3月26日まで
122. 古賀春江《片岡鉄兵『女性讃』表紙のための下絵》/1930年/水彩・紙/28.0×26.5cm/3月28日から
123. 古賀春江《龍胆寺雄『放浪時代』表紙のための下絵》/1930年/水彩・紙/24.5×18.0cm/3月28日から
124. 古賀春江《菊池寛『有憂華』箱絵のためのデザイン》/1931年/鉛筆・墨・紙/24.5×32.5cm/3月28日から
125. 古賀春江《菊池寛『有憂華』表紙のためのデザイン》/1931年/鉛筆・紙/29.0×22.0cm/3月28日から
126. 古賀春江《ロボットも微笑む(『東京パック』裏表紙)のためのスケッチ》/1931年/鉛筆・紙/33.5×24.4cm/3月28日から
127. 古賀春江《街頭の初夏(『週刊朝日』表紙)のためのデザイン》/1933年/水彩・紙/38.0×21.0cm/3月28日から

昭和の洋画

128. 吉田博《上高地》/1927年頃/油彩・カンヴァス/45.3×60.3cm
 129. 吉田博《ウダイプール宮殿》/1931年/油彩・カンヴァス/33.0×45.4cm
 130. 金山平三《港》/1945-56年頃/油彩・カンヴァス/33.5×52.9cm
 131. 金山平三《石母田の堤》/1952-55年頃/油彩・カンヴァス/40.9×53.0cm
 132. 藤田嗣治《横たわる女と猫》/1932年/油彩・カンヴァス/65.0×100.0cm/3月26日まで
 133. 藤田嗣治《室内》/1943年頃/油彩・カンヴァス/37.5×45.2cm/3月28日から
 134. 梅原龍三郎《軽井沢秋景》/1972年/油彩・カンヴァス/73.2×116.9cm/ブリヂストン美術館
 135. 須田国太郎《禰原風景》/1955年/油彩・カンヴァス/65.0×80.0cm
 136. 児島善三郎《立つ》/1928年/油彩・カンヴァス/139×78.0cm
 137. 児島善三郎《海芋とキリン草》/1954年/油彩・カンヴァス/91.0×72.9cm
 138. 伊東静尾《解放》/1953年/油彩・カンヴァス/162.5×130.3cm
-

-
139. 山口長男《累形》/1958年/油彩・板/90.3×90.7cm
140. 猪熊弦一郎《青い星座》/1983年/油彩・カンヴァス/111.0×96.0cm/3月28日から
141. 海老原喜之助《青年像》/1944年/油彩・カンヴァス/50.0×44.0cm
142. 杉全直《キッコウ》/1961年/油彩・カンヴァス/227.0×182.0cm
143. 野見山暁治《風の便り》/1997年/油彩・カンヴァス/112.3×145.8cm/3月26日まで

四季の彩り

144. 竹内栖鳳《春潮図》/大正時代末-昭和時代初期/絹本著色/26.4×23.7cm
145. 竹内栖鳳《溪山雨後》/昭和2年頃/紙本墨画/30.5×29.9cm
146. 中村不折《江都晩夏》/近代/紙本墨画淡彩/42.6×47.6cm
147. 小川芋銭《江村南風》/近代/紙本墨画/46.3×54.0cm
148. 竹内栖鳳《秋景富嶽図》/昭和8年/紙本著色/45.0×48.5cm
149. 富田溪仙《手向山春雪図》/近代/紙本著色/26.5×23.7cm
150. 川端龍子《白梅図》/近代/紙本金地墨画淡彩/23.4×20.4cm
151. 富田溪仙《梅鶴》/近代/絹本著色/25.8×23.5cm
152. 上村松篁《桔梗》/近代/紙本著色/26.5×23.5cm
153. 竹内栖鳳《錦秋図》/昭和元年-2年頃/絹本著色/44.5×50.6cm
154. 《籬菊蒔絵硯函》/江戸時代中期-後期/漆器/7.0×23.2cm
155. 竹内栖鳳《旭日》/大正時代末-昭和時代初期/絹本著色/46.0×51.0cm
156. 竹内栖鳳《鰹図》昭和2年頃-昭和5年/絹本著色/37.0×40.3cm
157. 森村宜植《吟虫図》/近代/紙本墨画淡彩/33.0×54.8cm
158. 川合玉堂《秋郊帰雁》/近代/紙本墨画淡彩/37.2×55.4cm
159. 植松包美《美の山蒔絵文台》/大正-昭和時代初期/漆器/H.11.0cm, W.60.8cm, L.35.0cm
160. 植松包美《美の山硯函》/大正-昭和時代初期/漆器/H.3.2cm, W.21.4cm, L.24.4cm
161. 筆谷等観《吉野山春日野図屏風》/近代/紙本金地著色/174.2×180.8cm
162. 前田青邨《紅白梅》/昭和45年頃/紙本著色/56.4×77.6cm
163. 植松包美《雲錦蒔絵手文庫》/大正-昭和時代初期/漆器/H.13.8cm, W.21.4cm, L.29.0cm
164. 《破れ網に桜花散らし蒔絵弁当箱》/近代?/漆器/H.17.6cm, W.21.0cm, L.25.0cm
165. 藤田嗣治《桜花に蝶》/近代/紙本墨画淡彩/45.2×57.6cm
166. 上村松篁《桜》/近代/紙本金地著色/26.5×23.5cm
167. 上村松篁《春日》/平成8年/紙本金地著色/85.6×116.0cm
168. 豊田勝秋《春日》/昭和5年/ブロンズ/H.27.0cm

釉の魅力

169. 清水六兵衛(6代)《銚子秋月花瓶》/昭和時代/陶器/H.31.0cm
170. 清水六兵衛(6代)《古稀彩桔梗節皿》/昭和50年/陶器/D.41.6cm
171. 《灰釉両耳壺》/前漢時代(B.C.3世紀-A.D.1世紀)/陶器/H.30.7cm
172. 《三彩馬》/唐時代/陶器/H.51.3cm
173. 《五彩岩花龍鳳文鉢》/明時代 万暦年間(1573-1619)/磁器/D.17.8cm
174. 《呉須赤絵蓮池白鷺文角皿》/明時代 17世紀前半/磁器/D.13.0cm
175. 《色絵花鳥文瓶》/江戸時代 1670-1700年/磁器/H.21.5cm
176. 《色絵花鳥文輪花鉢》/江戸時代 1670-1700年/磁器/H.7.5cm
177. 《青花松竹梅文壺》/明時代 16世紀/磁器/H.15.2cm
178. 《青花芙蓉手花鳥文小鉢》/明時代 17世紀前半/磁器/H.12.5cm

-
179. 《白地藍彩花鳥文鉢》/ サファヴィー朝 17世紀 / 陶器 / H.5.6cm
180. 《白地藍彩花蔓草文壺》/ 17世紀 / 陶器 / H.12.2cm
181. 《梨形瓶》/ ローマ帝国 1世紀後半 / ガラス / H.12.8cm
182. 《円筒形把手付瓶》/ ローマ帝国 4世紀初頭-中葉 / ガラス / H.24.8cm
183. 《脚台把手付瓶》/ ローマ帝国 4世紀 / ガラス / H.44.3cm

* 144以降の作品は、2月7日より展示。

所蔵の表記のない作品は、すべて石橋美術館蔵。

サウンド・オブ・ミュージアム：

音と響きあうアート、デュフィ、マティスなど

2006年7月14日（金）－9月24日（日）

会場：第1室－第4室

主催：石橋財団石橋美術館

後援：久留米市 / 久留米市教育委員会 / 久留米文化振興会

出品内容：油彩26点、水彩・素描など14点、版画25点、彫刻1点 計66点

（あわせて常設展示作品58点総計124点を展示）

入場者総数：6,881人（1日平均108人）



展覧会チラシ

出品目録：

第一楽章 描かれた楽器

1. 藤島武二《天平の面影》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / 197.5×94.0cm
2. 岡田三郎助《婦人像》/ 1907年 / 油彩・カンヴァス / 73.3×61.5cm / ブリヂストン美術館
3. 金山平三《習作・女》/ 1915-34年頃 / 油彩・カンヴァス / 91.2×72.9cm
4. 小出楯重《帽子をかぶった自画像》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / 126.0×91.3cm / ブリヂストン美術館
5. ラウル・デュフィ《オーケストラ》/ 1942年 / 油彩・カンヴァス / 65.2×81.1cm / ブリヂストン美術館
6. 青木繁《春》/ 1904年 / 水彩、パステル・紙 / 17.1×33.7cm
7. 青木繁《春》/ 1908年 / 水彩・布（襖布）/ D.44.3cm
8. 青木繁《秋》/ 1908年 / 水彩・布（襖布）/ D.44.4cm
9. 和田三造《『昭和職業絵尽』 洋楽師》/ 1939-40年 / 木版・紙 / 27.5×37.0cm
10. 和田三造《『昭和職業絵尽』 虚無僧》/ 1939-40年 / 木版・紙 / 27.5×36.8cm
11. 和田三造《『昭和職業絵尽第二輯』 琵琶師》/ 1940-41年 / 木版・紙 / 27.5×37.0cm
12. 中西利雄《ピアノのある部屋》/ 1947年 / 水彩・紙 / 60.6×47.9cm
13. 井上三綱《殷殷と鐘がなる》/ 1974年 / 油彩、墨、コラージュ・紙 / 102.6×245.4cm

第二楽章 音楽のある情景

14. ジョルジュ・ビゴー《日本の女》/ 油彩・カンヴァス / 75.6×62.4cm
15. 平賀亀祐《アペリチフの時間》/ 1928年 / 油彩・カンヴァス / 100.0×80.8cm
16. 伊原宇三郎《椅子によれる》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 115.7×9.0cm
17. 長谷川利行《動物園風景》/ 1937年頃 / 油彩・カンヴァス / 45.5×52.7cm
18. モーリス・ドニ《バッカス祭》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / 99.2×139.5cm / ブリヂストン美術館
19. ジョルジョ・デ・キリコ《吟遊詩人》/ 油彩・カンヴァス / 62.4×49.8cm / ブリヂストン美術館
20. 藤井浩祐《踊る崔承喜》/ 1943年頃 / ブロンズ / H.30.5cm
21. 藤島武二《琉球の女》/ 1936年 / パステル・紙 / 38.3×28.0cm

-
22. エミール=アントワーン・ブールデル《踊るイサドラ》/ペン、インク・紙/22.1×14.1cm/ブリヂストン美術館
 23. エミール=アントワーン・ブールデル《踊るイサドラ》/ペン、インク・紙/21.8×14.3cm/ブリヂストン美術館
 24. エミール=アントワーン・ブールデル《踊るイサドラ》/ペン、インク・紙/21.7×14.0cm/ブリヂストン美術館
 25. エミール=アントワーン・ブールデル《踊るイサドラ》/ペン、インク・紙/22.4×14.3cm/ブリヂストン美術館
 26. エミール=アントワーン・ブールデル《踊るイサドラ》/ペン、インク・紙/22.2×13.9cm/ブリヂストン美術館
 27. エミール=アントワーン・ブールデル《踊るイサドラ》/ペン、インク・紙/22.1×14.0cm/ブリヂストン美術館
 28. アンリ・ド・トゥルーズ=ロートレック《ムーラン・ルージュ、ラ・グーリュ》/1891年/リトグラフ・紙/171.0×124.0cm/ブリヂストン美術館
 29. アンリ・ド・トゥルーズ=ロートレック《エグランティエヌ嬢一座》/1896年/リトグラフ・紙/61.5×80.0cm/ブリヂストン美術館

第三楽章 水辺の音

30. 中丸精十郎《瀑》/1890年/油彩・カンヴァス/107.6×70.2cm
31. 藤島武二《池畔の女》/1908-09年/油彩・紙/28.4×30.4cm
32. 藤島武二《池》/1908-09年/油彩・カンヴァスボード/30.0×25.9cm
33. 藤島武二《浪(大洗)》/1931年/油彩・カンヴァス/33.3×45.6cm
34. 藤島武二《屋島よりの遠望》/1932年/油彩・カンヴァス/52.9×72.5cm
35. 青木繁《海の幸》/1904年/油彩・カンヴァス/70.2×182.0cm
36. 青木繁《海》/1904年/油彩・カンヴァス/36.5×73.0cm
37. 青木繁《月下滞船図》/1908年/油彩・カンヴァス/42.5×60.0cm
38. 坂本繁二郎《魚を持ってきた海女》/1913年/油彩・カンヴァス/117.0×80.6cm
39. 吉田博《奔流》/1936年/油彩・カンヴァス/96.7×130.7cm
40. 吉田博《ウダイプール宮殿》/1931年/油彩・カンヴァス/33.0×45.4cm
41. 古賀春江《海水浴の女》/1923年/油彩・カンヴァス/89.7×115.1cm
42. 古賀春江《二階より》/1922年/油彩・カンヴァス/61.0×73.5cm
43. 古賀春江《柳川風景》/1914年/水彩・紙/62.0×49.4cm
44. 前田青邨《日の出鶴》/1965-75年頃/紙本著色/42.6×4.6cm
45. 藤島武二《黄浦江》/1938年/水彩・紙/27.5×36.2cm

第四楽章 躍動する色や線の世界

46. 藤原昌美《作品 R-Y2》/1980年/アクリル・カンヴァス/90.1×90.2cm/ブリヂストン美術館
47. アンリ・マティス《ジャズ1 道化師》/1947年/シルクスクリーン・紙/42.5×66.5cm/ブリヂストン美術館
48. アンリ・マティス《ジャズ2 サーカス》/1947年/シルクスクリーン・紙/42.5×66.5cm/ブリヂストン美術館
49. アンリ・マティス《ジャズ3 ロワイヤル氏》/1947年/シルクスクリーン・紙/42.5×66.5cm/ブリヂストン美術館
50. アンリ・マティス《ジャズ4 白象の悪夢》/1947年/シルクスクリーン・紙/42.5×66.5cm/ブリヂストン美術館

-
51. アンリ・マティス《ジャズ 5 馬, 曲馬師, 道化師》/ 1947年 / シルクスクリーン・紙 / 42.5×66.5cm / プリヂストン美術館
 52. アンリ・マティス《ジャズ 6 狼》/ 1947年 / シルクスクリーン・紙 / 42.5×66.5cm / プリヂストン美術館
 53. アンリ・マティス《ジャズ 7 ハート》/ 1947年 / シルクスクリーン・紙 / 42.5×66.5cm / プリヂストン美術館
 54. アンリ・マティス《ジャズ 8 イカルス》/ 1947年 / シルクスクリーン・紙 / 42.5×66.5cm / プリヂストン美術館
 55. アンリ・マティス《ジャズ 9 フォルム》/ 1947年 / シルクスクリーン・紙 / 42.5×66.5cm / プリヂストン美術館
 56. アンリ・マティス《ジャズ 10 ピエロの葬式》/ 1947年 / シルクスクリーン・紙 / 42.5×66.5cm / プリヂストン美術館
 57. アンリ・マティス《ジャズ 11 コドマ兄弟》/ 1947年 / シルクスクリーン・紙 / 42.5×66.5cm / プリヂストン美術館
 58. アンリ・マティス《ジャズ 12 水槽を泳ぐ女》/ 1947年 / シルクスクリーン・紙 / 42.5×66.5cm / プリヂストン美術館
 59. アンリ・マティス《ジャズ 13 剣を呑む人》/ 1947年 / シルクスクリーン・紙 / 42.5×66.5cm / プリヂストン美術館
 60. アンリ・マティス《ジャズ 14 カウボーイ》/ 1947年 / シルクスクリーン・紙 / 42.5×66.5cm / プリヂストン美術館
 61. アンリ・マティス《ジャズ 15 ナイフ投げ》/ 1947年 / シルクスクリーン・紙 / 42.5×66.5cm / プリヂストン美術館
 62. アンリ・マティス《ジャズ 16 運命》/ 1947年 / シルクスクリーン・紙 / 42.5×66.5cm / プリヂストン美術館
 63. アンリ・マティス《ジャズ 17 礁湖》/ 1947年 / シルクスクリーン・紙 / 42.5×66.5cm / プリヂストン美術館
 64. アンリ・マティス《ジャズ 18 礁湖》/ 1947年 / シルクスクリーン・紙 / 42.5×66.5cm / プリヂストン美術館
 65. アンリ・マティス《ジャズ 19 礁湖》/ 1947年 / シルクスクリーン・紙 / 42.5×66.5cm / プリヂストン美術館
 66. アンリ・マティス《ジャズ 20 トボガン(槌)》/ 1947年 / シルクスクリーン・紙 / 42.5×66.5cm / プリヂストン美術館

*所蔵の表記のない作品は、すべて石橋美術館蔵。

関連事業：

7月23日(日), 30日(日), 8月20日(日), 9月3日(日), 第4展示室で「名画の中のコンサート」と題したミュージアム・コンサートを開催。(久留米市との共催)

7月14日(金)―9月3日(日), 別館に「旅する絵本カーニバル2006 in 石橋美術館」として音楽や音に関連した絵本約400冊を展示。期間中3,674名が入場。(筑後田園都市推進評議会¹⁾, 九州大学ユーザーサイエンス機構・子どもプロジェクト²⁾主催)

広報記録：

「音が聞こえてきそうな絵ズラリ」『朝日新聞』2006年7月13日筑後版
「『音と響きあう』油彩画など66点」『西日本新聞』2006年7月15日筑後版
「世界の『音楽絵本』大集合」『西日本新聞』2006年7月15日筑後版
「コンサートをしたのしもう 名画と一緒に名曲を」『西日本新聞』2006年7月20日
「名画をバックに歌声を披露」『毎日新聞』2006年7月24日筑後版
「名画と名曲 生演奏」『読売新聞』2006年7月24日筑後版

(註)

- 1) 福岡県と筑後地域の19市町村で構成。事務局は福岡県企画振興部地域政策課。
- 2) 九州大学に設立された研究機構「ユーザーサイエンス機構」プロジェクトのひとつ。



ミュージアム・コンサート



絵本カーニバル 会場風景

5×10倍楽しむ石橋美術館

2006年10月1日(日)－10月28日(土)

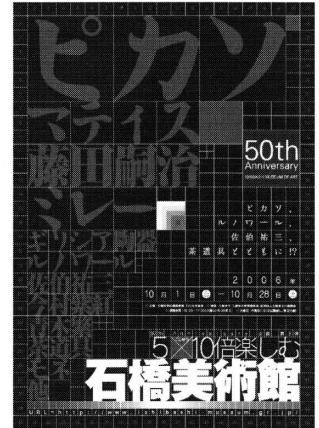
会場：本館, 別館

主催：石橋財団石橋美術館 / TVQ九州放送

後援：久留米市 / 久留米市教育委員会 / 財団法人久留米文化振興会

出品内容：絵画84点, 工芸品46点, 彫刻3点 計133点

入場者総数：9,618人(1日平均401人)



展覧会ポスター

出品目録：

1 Collection 1

1. 坂本繁二郎《自像》/ 1923-30年 / 油彩・カンヴァス / 52.5×45.0cm
2. 青木繁《自画像》/ 1903年 / 油彩・カンヴァス / 80.5×60.5cm
3. 藤島武二《自画像》/ 1903年頃 / 油彩・カンヴァス / 46.0×33.4cm
4. 板谷波山《氷華磁葡萄文花瓶》/ 1927-30年頃 / 磁器 / H.39.0cm
5. 吉田博《上高地》/ 1927年頃 / 油彩・カンヴァス / 45.3×60.3cm
6. 児島善三郎《トレド風景》/ 1928年頃 / 油彩・カンヴァス / 50.2×100.0cm
7. ポール・シニャック《ラ・ロシェル》/ 水彩, 鉛筆・紙 / 20.8×27.0cm / プリヂストン美術館
8. エドゥワール・マネ《オペラ座の仮装舞踏会》/ 1873年 / 油彩・カンヴァス / 46.6×38.2cm / プリヂストン美術館
9. ピエール＝オーギュスト・ルノワール《すわる水浴の女》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / 55.0×44.2cm / プリヂストン美術館
10. クロード・モネ《黄昏, ヴェネツィア》/ 1908年頃 / 油彩・カンヴァス / 73.0×92.5cm / プリヂストン美術館
11. アンリ・マティス《オダリスク》/ 1926年 / 油彩・カンヴァス / 55.5×46.8cm / プリヂストン美術館
12. 野見山暁治《風の便り》/ 1997年 / 油彩・カンヴァス / 112.3×145.8cm
13. ザオ・ウーキー《24.02.70》/ 1970年 / 油彩・カンヴァス / 130.0×162.4cm / プリヂストン美術館

2 Architecture

パネル, 模型による展示

3 Collection 2

14. 坂本繁二郎《放牧三馬》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 79.6×99.0cm
15. 黒田清輝《針仕事》/ 1890年 / 油彩・カンヴァス / 81.2×65.0cm

-
16. 和田英作《チューリップ》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 80.3×65.0cm
 17. 青木繁《わだつみのいろこの宮》/ 1907年 / 油彩・カンヴァス / 180.0×68.3cm
 18. 青木繁《海》/ 1904年 / 油彩・板 / 10.3×14.7cm
 19. 青木繁《閻魔弥尼》/ 1903年 / 油彩・板 / 14.7×10.3cm
 20. 藤島武二《天平の面影》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / 197.5×94.0cm

4 Interior

21. 古賀春江《静物》/ 1925年頃 / 水彩・紙 / 38.7×51.0cm
22. 中西利雄《風景(東大構内)》/ 1947年 / 水彩・紙 / 36.1×51.3cm
23. 青山熊治《男の像》/ 1921年 / 油彩・カンヴァス / 90.6×60.5cm
24. 海老原喜之助《青年像》/ 1944年 / 油彩・カンヴァス / 50.0×44.0cm
25. 長谷川利行《裸婦》/ 1938年 / 油彩・カンヴァス / 45.4×52.7cm
26. 小出楢重《裸婦》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 70.0×46.0cm
27. オシップ・ザツキン《母子》/ 1919年 / 着色されたセメント / H.48.6cm / ブリヂストン美術館
28. 佐伯祐三《休息(鉄道工夫)》/ 1927年頃 / 油彩・カンヴァス / 59.4×71.3cm
29. 佐伯祐三《コルドヌリ(靴屋)》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 72.6×60.3cm
30. 佐伯祐三《広告貼り》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 73.4×60.2cm
31. 満谷国四郎《ブルターニュ風景》/ 1913年頃 / 油彩・カンヴァス / 46.5×55.4cm
32. 須田国太郎《禰原風景》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / 65.0×80cm
33. 辻永《上高地》/ 1940年 / 油彩・カンヴァス / 40.9×53.0cm
34. 金山平三《港》/ 1945-56年頃 / 油彩・カンヴァス / 33.5×52.9cm
35. 長谷川利行《動物園風景》/ 1937年頃 / 油彩・カンヴァス / 45.5×52.7cm
36. オシップ・ザツキン《三美神》/ 1950年 / ブロンズ / H.76.7cm / ブリヂストン美術館
37. 山口長男《累形》/ 1958年 / 油彩・板 / 90.3×90.7cm

5 Collection 3

38. 上村松篁《春日》/ 1996年 / 紙本金地著色 / 85.6×116.0cm
39. イラン《幾何文台付鉢》/ 紀元前4千年紀 / 土器 / H.17.9cm
40. 作者不詳《武蔵野図屏風》/ 江戸時代 17世紀中葉 / 紙本金地著色 / 152.3×355.8cm
41. 今村紫紅《海の幸山の幸屏風》/ 1908年 / 絹本金地著色 / 167.9×181.0cm (右隻)
42. 竹内栖鳳《錦秋図》/ 1926-27年頃 / 絹本著色 / 44.5×50.6cm
43. 岸田劉生《麗子像》/ 1922年 / テンペラ・カンヴァス / 41.0×31.9cm

6 Collection 4

44. 坂本繁二郎《帽子を持てる女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 80.7×65.0cm
45. ラウル・デュフィ《静物》/ 1915-20年頃 / 油彩・カンヴァス / 38.1×45.9cm / ブリヂストン美術館
46. 藤田嗣治《横たわる女と猫》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 65.0×100.0cm
47. ケース・ヴァン・ドンゲン《シャンゼリゼ大通り》/ 1924-25年頃 / 油彩・カンヴァス / 68.0×52.2cm / ブリヂストン美術館
48. 黒田清輝《鉄砲百合》/ 1909年 / 油彩・カンヴァス / 60.3×80.0cm
49. 古賀春江《素朴な月夜》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 116.5×91.0cm

7 Exhibition 1

50. パブロ・ピカソ《カップとスプーン》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 15.9×27.2cm / ブリヂストン美術館
51. パブロ・ピカソ《女の顔》/ 1923年 / 油彩, 砂・カンヴァス / 46.1×38.1cm / ブリヂストン美術館

-
52. パブロ・ピカソ《画家とモデル》/1963年/油彩・カンヴァス/89.0×115.9cm/ブリヂストン美術館
53. パブロ・ピカソ《道化師》/1905年/ブロンズ/H.40.6cm/ブリヂストン美術館
54. パブロ・ピカソ《花冠の裸婦》/1930年/エッチング・紙/31.4×22.2cm/ブリヂストン美術館
55. パブロ・ピカソ《カーテンの前の裸婦》/1931年/エッチング・紙/31.4×22.2cm/ブリヂストン美術館
56. パブロ・ピカソ《女をあらわにする男》/1931年/ドライポイント・紙/36.4×29.3cm/ブリヂストン美術館
57. パブロ・ピカソ《足を折る女》/1931年/エッチング・紙/31.1×22.0cm/ブリヂストン美術館
58. パブロ・ピカソ《怪獣を見つめる四人の子供》/1933年/エッチング・紙/23.8×30.0cm/ブリヂストン美術館
59. パブロ・ピカソ《二人の水浴の女》/1933年/エッチング・紙/29.7×36.5cm/ブリヂストン美術館
60. パブロ・ピカソ《軽業師たちと馬》/1934年/ドライポイント・紙/19.8×27.9cm/ブリヂストン美術館
61. パブロ・ピカソ《牡牛、馬と女》/1934年/エッチング・紙/29.3×23.8cm/ブリヂストン美術館
62. パブロ・ピカソ《二人の男、ミノタウロスと鳥の彫刻》/1934年/アクワティント、エッチング・紙/24.7×34.8cm/ブリヂストン美術館
63. パブロ・ピカソ《蠟燭の火に照らされた女を見守る少年》/1934年/アクワティント、エッチング・紙/23.6×29.7cm/ブリヂストン美術館
64. パブロ・ピカソ《すわる彫刻家、横たわるモデルと男の立像》/1933年/エッチング・紙/26.6×19.2cm/ブリヂストン美術館
65. パブロ・ピカソ《モデルを見て制作する彫刻家》/1933年/エッチング、グラトワール・紙/26.5×19.1cm/ブリヂストン美術館
66. パブロ・ピカソ《少女、男の顔、裸婦の背中》/1933年/エッチング・紙/37.7×29.4cm/ブリヂストン美術館
67. パブロ・ピカソ《四人のモデルと頭部像》/1934年/エッチング、エングレーヴィング・紙/22.3×31.5cm/ブリヂストン美術館
68. パブロ・ピカソ《ミノタウロス、酒を飲む彫刻家と三人のモデル》/1933年/エッチング・紙/29.1×36.8cm/ブリヂストン美術館
69. パブロ・ピカソ《鳩を持つ少女に導かれる盲目のミノタウロス》/1934年/エッチング・紙/23.8×29.9cm/ブリヂストン美術館
70. 高田力蔵《ミレー〈落穂拾い〉の模写》/1958年/油彩・カンヴァス/80.0×109.0cm/石橋美術館
71. ジャン=フランソワ・ミレー《乳しぼりの女》/1854-60年/油彩・カンヴァス/59.0×72.4cm/ブリヂストン美術館
72. 和田英作《コロー〈カステル・ガンドルフォの思い出〉の模写》/1903年/油彩・カンヴァス/59.2×72.2cm/石橋美術館
73. カミーユ・コロー《オンフルールのトゥータン農場》/1845年頃/油彩・カンヴァス/44.4×63.8cm/ブリヂストン美術館
74. 島村三七雄《ルノワール〈ムーラン・ド・ラ・ギャレット〉の模写》/油彩・カンヴァス/128.2×177.6cm/石橋美術館
75. ピエール=オーギュスト・ルノワール《花のついた帽子の女》/1917年/油彩・カンヴァス/40.6×50.2cm/ブリヂストン美術館

8 Action

76. 岡田三郎助《水浴の前》/1916年/油彩・カンヴァス/197.0×76.2cm
77. 青木繁《海の幸》/1904年/油彩・カンヴァス/70.2×182.0cm
78. 青木繁《輪転》/1903年/油彩・カンヴァス/26.8×37.8cm
79. 青木繁《光明皇后》/1905年/油彩・カンヴァス/37.6×71.0cm

-
80. 小杉未醒(放庵)《山幸彦》/1917年/油彩・カンヴァス/194.6×300.5cm
 81. 坂本繁二郎《柿》/1944年/油彩・カンヴァス/45.3×52.5cm
 82. 藤島武二《奈良風景》/1934年/油彩・カンヴァス/52.8×45.2cm
 83. 藤島武二《屋島よりの遠望》/1932年/油彩・カンヴァス/52.9×72.5cm
 84. 安井曾太郎《玉蟲先生像》/1934年/油彩・カンヴァス/47.5×39.0cm
 85. 古賀春江《無題》/1921年頃/油彩・カンヴァス/72.5×72.5cm

9 Exhibition 2

86. ギリシア《カンパニア赤像式魚文皿》/紀元前375-350年頃/陶器/H.6.0cm, D.22.0 cm / ブリヂストン美術館
87. ギリシア《アッティカ黒像式スキュフォス「サテュロスとマイナス」》/紀元前470-460年/陶器/H.6.7cm / ブリヂストン美術館
88. ギリシア《アッティカ黒像式レキュトス「ディオニュソスとアリアドネ」》/紀元前490-480年/陶器/H.18.8cm / ブリヂストン美術館
89. ギリシア《アッティカ黒像式レキュトス「ディオニュソス, サテュロスとマイナス」》/紀元前490-480年/陶器/H.14.7cm / ブリヂストン美術館
90. ギリシア《アッティカ黒像式レキュトス「ディオニュソスとマイナス」》/紀元前490-480年/陶器/H.18.8cm / ブリヂストン美術館
91. ギリシア《アッティカ黒像式レキュトス》/紀元前5世紀/陶器/H.15.5cm / ブリヂストン美術館
92. ギリシア《アッティカ白地レキュトス「墓参図」》/紀元前425-400年頃/陶器/H.29.5cm / ブリヂストン美術館
93. ギリシア《アッティカ黒像式オイノコエ「ディオニュソスとマイナス」》/紀元前500年頃/陶器/25.0cm / ブリヂストン美術館
94. ギリシア《アッティカ赤像式オイノコエ「青年」》/紀元前375-350年頃/陶器/H.16.8cm / ブリヂストン美術館
95. ギリシア《アプリア赤像式レキュトス「婦人」》/紀元前340年頃/陶器/H.21.5cm / ブリヂストン美術館
96. ギリシア《カンパニア赤像式釣把手アンフォラ「婦人」》/紀元前350-325年頃/陶器/H.29.0cm / ブリヂストン美術館
97. ギリシア《カンパニア赤絵式ヒュドリア「ディオスクーロイ」》/紀元前350年頃/陶器/H.33.2cm / ブリヂストン美術館
98. ギリシア《カンパニア赤像式ヒュドリア「エロス」》/紀元前350-325年頃/陶器/H.23.5cm / ブリヂストン美術館
99. ギリシア《アッティカ赤像式キュリクス「サテュロス」》/紀元前5世紀中頃/陶器/H.7.3cm, D.25.5cm / ブリヂストン美術館
100. ギリシア《アッティカ赤像式レベス・ガミコス「ニケと女性」》/紀元前400-375年頃/陶器/H.17.0cm / ブリヂストン美術館
101. ギリシア《アプリア赤像式柱形把手クラテル「男女図」》/紀元前330年頃/陶器/H.45.0cm / ブリヂストン美術館
102. ギリシア《アプリア赤像式ペリケ「男女」》/紀元前350-340年/陶器/H.29.0cm / ブリヂストン美術館
103. ギリシア《コリントス式アリュバロス「鷺と鶏」》/紀元前610-590年/陶器/H.10.5cm / ブリヂストン美術館
104. ギリシア《アッティカ黒像式アンフォラ「ヘラクレスとケルベロス」》/紀元前520-510年/陶器/H.41.5cm / ブリヂストン美術館

10 Exhibition 3

105. 《伊勢集断簡 石山切(ももしきの)》/ 平安時代 12世紀 / 紙本墨書 / 20.4×15.8cm
106. 《伊勢集断簡 石山切(にさへや)》/ 平安時代 12世紀 / 紙本墨書 / 20.2×15.4cm
107. 片桐石州《桜の歌》/ 江戸時代 17世紀 / 紙本墨書 / 16.0×15.0cm
108. 青木木米《秋溪渡橋》/ 江戸時代 19世紀初頭 / 紙本墨画淡彩 / 24.4×19.8cm
109. 《飛青磁花瓶》/ 元時代 14世紀 / 磁器 / H.27.0cm
110. 《青磁長頸花生》/ 南宋時代 12-13世紀 / 磁器 / H.30.6cm
111. 《信楽手付水指》/ 江戸時代初期 / 陶器 / H.24.0cm
112. 《備前箱桶形水指》/ 江戸時代初期 / 陶器 / H.18.0cm
113. 《備前水指》/ 近代 / 陶器 / H.17.0cm
114. 《高麗茶碗》/ 李朝 15-16世紀 / 陶器 / H.6.5cm
115. 《伊羅保茶碗》/ 李朝 17世紀 / 陶器 / H.8.9cm
116. 了入《黒楽茶碗》/ 江戸時代 19世紀初頭 / 陶器 / H.8.0cm
117. 覚々翁《赤楽雁文茶碗 銘「武蔵野」》/ 江戸時代 18世紀初頭 / 陶器 / H.8.5cm
118. 《萩茶碗》/ 江戸時代 17世紀 / 陶器 / H.8.5cm
119. 《唐物文琳茶入 銘「宝袋」》/ 元時代 13世紀後半-14世紀 / 陶器 / H.6.2cm
120. 《瀬戸肩衝茶入》/ 江戸時代初期 17世紀初頭 / 陶器 / H.8.3cm
121. 《薩摩肩衝茶入 銘「松波」》/ 江戸時代初期 17世紀初頭 / 陶器 / H.9.1cm
122. 《高取肩衝茶入》/ 江戸時代初期 17世紀初頭 / 陶器 / H.9.0cm
123. 一入《瓢箪茶入》/ 江戸時代 17世紀末 / 陶器 / H.6.0cm
124. 片桐石州《茶杓 銘「松」》/ 江戸時代 17世紀 / 竹 / L.16.7cm
125. 随流齋《茶杓》/ 江戸時代 17世紀後半 / 竹 / L.17.6cm
126. 真田幸貴《茶杓 銘「星月夜」》/ 江戸時代 19世紀前半 / 竹 / L.18.4cm
127. 《高取四方耳付建水》/ 江戸時代 18世紀 / 陶器 / H.8.8cm
128. 《高取建水》/ 江戸時代 18世紀 / 陶器 / H.7.9cm
129. 《棒の先建水》/ 砂張 / H.11.5cm
130. 木下逸雲(絵付)《染付野菜文煎茶碗》/ 1837年 / 陶器 / H.4.3cm
131. 《唐津刷毛目振出》/ 江戸時代 17世紀末 / 陶器 / H.11.5cm
132. 《瓢箪振出》/ 瓢箪 / H.12.0cm
133. 《瀬戸柿香合》/ 江戸時代 18世紀 / 陶器 / H.4.0cm

* 所蔵の表記のない作品は、すべて石橋美術館蔵。

関連事業：

開催記念美術講座 → p.63

ギャラリートーク

通常土日のみ開催のギャラリートークを、上記講座日を除く毎日おこなった。火曜から土曜はボランティア、日曜は学芸員で、全体のツアーの後、《海の幸》を解説。

時間：14:00—14:30

広報記録：

新聞・雑誌

「美術館を5×10倍楽しもう」『西日本新聞』2006年10月2日

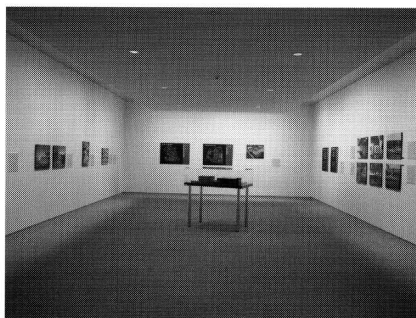
「開館50周年記念し企画展」『読売新聞』2006年10月2日

テレビ

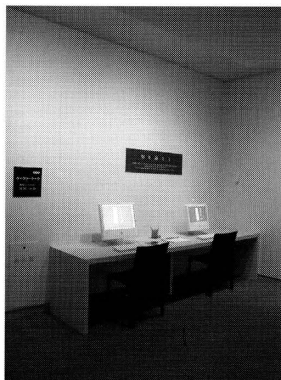
「はぴはぴテレビ」(ギャラリー情報)NHK佐賀放送局, 2006年10月13日放映



会場風景



会場風景



会場風景



会場風景

〈土曜講座〉

土曜日 14:00-16:00 ホール

通算回数 月 日 講座題目 講師

《ヨーロッパ絵画の黄金時代—レンブラントからバルビゾン派まで》

企画＝中村節子

- | | | | | |
|------|-------|-------|---|----------------------|
| 2043 | 2006年 | 1月28日 | バルビゾン芸術の歴史と遺産 | 井出洋一郎氏 (東京純心女子大学教授) |
| 2044 | | 2月 4日 | レンブラント、フェルメールの時代
—オランダの光を訪ねて— | 小林頼子氏 (目白大学教授) |
| 2045 | | 2月11日 | ヴァットーとパテル—雅宴画の画家たち— | 大野芳材氏 (青山学院女子短期大学教授) |
| 2046 | | 2月18日 | 西洋古典絵画の作者を推定する—ブリヂストン美術館所蔵《黄金の子牛の礼拝》をめぐる— | 越川倫明氏 (東京芸術大学助教授) |

《地中海学会春期連続講演会 地中海の祝祭空間》

企画＝高山 博氏 (東京大学教授, 地中海学会)

- | | | | | |
|------|--|-------|------------------------------------|---------------------|
| 2047 | | 2月25日 | 広場で生まれたルネサンス | 樺山紘一氏 (印刷博物館館長) |
| 2048 | | 3月 4日 | トルコ都市空間にみる祝祭の場
—イスタンブールとギョイヌック— | 鶴田佳子氏 (昭和女子大学専任講師) |
| 2049 | | 3月11日 | ヴェネツィアの祝祭の舞台 | 陣内秀信氏 (法政大学教授) |
| 2050 | | 3月18日 | 中世シチリア王の戴冠式
—パレルモの王宮と大聖堂— | 高山 博氏 (東京大学教授) |
| 2051 | | 3月25日 | 古代ギリシアの祝祭を彩る美術 | 篠塚千恵子氏 (東北芸術工科大学教授) |

《石橋財団コレクションを語る—時空を越えた東西美術の饗宴》

企画＝中村節子

- | | | | | |
|------|--|-------|---|------------------------------|
| 2052 | | 4月15日 | 印象派の散歩道—コロー, モネ, セザンヌ— | 島田紀夫 (ブリヂストン美術館館長) |
| 2053 | | 4月22日 | 雪舟と江戸絵画 | 小林 忠氏 (学習院大学教授,
千葉市美術館館長) |
| 2054 | | 4月29日 | 明治以後の近代日本洋画 | 富山秀男氏 (ブリヂストン美術館前館長) |
| 2055 | | 5月 6日 | [対談] 作家と語る—戦後のエコール・ド・パリと田淵安一—
田淵安一氏 (画家)
山梨俊夫氏 (神奈川県立近代美術館館長) | |
| 2056 | | 5月13日 | フランス近代絵画とジャポニスム | 高階秀爾氏 (大原美術館館長) |

《坂本繁二郎を知る三週間》

企画＝貝塚 健

- | | | | | |
|------|--|-------|--------------------|---------------------------------|
| 2057 | | 6月17日 | 坂本繁二郎が留学中のパリで考えたこと | 谷口治達氏 (九州造形短期大学学長,
田川市美術館館長) |
| 2058 | | 6月25日 | 坂本繁二郎—生涯と芸術— | 植野健造 (石橋美術館主任学芸員) |
| 2059 | | 7月 1日 | 坂本繁二郎が東京で見たもの | 貝塚 健 (ブリヂストン美術館普及課長) |

《美のみやこ—京橋, 日本橋》

企画＝貝塚 健

- 2060 7月15日 広重が描く日本橋 ————— 大久保純一 氏 (国立歴史民俗博物館助教授)
- 2061 7月22日 水景都市, 江戸と東京—日本橋を核として ——— 長谷川堯 氏 (武蔵野美術大学教授)
- 2062 7月29日 北大路魯山人と岡本家の人びと ————— 佐々木秀憲 氏 (川崎市岡本太郎美術館学芸員)
- 2063 8月 5日 日本橋界限, そして隅田川
1910-1935: 美術と文学の交流 ————— 水沢 勉 氏 (神奈川県立近代美術館企画課長)
- 2064 8月12日 骨董誕生—小林秀雄, 青山二郎が歩いた町 ——— 矢島 新 氏 (渋谷区立松濤美術館主任学芸員)

《自画像の魅力—その多様性と役割》

企画＝田所夏子

- 2065 8月26日 フランス近代の自画像—クールベからゴーガンまで
————— 三浦 篤 氏 (東京大学大学院教授)
- 2066 9月 2日 小出楯重の自画像 ————— 貝塚 健 (ブリヂストン美術館普及課長)
- 2067 9月 9日 20世紀美術の中のセルフ・ポートレイト
—ピカソからウォーホルまで ————— 太田泰人 氏 (神奈川県立近代美術館普及課長)
- 2068 9月16日 日本人にとっての自画像 ————— 野口玲一 氏 (文化庁芸術文化調査官)

《オーストラリア&日本—現代美術の熱い息吹き》

企画＝中村節子

- 2069 10月14日 今を生きるアーティストたち—展覧会制作の現場から
————— 東谷隆司 氏 (インディペンデント・キュレーター)
- 2070 10月21日 私たちの街にアートは必要か? アートは、街になにができるのか?
————— 中村政人 氏 (アーティスト, 東京芸術大学助教授)
- 2071 10月28日 [トーク] オーストラリア現代美術の楽しみ方 ——— 逢坂恵理子 氏 (水戸芸術館現代美術
センター芸術監督)
- 塩田純一 氏 (東京都庭園美術館副館長)
- 島田紀夫 (ブリヂストン美術館館長)

《地中海学会秋期連続講演会 世界遺産への旅》

企画＝小池寿子氏 (國學院大學教授, 地中海学会)

- 2072 11月 4日 南仏アルルのゴッホ, ゴーギャン ————— 木島俊介 氏 (共立女子大学教授,
東急文化村プロデューサー)
- 2073 11月11日 ピサ—中世海運国家の栄光 ————— 児嶋由枝 氏 (上智大学専任講師)
- 2074 11月18日 古都アッシジとウンブリア諸都市 ————— 池上英洋 氏 (恵泉女子学園大学助教授)
- 2075 11月25日 モン・サン・ミッシェル—地の果ての異界 ——— 小池寿子 氏 (國學院大學教授)
- 2076 12月 2日 グラナダとアンダルシア諸都市 ————— 陣内秀信 氏 (法政大学教授)

〈ギャラリートーク〉

下記のように、混雑時をのぞき、展示室でのギャラリートーク、あるいは、ホールでの展示解説を毎日実施した。

期間	時間帯	実施者	場所	
2006年				
1月2日－3月26日（「常設展示－印象派と20世紀美術」会期中）				
	火－金曜日	18：00－18：40	学芸職員	展示室
	土日曜日・祝日	16：30－17：10	学芸職員	展示室
4月8日－5月21日（「石橋財団50周年記念 雪舟からポロックまで」会期中）				
	火－金曜日	15：00－15：30	ガイドスタッフ＊	展示室
	金曜日	18：00－19：00	学芸職員	展示室またはホール
	土曜日	16：30－17：00	ガイドスタッフ	展示室
	日曜日	16：30－17：30	学芸職員	展示室またはホール
5月26日, 6月2日	金曜日	18：00－19：00	学芸職員	ホール
※会場混雑のため, 5/22からギャラリートークは行わなかった。				
6月16日－7月8日（「坂本繁二郎展」会期中）				
	火－金曜日	15：00－15：30	ガイドスタッフ	ホール
	金曜日	18：00－19：00	学芸職員	展示室またはホール
	土曜日	16：30－17：00	ガイドスタッフ	ホール
	日曜日	16：30－17：30	学芸職員	展示室またはホール
7月15日－9月18日（「なつの常設展示」会期中）				
	火－金曜日	15：00－15：30	ガイドスタッフ	展示室
	金曜日	18：00－19：00	学芸職員	展示室
	土曜日	16：30－17：00	ガイドスタッフ	展示室
	日曜日	16：30－17：30	学芸職員	展示室
10月7日－12月3日（「プリズム：オーストラリア現代美術展」会期中）				
	火－金, 日曜日	14：00－14：40	財団職員および学芸職員	展示室
	土曜日	13：00－13：40	中山朋子氏	展示室
			（プリズム展コーディネーター）	

＊ガイドスタッフ：石塚美和、岩佐悠里、小竿真紀、柏木聖子、小林美貴、極意麻岐、今野香世子、長井理佐、平川さつき、細矢芳、水田有子

〈ファミリー・プログラム〉

特別展開催中をのぞき、小学生を含む家族を対象にして、展示作品やブリヂストン美術館を楽しんでいただくプログラムを、毎月最終日曜日に実施した。

【午前】 10:30-12:30

【午後】 14:00-16:00

2006年

1月29日 「美術館探検」

【午前】 4組14人(子ども6人, おとな8人)

【午後】 参加者なし

2月26日 「制作のプロセス」

【午前】 参加者なし

【午後】 2組7人(子ども3人, おとな4人)

3月26日 「動物探し」

【午前】 2組6人(子ども3人, おとな3人)

【午後】 参加者なし

7月30日 「暑中お見舞い申し上げます」

【午前】 2組6人(子ども3人, おとな3人)

【午後】 4組10人(子ども6人, おとな4人)

8月27日 「制作のプロセス」

【午前】 1組4人(子ども2人, おとな2人)

【午後】 参加者なし

9月17日 「私の美術館案内」

【午前】 5組11人(子ども6人, おとな5人)

【午後】 2組6人(子ども3人, おとな3人)

〈美術講座〉

- | 月 日 | 講座題目 | 講師 |
|--|--------------------|--|
| 《「坂本繁二郎展」開催記念美術講座》於 石橋文化会館2F小ホール 14:00-15:30 | | |
| 2006年 5月13日 | 坂本繁二郎生涯と芸術 | 植野健造 |
| 5月20日 | 坂本繁二郎が留学中のパリで考えたこと | 谷口治達 氏 (九州造形短期大学学長,
田川市美術館館長) |
| 5月27日 | 坂本繁二郎の風景画 | 田内正宏 |
| 《「雪舟からポロックまで」開催記念講演会》於 文化センター共同ホール 14:00-16:00 | | |
| 6月24日 | 名画は何度も蘇る | 赤瀬川原平 氏 (美術作家) |
| 《「5×10倍楽しむ石橋美術館」開催記念美術講座》於 講座室 14:00-15:30 | | |
| 10月14日 | 石橋美術館と絵と | 平間理香 |
| 10月21日 | 青木繁と古事記 | 田内正宏 |
| 《「国立美術館巡回展」開催記念美術講座》於 講座室 14:00-15:30 | | |
| 11月26日 | 美術における出会い | —ひと, 画家, 作品, そしてコレクション — 植野健造 |
| 12月 3日 | 名作と出会う | —京都国立近代美術館の作品を中心に— 山野英嗣 氏 (京都国立近代美術館主任研究員) |

〈ギャラリートーク〉

第1週—4週の日曜日は当館学芸員が、また7月から土曜日はサポートボランティアが、本館または別館の展示室で実施した。

時間: 14:00-14:20

〈学習における美術館の利用など〉

2006年	1月28日(土)	久留米文化振興会「巨大絵画に挑戦!!」	28名
	2月15日(水)	久留米市立明星中学校「地域発見学習」	3名
	5月27日(土)	石橋くるめっ子館「土曜楽校：久留米が生んだ画家繁二郎に学ぶ」	52名
	8月10日(木)	久留米市小学校教育研究会「図画工作科部会実技研修会」	80名
	9月 8日(金)	久留米市立諏訪中学校 「総合的な学習におけるフィールドワーク：青木繁・坂本繁二郎」	2名
	10月17日(火)	久留米市立篠山小学校6年生「総合的な学習の時間」	12名
	10月29日(日)	NPO団体ASAP「体験！画家ものがたり！プロジェクト：高島野十郎」	40名
	11月 8日(水)	社団法人北海道美術館協力会	37名
	11月 8日(水)	小郡市立三国中学校1年生「総合的な学習の時間」	30名
	11月16日(木)	財団法人ジェイアール東海生涯学習財団	4名
	11月24日(金)	徳島大学公開講座「楽しいフィールドワーク：新美術館散歩」	10名

〈館外活動〉

2006年	5月14日(日)	久留米市文化観光部文化財保護課 「坂本繁二郎をしのぶ歴史探訪」(現地研修)	約40名(担当＝植野)
	5月21日(日)	えーるピア久留米生涯学習センター「ふるさとの歴史入門講座：坂本繁二郎とゆかりの地めぐり」(現地研修)	約70名(担当＝植野)
	5月28日(日)	えーるピア久留米生涯学習センター 「ふるさとの歴史入門講座：坂本繁二郎の生涯と芸術」	約70名(担当＝植野)
	7月22日(土)	鹿児島県歴史資料センター黎明館 「黎明館講演会：黒田清輝と白馬会」	約50名(担当＝植野)
	8月10日(木)	久留米市民図書館「久留米市小学校教育研究会図画工作科部会夏季美術研修会： 郷土の画家・坂本繁二郎の絵に対する思いを探る」	約80名(担当＝植野)
	9月28日(木)	久留米大学「久留米学：筑後の画家たち」	約200名(担当＝植野)
	10月 4日(水)	筑邦市民センター「5×10倍楽しむ石橋美術館」	約50名(担当＝平間)
	10月 5日(木)	ふれあい農業公園「5×10倍楽しむ石橋美術館」	約80名(担当＝平間)
	10月24日(火)	えーるびあ久留米生涯学習センター「5×10倍楽しむ石橋美術館」	約200名(担当＝平間)
	10月 7日(土)	瀬高町立図書館「平成18年度美術講演会：筑後の画家たちー坂本繁二郎を中心にー」	約50名(担当＝植野)
	11月 5日(日)	大牟田市中央公民館「大牟田美術協会記念事業講演会：筑後の画家たちー坂本繁二郎を中心にー」	約50名(担当＝植野)
	11月 7日(火)	春日市立春日北小学校「図画工作科授業：アーティストの思いや願いにふれてオブジェをつくろう」	30名(担当＝後藤)

〈夏休みこどもプログラム2006〉

2006年7月14日(金)―9月3日(日), 「音」をテーマとした企画展「サウンド・オブ・ミュージアム」にあわせたクイズや課題が記載されたパンフレットを受付で配布。期間中毎週土曜日の午後と日曜日の午前に, サポートボランティアによる小中学生向けのギャラリー・トークを実施。また前原市在住のテキスタイルアート作家・田中恭子氏の助言と協力を得て, 7月20日, 8月10日・24日の3回, 切り紙絵の手法を使った布バッグ作りに挑戦する親子実技講座を実施。完成した作品は休憩テラスに展示。146名の親子が参加した。



親子実技講座

〈サポートボランティア〉

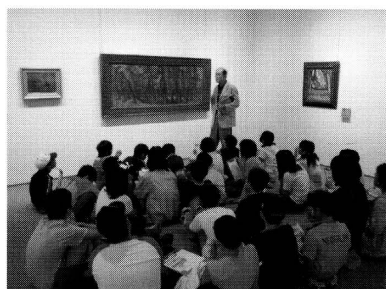
2006年より年間をとおしてさまざまな美術館活動をサポートする「サポートボランティア制度」を発足。選考, 研修を経て4月から30名で活動を開始。坂本アトリエ解説, ギャラリー・トーク, 展示説明など年間5,000名を超える来館者に対応した。

サポートボランティア:

池田奈緒美, 稲益亜紀子, 井上照代, 牛島千春, 白井理恵, 上村明子, 清原仁美, 隈早苗, 神崎幸子, 菰原貴子, 坂井弘美, 高橋由希子, 高本元子, 田中照子, 棚町薫子, 富安重孝, 豊福真知子, 仲上祥世, 福田悉子, 福山清美, 本田博子, 松原知子, 溝田桂, 牟田麻里耶, 森房乃, 諸富孝子, 矢ヶ部節子, 柳秀昭, 杠和子, 龍尾美智子 以上30名(50音順 敬称略)



ボランティア活動



ボランティア活動

〈博物館実習生受入〉

学芸員資格取得のための博物館実習を下記のように実施した。

期間：2006年8月22日（火）—8月26日（土）5日間

実習生：7名（7校）

実習内容：

	1	2	3	4	5	6
	9：30-10：45	10：45-12：00	13：00-14：15	14：15-15：30	15：30-16：45	16：45-17：30
8月22日 （火）	ガイダンス・総論 （平野）	美術館運営 （郷原）	石美施設見学 （郷原）	展示企画 （森山）	課題実施 （後藤）	質疑・応答 ノートまとめ
8月23日 （水）	展覧会1(概要) （平間）	教育普及 （後藤）	作品調査・演習 （平間）	作品調査・実習 （石井）	文献・情報検索 （後藤）	質疑・応答 ノートまとめ
8月24日 （木）	展覧会2 （森山）	保存管理 （石井）	展示方法 （石井）	文献調査 （植野）	解説作成1 （植野）	質疑・応答 ノートまとめ
8月25日 （金）	展覧会3(展示プラン) （植野）	作品管理 （森山）	解説作成2 （平間）	発表1 （後藤）	発表2 （後藤）	質疑・応答 ノートまとめ
8月26日 （土）	リーフ作成1 （森山）	リーフ作成2 （森山）	リーフ作成3 （森山）	リーフ作成4 （森山）	リーフ設置 （後藤）	質疑・応答 終了会

※実習の成果発表として、展示作品に各自のテーマに沿った解説リーフレットを作成することを課題とした。作成したリーフレットは会場に設置した。

入場者数

ブリヂストン美術館

月	開館日数	有料				無料		総計	一日平均
		一般	大・高生	団体	合計	(中・小生)			
1	26	4,539	624	115	5,278	1,037	(149)	6,315	243
2	24	4,459	457	341	5,257	1,002	(118)	6,259	261
3	23	4,556	568	125	5,249	1,217	(245)	6,466	281
4	19	7,921	474	419	8,814	1,318	(180)	10,132	533
5	27	25,238	1,579	409	27,226	4,697	(505)	31,923	1,182
6	17	13,690	749	238	14,677	5,022	(238)	19,699	1,159
7	21	8,385	660	137	9,182	6,584	(512)	15,766	751
8	28	6,659	748	195	7,602	2,334	(1,267)	9,936	355
9	16	3,375	392	191	3,958	890	(159)	4,848	303
10	21	3,671	416	133	4,220	1,782	(61)	6,002	286
11	26	4,085	526	318	4,929	3,008	(79)	7,937	305
12	3	568	104	7	679	785	(15)	1,464	488
合計	251	87,146	7,297	2,628	97,071	29,676	(3,528)	126,747	505

ブリヂストン美術館ホールイベント

	イベント名	開催日時	入場料	入場者数	出演者
1	オーストラリア先住民の文化と音楽	3.21(火)14:00	前売2500円 当日3000円	72人	上野哲路 松山利夫
2	Voice encounter	5.28(日)16:00	前売2500円 当日3000円	100人	佐近田展康 山川冬樹 日比谷カタン 高野諭
3	中世ヨーロッパの放浪楽師	7.8(土)14:00	前売2500円 当日3000円	77人	ジョングルー ル・ボン・ ミュジシャン
4	ヒンドウスターニー・サンギート Vol.2	9.10(日)14:00	前売2500円 当日3000円	41人	栗原崇 寺原太郎 Shen Flindell
5	アジア中央部のどうた紀行	11.23(木祝)15:00	前売2500円 当日3000円	103人	等々力正彦 嵯峨治彦

石橋美術館

月	開館日数	有料					無料			総計	一日平均
		一般	シニア他	大高生	団 体	合 計	中小生	招待他	合計		
1	24	668	118	45	180	1,011	1,571	140	1,711	2,722	113
2	24	656	139	31	88	914	258	221	479	1,393	58
3	27	585	268	41	754	1,648	467	94	561	2,209	82
4	18	885	321	33	273	1,512	92	356	448	1,960	109
5	27	3,413	1,495	137	1,728	6,773	891	4,721	5,612	12,385	459
6	20	4,352	1,937	182	1,707	8,178	596	5,576	6,172	14,350	718
7	17	2,129	490	111	808	3,538	603	2,178	2,781	6,319	372
8	28	1,226	145	128	574	2,073	940	207	1,147	3,220	115
9	21	868	215	38	448	1,569	90	318	408	1,977	94
10	24	3,687	976	223	2,763	7,649	347	1,622	1,969	9,618	401
11	28	2,768	1,415	99	1,387	5,669	249	2,235	2,484	8,153	291
12	23	1,679	1,052	77	648	3,456	925	3,268	4,193	7,649	333
合計	281	22,916	8,571	1,145	11,358	43,990	7,029	20,936	27,965	71,955	256

新収蔵作品 New Acquisitions

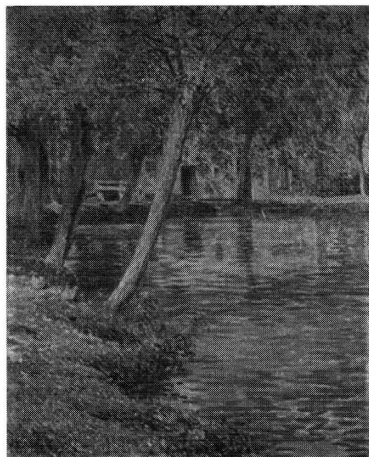
絵画 Paintings

ウィツマン, ルドルフ
WYTSMAN, Rodolphe
1860-1927

水に映ずる家
油彩・カンヴァス
81.9×66.1cm
木枠に署名
外洋216

The House Reflected in the Water
Oil on canvas
81.9×66.1cm
Signed on the stretcher : R. Wytsman

来歴：個人蔵, 東京; 2006年, 石橋財団に寄贈
Prov. : Private Collection, Tokyo; 2006, donated to the Ishibashi Foundation.



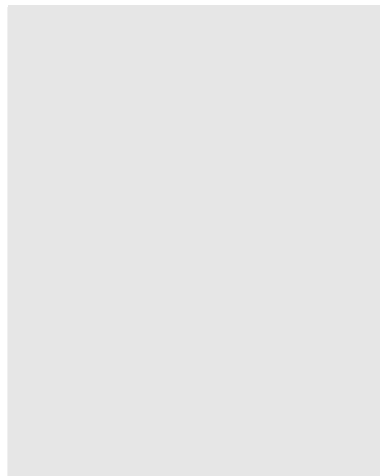
ポリャコフ, セルジュ
POLIAKOFF, Serge
1900 / 06-1969

コンポジション
1959年
油彩・カンヴァス
92.2×73.2cm
右下に署名
外洋215

Composition
1959
Oil on canvas
92.2×73.2cm
Signed lower right : Serge Poliakoff

来歴：ギャラリー・アート・ポイント, 東京; 2006年, 石橋財団
Prov. : Gallery Art Point Inc., Tokyo; 2006, Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh: ギャラリー・アート・ポイント, 東京「セルジュ・ポリャコフ展」no.1



松本豊太(松濤)
MATSUMOTO, Toyota (Shoto)
1874-1924

二人の少女

1902年
油彩・カンヴァス
116.5×91.3cm
右下に署名：松濤筆
裏面：為菅公紀念絵画展覧会出品松濤松本豊画 / 干時明治三十五寅年初春日洋535

Two Girls
1902
Oil on canvas
116.5×91.3cm
Signed lower right
Inscribed on the reverse



来歴：松本成一，福岡；2006年，石橋財団に寄贈
Prov. : MATSUMOTO Seiichi, Fukuoka; 2006, donated to the Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh.: 1902, 太宰府? 「菅公紀念絵画展覧会」

坂本繁二郎
SAKAMOTO, Hanjiro
1882-1969

水繩山風景

1898年
水彩・紙
56.5×74.5cm
右下に署名：サカモト
日洋428

Landscape of Mt. Mino
1898
Watercolor on paper
56.5×74.5cm
Signed lower right

来歴：坂本幽子，八女；2006年，石橋財団に寄贈
Prov. : SAKAMOTO Yuko, Yame ; 2006, donated to the Ishibashi Foundation

展覧会歴 Exh. : 1982年，東京国立近代美術館 / 京都国立近代美術館 / 石橋美術館「生誕100年記念 坂本繁二郎展」no.2; 1999年，石橋美術館「没後30年記念 坂本繁二郎」no.2; 2002-03年，石橋美術館「青木繁・坂本繁二郎生誕120年記念 筑後洋画の系譜」no.70; 2006年，石橋美術館 / プリザストン美術館「石橋美術館開館50周年記念 坂本繁二郎展」no.2

文献 Bibl. : 1970年，『坂本繁二郎作品全集』朝日新聞社，no.138; 1981年，『増補坂本繁二郎作品全集』朝日新聞社，no.155; 1986年，『坂本繁二郎水彩画集』光村図書，no.1

草画舞台姿原画

1911年

鉛筆, 水彩・紙

Original Picture for *Sketch of Players on Stage*

1911

Pencil and watercolor on paper

来歴：坂本幽子, 八女; 2006年, 石橋財団に寄贈

Prov.: SAKAMOTO Yuko, Yame; 2006, donated to the Ishibashi Foundation.

沢村宗之助の皆鶴姫

26.6×19.0cm

日洋537-1

Sawamura Sonosuke playing Minazuruhime

26.6×19.0cm

沢村宗十郎の榛沢平九郎

26.3×19.0cm

日洋537-2

Sawamura Sojuro playing Hanzawa Heikuro

26.3×19.0cm

初瀬浪子の秋山静子

29.3×19.0cm

日洋537-3

Hatsuse Namiko playing Akiyama Sizuko

29.3×19.0cm

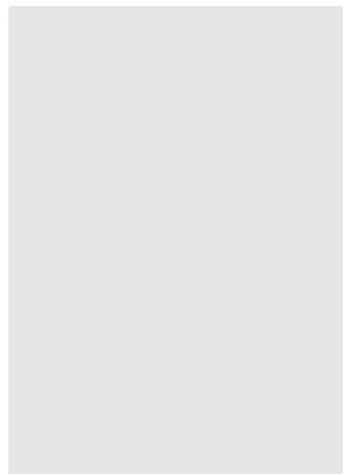
市川高麗太郎の長作

29.3×19.2cm

日洋537-4

Ichikawa Komataro playing Chosaku

29.3×19.2cm



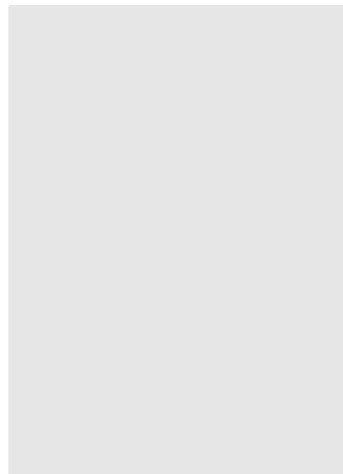
沢村訥子の松平吉峰

29.3×19.2cm

日洋537-5

Sawamura Tosshi playing Matsudaira Yoshimine

29.3×19.2cm



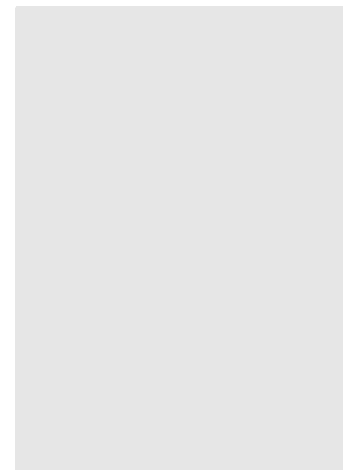
市川高麗蔵の姉輪平次

29.2×19.2cm

日洋537-6

Ichikawa Komazo playing Anewa Heiji

29.2×19.2cm



老婆

1923年

パステル, 水彩・紙

27.8×20.8cm

左下に印章: 「一心庵」(朱字長方印)

日洋538

Woman

Pastel and watercolor on paper

27.8×20.8cm

Stamped with the artist's seal lower left

来歴: 坂本幽子, 八女; 2006年, 石橋財団に寄贈

Prov.: SAKAMOTO Yuko, Yame; 2006, donated to the Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh.: 2006年, 石橋美術館 / プリヂストン美術館「石橋美術館開館50周年
記念 坂本繁二郎展」no.42

文献 Bibl.: 1986年, 『坂本繁二郎水彩画集』光村図書, no.28

春(駒)

1935年頃

墨, 淡彩・紙

130.0×60.5cm

右下に印章: 「一心庵」(朱字方印)

日洋539

Spring, Foal

c.1935

Sumi and wash on paper

130.0×60.5cm

Stamped with the artist's seal lower right

来歴: 坂本幽子, 八女; 2006年, 石橋財団に寄贈

Prov.: SAKAMOTO Yuko, Yame; 2006, donated to the Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh.: 1999年, 石橋美術館「没後30年記念 坂本繁二郎」no.42

月

1964年頃

色鉛筆, 水彩・紙

45.5×22.7cm

右下に署名・印章: 木拈「一心庵」(白字朱長方印)

日洋540

The Moon

c.1964

Colored pencil and watercolor on paper

45.5×22.7cm

Signed and stamped with the artist's seal lower right

来歴: 坂本幽子, 八女; 2006年, 石橋財団に寄贈

Prov.: SAKAMOTO Yuko, Yame; 2006, donated to the Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh.: 1999年, 石橋美術館「没後30年記念 坂本繁二郎」no.70

杉全直

SUGIMATA, Tadashi

1914-1984

袋を持った空間

1963年

油彩・カンヴァス

145.5×112.6cm

右下に署名: 直 SUGIMATA

日洋541

Space with Pocket

1963

Oil on canvas

145.5×112.6cm

Signed lower right

来歴: 2006年, 石橋財団

Prov.: 2006, Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh.: 1963, フォルム画廊・文藝春秋画廊, 東京「個展・袋をもった空間」

平野 遼
HIRANO, Ryo
1927-1992

朝
1991年
油彩・カンヴァス
87.6×144.6cm
左下に署名：遼 Ryo. Hi
日洋532

Morning
1991
Oil on canvas
87.6×144.6cm
Signed lower left

来歴：平野清子, 北九州; 2006年, 石橋財団
Prov.: HIRANO Kiyoko, Kitakyushu; 2006, Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh.: 1991年, 下関市立美術館「平野遼展—光と線の交響—」no.38

膨張する人

1985年
ペン・インク, 水彩・紙
41.0×33.0cm
右下に署名：遼 R. Hirano 遼 Ryo. Hi
日洋533

Man Swelling
1985
Pen and ink, and watercolor on paper
41.0×33.0cm
Signed lower right

来歴：平野清子, 北九州; 2006年, 石橋財団
Prov.: HIRANO Kiyoko, Kitakyushu; 2006, Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh.: 1991年, 下関市立美術館「平野遼展—光と線の交響—」no.98

どこへ行くか

1980年

ペン、インク、グワッシュ・紙

39.5×48.5cm

右下に署名：Ryo. 遼

日洋534

To What Place

1980

Pen, ink, and gouache on paper

39.5×48.5cm

Signed lower right

来歴：平野清子，北九州；2006年，石橋財団に寄贈

Prov. : HIRANO Kiyoko, Kitakyushu; 2006, donated to the Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh. : 1984年，胡桃画廊，大分県中津市「非抽象絵画の展開—平野遼の世界展」；

1991年，下関市立美術館「平野遼展—光と線の交響—」no.95

堂本尚郎

DOMOTO, Hisao

1928-

連続の溶解9

1964年

油彩、アクリル・カンヴァス

199.7×150.7cm

日洋530

Solution de Continuité No.9

1964

Oil and acrylic on canvas

199.7×150.7cm

来歴：作者，東京；南天子画廊，東京；2006年，石橋財団

Prov. : Artist, Tokyo; Nantenshi Gallery, Tokyo; 2006, Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh : 1965年，ベニス・ビエンナーレ；1988年，西武美術館，東京 / 大原美術館，倉敷「堂本尚郎30年展」no.25

二次元的なアンサンブル

1961年

顔料・紙

76.3×57.0cm

右側に署名：Domoto

日洋531

Dual Ensemble

1961

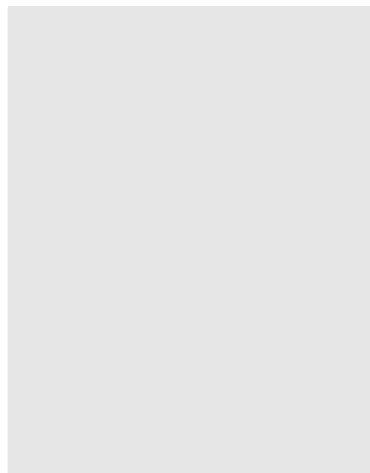
Color on paper

76.3×57.0cm

Signed on the right side

来歴：南天子画廊, 東京; 2006年, 石橋財団

Prov. : Nantenshi Gallery, Tokyo; 2006, Ishibashi Foundation.



版画 Prints

草画舞台姿

1971年復刻

木版

Sketch of Players on Stage

1971

来歴：坂本幽子, 八女; 2006年, 石橋財団に寄贈

Prov. : SAKAMOTO Yuko, Yame; 2006, donated to the Ishibashi Foundation.

沢村宗之助の皆鶴姫

22.3×15.8cm

日版139-1

Sawamura Sonosuke playing Minazuruhime

22.3×15.8cm

沢村宗十郎の榛沢平九郎

22.5×15.8cm

日版139-2

Sawamura Sojuro playing Hanzawa Heikuro

22.5×15.8cm

初瀬浪子の秋山静子

22.3×15.8cm

日版139-3

Hatsuse Namiko playing Akiyama Sizuko

22.3×15.8cm

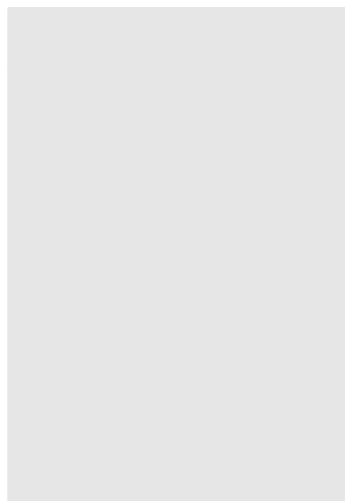
市川高麗太郎の長作

22.2×15.9cm

日版139-4

Ichikawa Komataro playing Chosaku

22.2×15.9cm



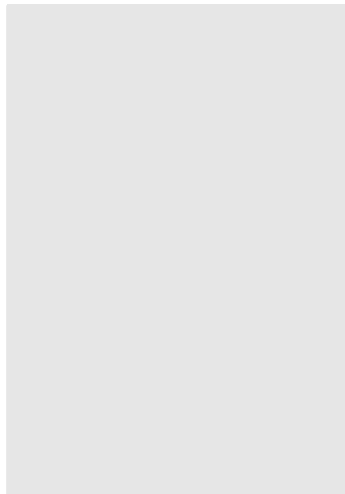
沢村訥子の松平吉峰

21.6×15.0cm

日版139-5

Sawamura Tosshi playing Matsudaira Yoshimine

21.6×15.0cm



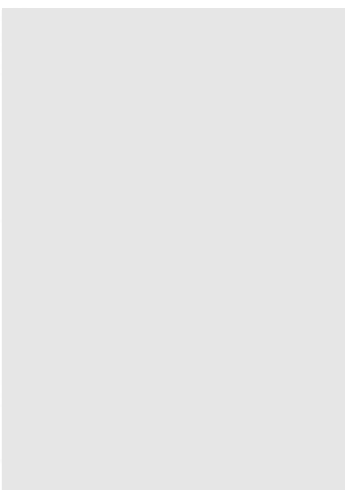
市川高麗蔵の姉輪平次

21.5×14.8cm

日版139-6

Ichikawa Komazo playing Anewa Heiji

21.5×14.8cm



〈坂本繁二郎関連資料〉

石橋美術館では、坂本繁二郎関連資料を受贈した。

権藤俊子宛坂本繁二郎書簡

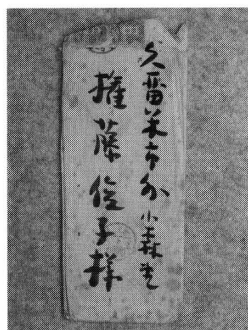
1914(大正3)年4月16日付

便箋8枚、継ぎ紙1通をひとつの封筒に収める。

来歴：大津篤子、久留米；2006年、石橋美術館に寄贈

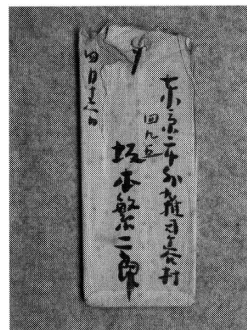
文献：1969年、『私の絵私のこころ』日本経済新聞社、p.125-141

権藤俊子は、繁二郎の夫人・薫の妹。



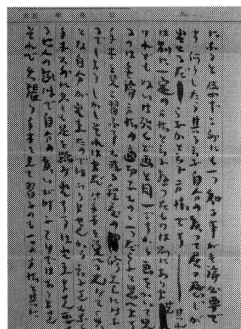
封筒表

久留米市外小森野
権藤俊子様

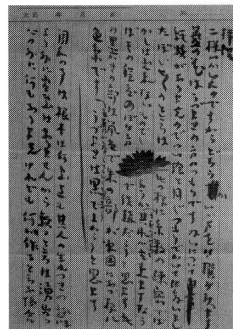


封筒裏

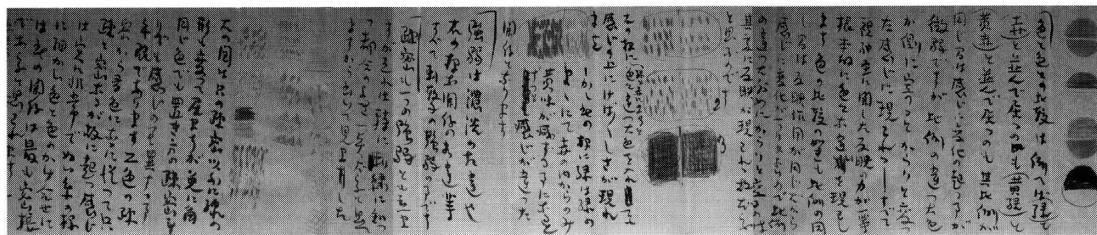
東京市外雑司ヶ谷村四九五
坂本繁二郎
四月十六日



便箋



便箋



(便箋)

拝復

二様にいかたのですからどちらかい、方を御撰み願います 菱の花はうづまきの方のつもりです ぬいについて経験がありませんのでつい絵と同じつもりでかいて仕舞いました ほじやほじやのところは此の様に糸数の疎密でぼかしは出来ないものでしょうか 可成小さい糸で其れが出来ますならば其の程度のぼけ方で結構だらうと思います 此の墨がきの部は鼠色で朱の部が原図にある様に色糸です 色糸は少し大きくてもいい、と思います うづまきは黒でよからうと思います

調和の事は根本は何処迄も其人の生れつきの趣味より外に出処はありませんから頼るところは湧出る心の外に何もありませんけれども何か作ると云ふ場合になると感ずる外にも一つ知る事が無論必要です 何うしたら其う云ふ自分の願つて居る感じが出せるだらふかと云ふ方法です——其れは別に一定の方法と云ふ極つたものは別にありませんけれどもぬいは殆んど画と同一ですから画をかいて見るのは無論方法の適切なものの、一つだらふと思へます 手本を見て習ふ事も或る程度の修養にはなるでしょう しかしそれはまだ御手本を覚へる丈けて真とな自分が出来たものではありませんから云ふ迄もなく手本以外に少しも足を踏み出す事は出来ません 要するに人の趣味で自分の願いが叶ふわけではありません それで矢張り手本を見て習ふのも一つの方法と共に自分で模様を描いて見ると云ふ事が何うしても放れられない最後の必要です 手本を習ふと云ふのは一々手習する様に描き方を習ふと云ふ事ではありません 要するに参考的に研究的に色々の模様を見て自分の頭を造る事です——しかし右の様な態度になると口で云へば一口ですが一朝一夕にそう安々とは行きません 調和と云ふ事は一口に調和と云つても恐ろしい程底の深い広い意味と連絡が続いて引放す事の出来ない関係が続いて居ますから実を云ふとい、調和を分かる様になるのは取りも直さず自分の心を取直さねばなりません 調和が分かると云ふ事は日常に極めて易々と何気もなく云ふたり仕たりされて居ますけれ共之れは大きな問題です——ですから其点に向つて進むのが根本的の力を養ふ事ですがずっと希望を小さくして手近な程度で甘んずるのでありますならば出来上つたものを見る事と自分で可成図案を工夫して見る事との二つでしょう 自分で工夫するのが一番自分の力を造らへる事になります 従つて調和が分かる事になります——つまるところは矢張り所謂可成品のい、好きなど自分で思ふものを自分で描いて見る事です——それから一つ手近かな事は何か図案の原図を只色丈け自分で色々工夫して付けて見るのです しかし此の方法は只慣れると云ふ事丈けです 慣れるには之れが一番易い方法でしょう 色々の色をつけかへつけかへして居る内には自づから工合も分かつて来ると思ふ しかし趣味の分つて来ると云ふ事は仕事を覚へるのと違いますから分かるものは易々と分かり分らないものは遂に分らない事になるでしょう

ぬいの色取りを自分でするのは云ふ迄もなく一つの色彩の図案製作ですから画を描くのと殆んど同じでしょう——すれば何うしても生れ付きが根本に必要でぬい斗りでなく画の方の図案が自分で出来ねばなりませんまい 図案の頭を養ふのは何うしても画を習ふ事に依つて遂ぐるのが一番適當の道です だからぬいをする人は画の必要にいやや応なしに会合する事になるでしょう

小森野橋渡り初めの三夫婦は誠に趣味深き事に想像します あの辺一帯の地形を背景として特に之れが感ぜられます 全体小森野村と云ふところは妙に只一人りの百姓の行動にも何か或る夢が動きます これは小森野の地形と其処に養わる、人情が或る小森野の空気を發揮するのでしょう 殊に権藤家に出入する色々の人の一つ一つに違った人格を發揮して居るところは余程面白く思ふ 都会の地に居ると何うしても複雑の様で実は平等の思想に養われ人と人との色分けが見へなくなつて来ますがでも余程当地に慣れが出来ましたので其れが出来れば出来る程益々反対に面白く見へ出すのが今迄気の付かなかつた小森野と云ふもの、面白さです——四郎爺、ばしやん、政、の様な手近なところでも一々発瀾として面目を發揮して居る おりせ、に到つては特に其尤なるもの、

写真三枚を拝見しました 千鶴しやんの大きなのには実に々々驚きました 寧ろぎよつとして仕舞ました
亀原でりんごたべの面影はもう何処を見てもありません たーちやんの洋服は殊によく似合っている 香より
写真の御礼をすぐ上げる筈ですが書く閑がありませんのですぐあとで尚手紙を上げるそうです 栗が出来
てから大分せわしくなりましたので此頃は何処にも容易に手紙が出ないようです
博覧会も日々人が多い様ですが未だ先達一寸一度素通りした丈けで其後行ません 今日ふはいつもお留守番
役のはゞ様をつれて香と栗と三人博覧会を見に行きました 文しやん絹しやんは学校で小生の御留守番と云
ふ事になつて居ます 姉さんから博覧会の御話しが何れ御手紙になる事と存じます いつも乍らのきたない
字で何卒御許下さい

繁二郎

俊子様

※日付欄に16日の記載あり

(継ぎ紙)

趣味の高下は別紙の様に個人性が働かねば何うする事も出来ない生きた感じですがぬい色彩に心得て置
都合のよからふと思わるゝ色の見へ方の原則を茲に一つ二つ書いて見ます

色の感じに関係する事で根本的になるのは

色と色との反映(余色)

色と色との比較

強弱

疎密

寒暖

質との関係

最後に各個人色の好み

等であらふと思われまゝ 色と色との反映は視神経の疲労から大体は起る一種の快感で赤斗り見つめて居
ると目が痛くなる 其時緑に目を移すと暫くの間は大変心持がいゝ太陽の光線の色は赤と青と黄との根本色で
すが人の視神経は赤と緑と黄との受感力を持つて居る由尚之れには幾分の疑儀もあるそうです 其れ等の関
係から「紫と黄」「赤と緑」「橙と青緑」「黒と白」と云つた様な色が現す快感は一種反映力的な快感があり
ます

色と色との比較は例えば(緑)と(赤)と並んで居るのも(黄緑)と(黄赤)と並んで居るのも其比例が同じ間は感
じに変化の起る事が微弱ですが比例の違つた色が側に寄るとからりと変つた感じに現われるしすべて視神経
に關した反映の力が一等根本的に色々な違いを現わします 色の比較の如きも比例の同じ間は反映作用が同
じだから感じに変化が一つは少ないので比例の違つた為めにかからりと変るのは其処に反映が現われる故だら
ふと思ふのです

右の様に緑と赤に2,3と色々違つた色を入れても感じの上にけばけばしさが現れません しかし此の様に
緑は緑のまゝにて赤の内からのみ黄味が減ずる事になるとずつと感じが違つた関係となります

強弱は濃淡の相違や右の様な関係の相違等すべて刺激の強弱の事です

疎密も一つの強弱とも云へますがそれは特に刺繍に知つて都合のよき一点だらふと思へますから書いて見ま
した

右の図は只の疎密以外に線の形も変つて居ますが兎に角同じ色でも置き方の疎密斗りでも感じの差異する事無限であります 二色の疎密から多色になるに従つて只疎と密なるが故に起る感じは実に非常でぬい糸の様に細かい色と色のかけ合せには此の関係は最も密接であらふと思われまふ 糸をあらく並べたり又細かく並べたりなど

同じ青笹の内に一線二線の別色が這入る斗りで大変感じが変つて来ます 少し複雑に色をかけ合せるとなると其結果は立派な油絵でも色鉛筆画でも優に描けるわけになる——ぬい糸の研究に色鉛筆は最も適したものだらふと思へます 色鉛筆のかけ合せは水画とちがつていくら雑ぜてもよごれませんか丁度都合のいゝものだらふと思へます

寒暖は心持丈けで分けられたのです しかし自然の内に自づから事実の上にも現われて居ります かりに熱から寒の順序に並べて見ませう

ざつと上図の様なものです——ですから(派手)とか(をとなし)とか(沈んだ)とか(重い)又は(軽快)とか云ふ様なものは此寒熱も大変関係し前の疎密も大変関係し其他強弱も反映もがなす業です

で以上は色の事でしたが

質の関係から色の感じが違ふと云ふのは例へば同じ黄色でも之れを人の顔に持つて行つては気持が悪るいけれども花や金色とすれば美しい感じとなる色に相違はないけれ共品物の質によつて色が落付いたり付かなかつたりする事です 尚此外に色其物にも質の上に大変相違した感じを以つて居ます透明色と不透明色や黄の質赤の質青の質をよく見ると質と云ふもの、相違せる感じも大変に動いて居る 画を描く上には此質が大変関係しますけれ共ぬい糸の上には割合に糸の質の感じの方が絵の具の質よりも関係の深いのは云ふ迄もなささうです

で以上は感じの起る根本の事ですが無無論之れ等の関係に生きた感じを作り出すのは人の頭と好みですから之れにのみたよるのは却つて理屈に落ちてよくない其れが為めに捉れる事になりますから之れは只趣味の材料として色々に頭で生かして行かねばならぬのは無論です

尚質と色との関係は物質の質丈けに止まらず感じ上の質例へば(暗らい感じのする黒い水の上にある白い花)と(浅い感じのする青い水の上にある白い花)其の二つの関係は色の感じよりつづいて所謂感じの質と関係します 只黒い水と白い花又は青い水と白い花丈けでは只黒白青白の好ききらいに止まりますが浅い水の上の花を連想されるときに只の青白の外にさらさらとしたとでも云ふ別の感じが動き暗い中に浮く白い花には或る別のさら、とは丸で違つた詩の感じも動く様になるでしょう 之等の関係も色を支ふ上に無論頭脳が働かねばなりません でなければ云ふ迄もなく色彩の生きた活動は出来ないわけです

以上は余りに簡単ですが根本的な関係を以て居ます

も少し委細実は書き度いのですが逆も手紙では述べ切れませんから一寸丈けにして置ます

滞欧期書籍一式

来歴：坂本幽子、八女；2006年、石橋美術館に寄贈

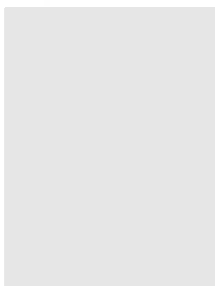
展覧会歴：2006年、石橋美術館 / プリダストン美術館「石橋美術館開館50周年記念 坂本繁二郎展」no.173

草画舞台姿(墨版試刷)

1911年

木版

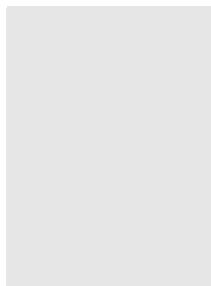
来歴：坂本幽子, 八女；2006年, 石橋美術館に寄贈



沢村宗之助の皆鶴姫

27.0×19.3cm (22.7×15.9cm)

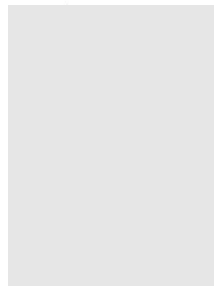
文献：1980年, 『坂本繁二郎全
版画集』 形象社, p.80



沢村訥子の松平吉峰

27.0×19.3cm (21.8×14.9cm)

文献：1980年, 『坂本繁二郎全
版画集』 形象社, p.80



初瀬浪子の秋山静子

27.2×19.5cm (19.7×14.6cm)

草画舞台姿(素描)

市川高麗蔵の姉輪平次

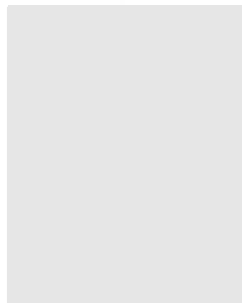
1911年

鉛筆・紙

18.8×14.0cm

来歴：坂本幽子, 八女；2006年, 石橋美術館に寄贈

文献：1980年, 『坂本繁二郎全版画集』 形象社, p.81



河口

1900年

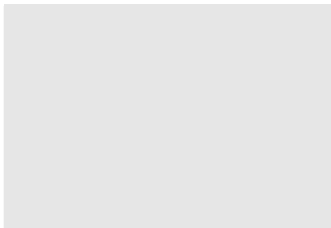
鉛筆・紙

18.9×29.2cm

右下に署名：H-S

来歴：坂本幽子, 八女
；2006年, 石橋美術館
に寄贈

文献：1986年, 『坂本
繁二郎水彩画集』 光
村図書, no.3



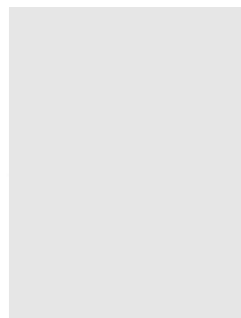
人物肖像

鉛筆, 水彩・紙

20.2×14.8cm

右下に書き込み：高嶋君

来歴：坂本幽子, 八女；2006年,
石橋美術館に寄贈

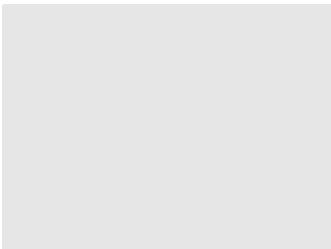


外国作家模写

鉛筆・紙

29.0×38.0cm

来歴：坂本幽子, 八女
；2006年, 石橋美術館
に寄贈



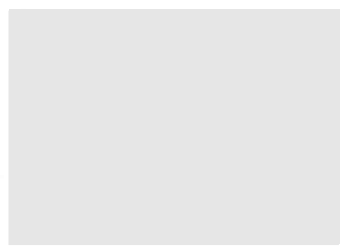
八女風景

墨, 淡彩・紙

30.2×42.3cm

右下に印章：(白字朱
長方印)

来歴：坂本幽子, 八女
；2006年, 石橋美術館
に寄贈

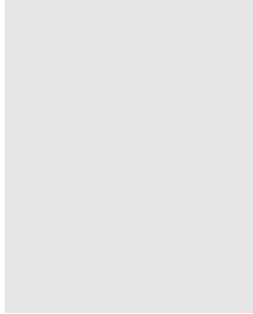


表紙絵画稿

来歴：坂本幽子，八女；2006年，石橋美術館に寄贈

冒険世界

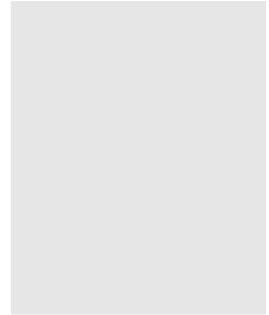
鉛筆，水彩・紙
34.1×25.6cm



やまなみ

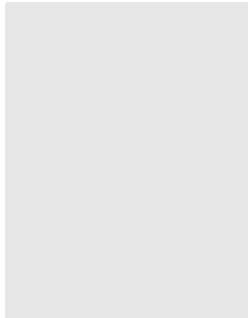
鉛筆，墨，水彩・紙
26.0×20.4cm

文献：1980年，『坂本繁二郎全
版画集』形象社，p.201



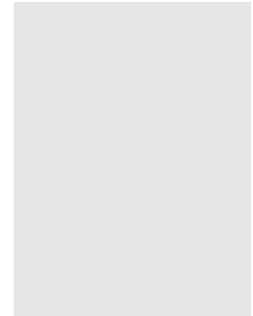
飛形

鉛筆，墨，水彩・紙
25.8×18.9cm



東火

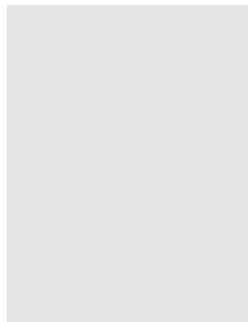
1956年
鉛筆，水彩・紙
27.0×19.3cm



連文Ⅰ

1955年
鉛筆，水彩・紙
25.8×18.9cm

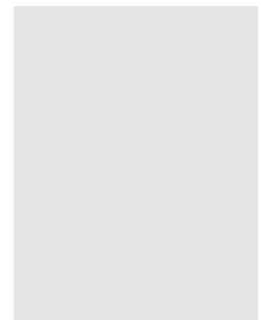
文献：1980年，『坂本繁二郎
全版画集』形象社，p.206



連文Ⅱ

1955年
鉛筆，水彩・紙
25.9×18.9cm

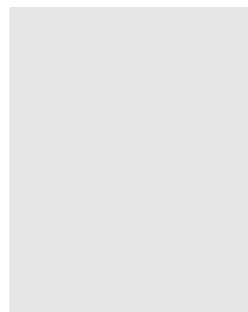
文献：1980年，『坂本繁二郎全
版画集』形象社，p.206



連文Ⅲ

1955年
鉛筆，水彩・紙
25.8×18.9cm

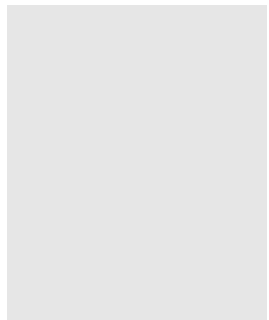
文献：1980年，『坂本繁二郎
全版画集』形象社，p.206



連文Ⅳ

1955年
鉛筆，水彩・紙
27.8×23.0cm

文献：1980年，『坂本繁二郎
全版画集』形象社，p.206



新収図書

ブリヂストン美術館

	購入	寄贈	計
和書	28冊	60冊	88冊
洋書	25冊	17冊	42冊
計	53冊	77冊	130冊

(展覧会図録・逐次刊行物は含まない)

石橋美術館

	購入	寄贈	計
和書	46冊	4冊	50冊
洋書	0冊	0冊	0冊
計	46冊	4冊	50冊

(展覧会図録・逐次刊行物は含まない)

修復記録

ハンス・ホフマン 《Push and Pull II》

1950年

油彩・カンヴァス

122.5×92.1×3.5cm

ブリヂストン美術館

外洋211

作品の状態

木枠は十字の中棧のあるものが使用され、楔は12本揃っている。楔は脱落しないようにステーブルで固定されている。木枠にはギャラリーのラベルやホフマンのエステート印、画布裏面に書き込まれた署名等を写した写真の添付などがある。

画布は裏打ちされており、オリジナルの画布との接着不良によって3×4cm程の範囲に裏打ち布

が浮き上がっている部分がある。

裏打ち布には画題、署名、年記が書き込まれている。木枠に添付された写真に見られる画布の書込と非常に似ているが、形状は微妙に異なる。オリジナルの画布の書込情報が裏打ち布によって見えなくなってしまうため、裏打ち布の上から筆跡を模したものと考えられる。

画面は絵具の塗り重ねや掻き取りによってゴツゴツとしたマチエールを呈している。多くの絵具層には経年による亀裂が生じ、一部には絵具層の剥離及び剥落が生じている。いくつかの損傷した絵具層の一部には補彩または補筆が認められる。また、本作品は購入先からの配送時にも損傷を受けており、開梱した際には絵具層の剥落片が落下していた。

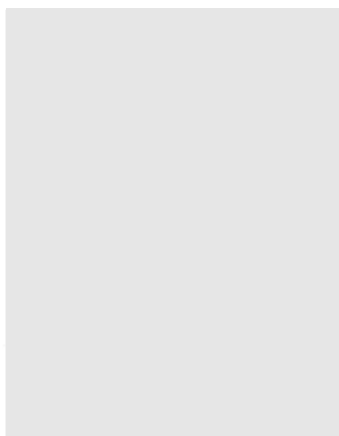


fig.1 処置前 額装全図

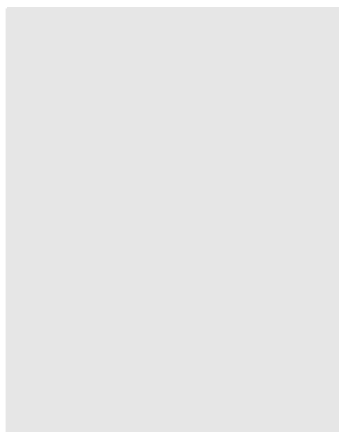


fig.2 処置前 斜光線図

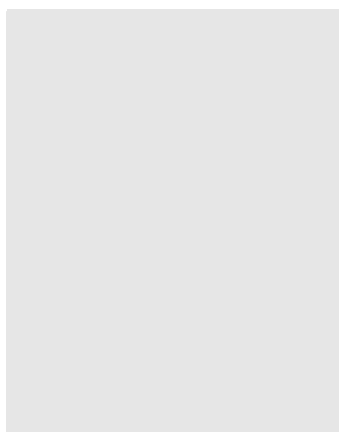


fig.3 処置前 額装裏面図

額は木枠裏面にネジ留めされている。

処置方針

絵具層、地塗層の損傷部分に剥落止めを行った後、美観的な処置を行う。

処置内容

- ・ 作品の状態調査および処置前の状態写真撮影。
- ・ 絵具層の浮き上がり部分を接着剤BEVA D-8で接着した (fig.4, 5, 6, 7)。
- ・ 開梱時に落下していた剥落片は可能な限り元の

部分に戻し、接着剤BEVA D-8で接着した。

・ 絵具層の欠損部分に膠と胡粉から成る塑型材で充填をおこない、欠損部周囲のマチエールに沿うように整形後、水彩絵具で補彩を施した。

・ 作品裏面にアーカイバルボードを用いた裏板を装着した。

・ 処置後の写真撮影および報告書を作成。

(石橋財団美術品保存管理課)

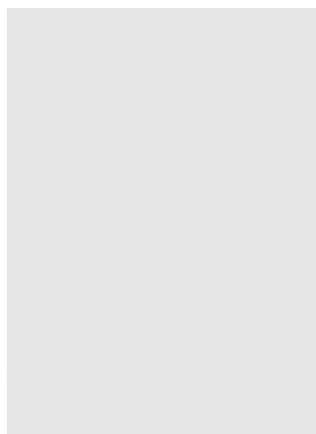


fig.4 絵具層の浮き上がり部分

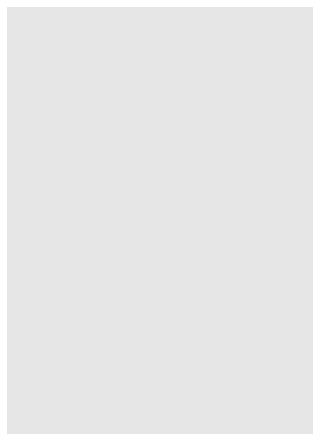


fig.5 同部分接着後

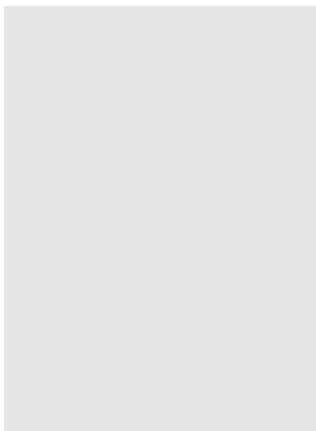


fig.6 絵具層の浮き上がり部分

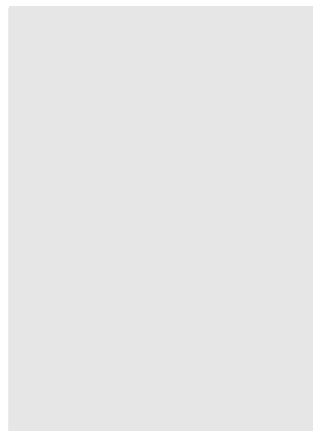


fig.7 同部分接着後

長谷川利行《動物園風景》

1937年頃

油彩・カンヴァス

45.5×52.7cm

石橋美術館

日洋155

作品の状態

木枠は四本の材から成り、中棧は無い。左側の木枠には作者名の書込がある。

画布裏面には部分的に軽くニス染みがある。

画面に向かい右下には画面から押されたような画布の変形があり、その周囲の画布も波打ち状に変形している (fig.1, 2)。

画布の張りや画面の絵具層の状態、額装の状態は良好である。

処置方針

画布の変形を解消し均衡のとれた状態にする。

処置内容

- ・ (作品の状態調査および処置前の状態記録写真は、2004年に調査したものを利用した。)
- ・ 画布裏面より軽く湿り気を与え、アイロンで乾かしながら画布の変形を修正した (fig.3, 4)。
- ・ 処置後の写真撮影および報告書を作成。

(石橋財団美術品保存管理課)

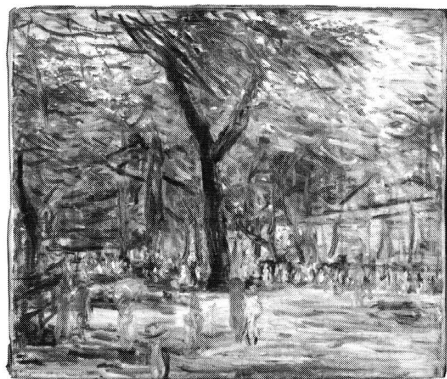


fig.1 処置前 画面全図

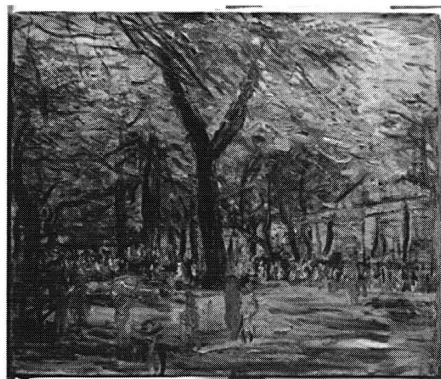


fig.2 処置前 斜光線図

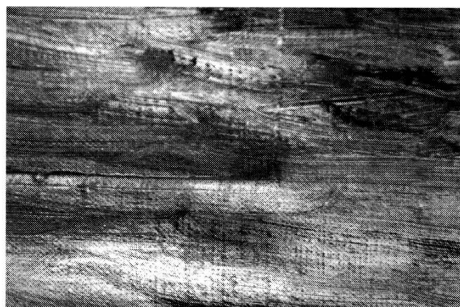


fig.3 画布の変形の様子(部分)

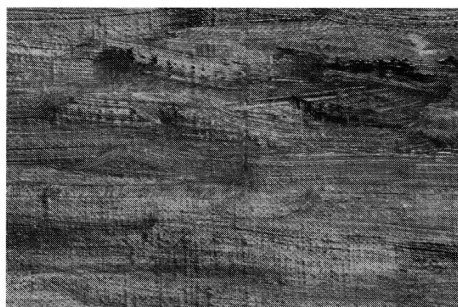


fig.4 画布の変形修正後

田淵安一《孤独の山 Montagne Solitaire》

1956年

油彩・カンヴァス

64.3×114.3×4.6cm

ブリヂストン美術館

日洋525

作品の状態

画面には地塗層からの細かな(大きさ2mm以下)剥落が数カ所ある。剥落を伴う引っ掻き傷が2カ所ある。画面周囲は擦れにより絵具層が摩耗し地塗層または亜麻布が露出している部分がある。

絵具の定着, 画布の張りは良好。

作者によって黒く塗装された木材が額として作品側面に釘で打ち付けられている。この額ごと、新たに仕立てられたと考えられるグレージングが施された額に固定されている (fig.1)。

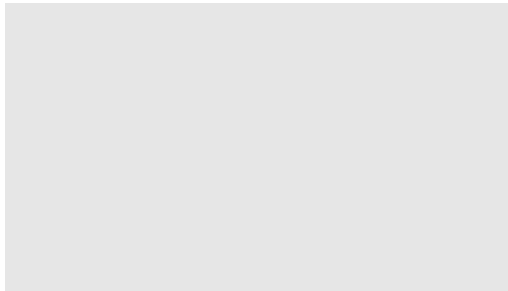


fig.1 処置前 額装全図

処置方針

絵具層, 地塗層の損傷部分に剥落止めを行った後, 美観的な処置を行う。外額は作者に確認したところ外すこととなり, 元額(黒色に塗装された木材)のみでの展示とした。

処置内容

- ・作品の状態調査および処置前の状態写真撮影。
- ・絵具層の欠損部分周辺の浮き上がり部分を接着剤BEVA D-8で接着した (fig.2)。
- ・絵具層の欠損部分に膠と胡粉から成る塑型材で充填をおこない, 欠損部周囲のマチエールに沿うように整形後, 水彩絵具で補彩を施した (fig.3.4)。
- ・後付け部分の額を外し, 作品裏面にアーカイバルボードを用いた裏板を装着し, 吊り金具を装着した。
- ・処置後の写真撮影および報告書を作成。

(石橋財団美術品保存管理課)

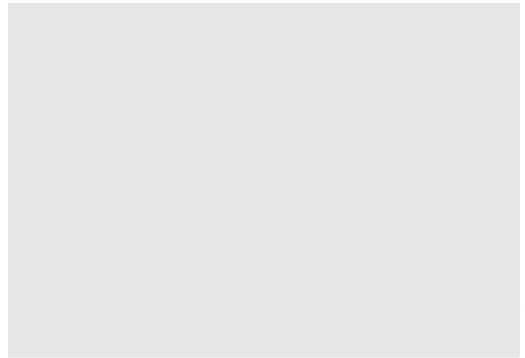


fig.2 絵具層の欠損部分

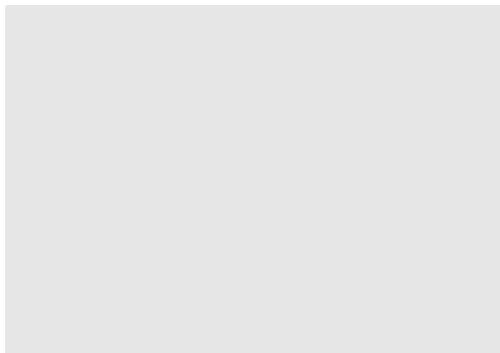


fig.3 同部分の接着及び充填中

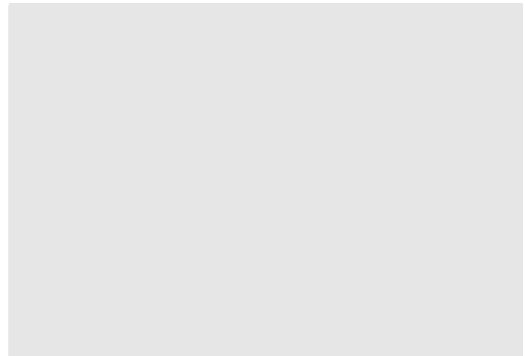


fig.4 同部分補彩後

菅井 汲《OKA》

1961年

油彩・カンヴァス

101.9×83.3×4.6cm

ブリヂストン美術館

日洋526

作品の状態

木枠は十字に組まれた中棧を持つものが使用されている。木枠にはギャラリーのラベル等が貼られている。11本の楔が残っているが、左上の楔は欠損している。楔によって木枠はそれぞれ3mm程拡張されているが、画布の張りは弱くたるみがある。画布には画題、制作年、書名が書き込まれている。

画面全体の埃汚れ等によりくすんだ印象がある。

金のモールディングを作品側面に釘で打ち付け、額としている。

長さ3cm程の吊り金具が装着され、一点吊り用にワイヤーを渡してある (fig.1, 2, 3)。

処置方針

画布のたるみを解消し均衡のとれた状態にする。画面の埃汚れを軽く除去する。

処置内容

- ・作品の状態調査および処置前の状態写真撮影。
- ・欠損した楔を新調した。楔によって画布の張りを調整した。
- ・画面の汚れは消しゴム粉に吸着させながら除去した。
- ・作品裏面にアーカイバルボードを用いた裏板を装着した。旧吊り金具は外し、新たに美術館用吊り金具を装着した。
- ・処置後の写真撮影および報告書を作成。

追記:「雪舟からポロックまで」展での輸送時に上辺中央付近に5mm四方程度の大きさで薄片状に絵具層の浮き上がりが生じていた。修復用接着剤BEVA D-8で接着した。

(石橋財団美術品保存管理課)

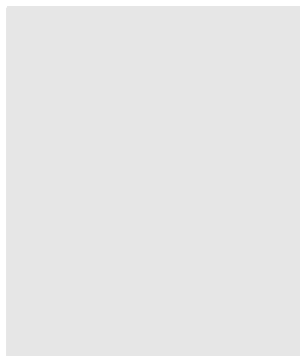


fig.1 処置前 額装全図

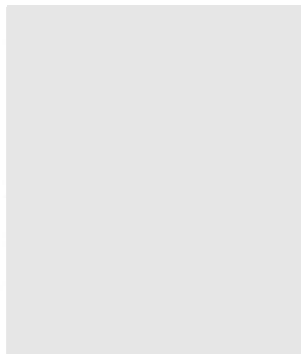


fig.2 処置前 斜光線図

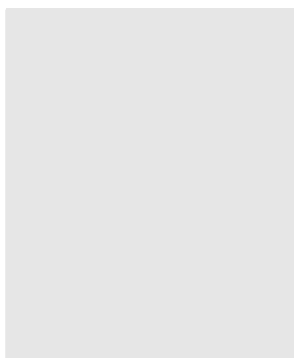


fig.3 処置前 額装裏面図

堂本尚郎《連続の溶解》

1964年

油彩, アクリル・カンヴァス

200.1×151.2×約5.5cm

ブリヂストン美術館

日洋530

作品の状態

木枠はキの字型の中棧のあるものが使用されている。水平方向の中棧2本には、ガムテープが巻かれている部分がある。このうち下方の中棧には垂直方向の中棧への固定を強化するかのようにはステーブルが7本打ち込まれている。しかしながら木枠には変形や危機的な脆弱化は見られない。木枠には第32回ヴェネツィアビエンナーレ(1964年)の出品票やギャラリーのラベルが添付されている。14本の楔が使用されている。

既製の白色地塗りのある画布が使用されており、画布裏面には署名、制作年、画題が記入されている。

画布はやや張りが緩く、作品移動時には絵具の重さで画布が中棧に触れる状態にある。画布裏面には油染みが生じている。

黒色の絵具は筥のようなもので数回塗布され、絵具層は厚い。黒色の絵具層にテント状およびカップ状の剥離および剥落があり、その多くは地塗り層との層間部から生じている。これら損傷部分の一部には作者によると考えられる補筆がある。

画面、裏面ともに埃汚れが見られる。とくに画面には埃汚れが著しく、盛り上がった絵具に埃が堆積している。虫の分泌物様の付着物がある。

額は材木を黒く塗った手製のもので、側面から釘で作品に固定されている。

吊り金具の痕跡(ヒートン穴)がある (fig.1, 2)。

処置方針

絵具層の剥離部分を接着する。画布のたるみを解消し、揺れにくくする。汚損した画面を洗浄し美観的な処置を行う。

処置内容

- ・ 作品の状態調査および処置前の状態写真撮影。
- ・ 絵具層の剥離部分はシリコンシート越しに電気鍍で加温加圧しながら絵具層の変形を修正し接着した。接着剤にはBEVA D-8を使用した (fig.3, 4)。
- ・ 刷毛で表面の埃汚れを清掃した後、水で画面の汚損を除去した。
- ・ 絵具層の欠損部分に膠と胡粉から成る塑型材で充填をおこない、欠損部周囲のマチエールに沿うように整形後、水彩絵具で補彩を施した。
- ・ 作品裏面にアーカイバルボードを用いた裏板を装着し、画布の揺れを軽減した。吊り金具を装着した。
- ・ 処置後の写真撮影および報告書を作成。

(石橋財団美術品保存管理課)

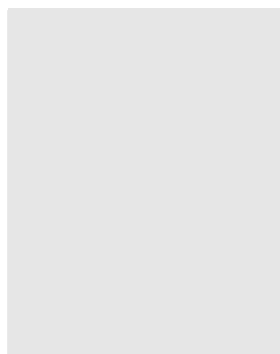


fig.1 処置前 額装全図

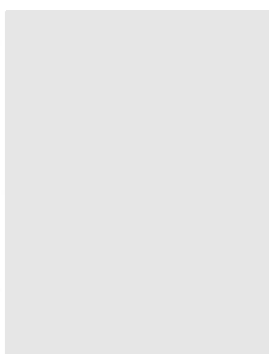


fig.2 処置前 額装裏面図

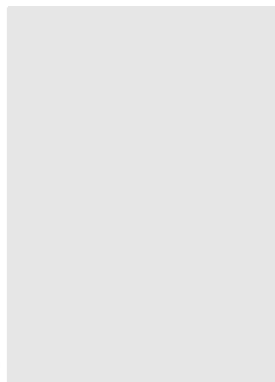


fig.3 絵具層の浮き上がり及び補彩(補筆)の様子

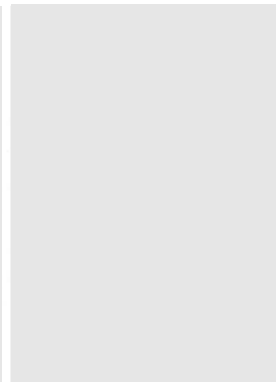


fig.4 同部分浮き上がり接着後

「藤田嗣治」展

東京国立近代美術館 / 2006年3月28日－5月21日

京都国立近代美術館 / 2006年5月30日－7月23日

- 1) 藤田嗣治 《インク壺の静物》(日洋124) 東京国立近代美術館
- 2) 藤田嗣治 《巴里風景》(日洋123) 京都国立近代美術館

「アルベルト・ジャコメッティ」展

神奈川県立近代美術館葉山 / 2006年6月3日－7月30日

- 1) アルベルト・ジャコメッティ 《アトリエ風景》(外洋204)
- 2) アルベルト・ジャコメッティ 《歩く人 / アトリエ風景》(外洋205)
- 3) アルベルト・ジャコメッティ 《アネット》(外洋206)

「森鷗外と美術」展

島根県立石見美術館 / 2006年7月14日－8月28日

- 1) 岡田三郎助 《臥裸婦》(日洋230)
- 2) 原田直次郎 《画帳》(日洋310)

「NHK日曜美術館30年」展

東京藝術大学大学美術館 / 2006年9月9日－10月15日

- 1) 藤島武二 《黒扇》(日洋26)
- 2) 藤島武二 《淡路島遠望》(日洋47)
- 3) 関根正二 《子供》(日洋178)

Picasso and American Art

Whitney Museum of American Art / September 28, 2006－January 28, 2007

- 1) パブロ・ピカソ 《生木と枯木のある風景》(外洋143)

「ルソーの見た夢、ルソーに見る夢」展

世田谷美術館 / 2006年10月7日－12月10日

- 1) アンリ・ルソー 《牧場》(外洋42)

「パウル・クレー」展

宮城県美術館 / 2006年10月17日－12月10日

- 1) パウル・クレー 《冬》(寄託)

「情熱の色―梅原龍三郎」展

佐野美術館 / 2006年11月10日－12月18日

- 1) 梅原龍三郎 《脱衣婦》(日洋200)
2) 梅原龍三郎 《ナポリよりソレントを望む》(日洋271)
3) 梅原龍三郎 《椿》(日洋272)

Georges Rouault

- 1) Museum for Modern and Contemporary Art of Strasbourg / November 10, 2006－March 18, 2007

ジョルジュ・ルオー 《郊外のキリスト》(外洋142)

「NHK日曜美術館30年展」

京都文化博物館 / 2006年12月13日－2007年1月21日

広島県立美術館 / 2007年2月15日－3月25日

- 1) 藤島武二 《チョチャラ》(日洋25)
- 2) 藤島武二 《屋島よりの遠望》(日洋50)

「兵庫教育大学櫻井晨正教授退職記念—晨暉展」

兵庫県立美術館 原田の森ギャラリー / 2006年3月8日－3月12日

- 1) 櫻井晨正 《キャベツ測量報告》(日洋294)
- 2) 櫻井晨正 《Miki測量報告》(日洋295)

「近代日本画の巨匠—横山大観展」

福岡市美術館 / 2006年7月30日－9月3日

- 1) 横山大観 《糺の森 秋雨》(日書22)

「魚のすがた展—みる, 釣る, 喰う, 祈る, 遊ぶ—」

愛媛県美術館 / 2006年10月12日－11月26日

- 1) 古賀春江 《単純な哀話》(日洋162)

「没後五〇〇年記念—雪舟への旅」展

山口県立美術館 / 2006年11月1日－11月30日

- 1) 雪舟 《四季山水図 (春)》(日書1)
- 2) 雪舟 《四季山水図 (夏)》(日書2)
- 3) 雪舟 《四季山水図 (秋)》(日書3)
- 4) 雪舟 《四季山水図 (冬)》(日書4)

「森鷗外と美術」展

和歌山県立近代美術館 / 2006年9月10日－10月22日

静岡県立美術館 / 2006年11月7日－12月17日

- 1) 浅井忠 《樹下の女》(日洋291)
- 2) 原田直次郎 《童女図》(日洋6)
- 3) 原田直次郎 《村の風景》(日洋307)
- 4) 和田英作 《読書》(日洋64)

〈展覧会カタログ〉

「石橋財団50周年記念 雪舟からポロックまで」(特別展)

From Sesshu to Pollock: an exhibition marking the fiftieth anniversary of the Ishibashi Foundation

出品目録

図版(カラー14図)

編集・発行: 石橋財団ブリヂストン美術館(2006年4月)

30.0×21.0cm 8p



「石橋財団50周年記念 雪舟からポロックまで」(特別展)

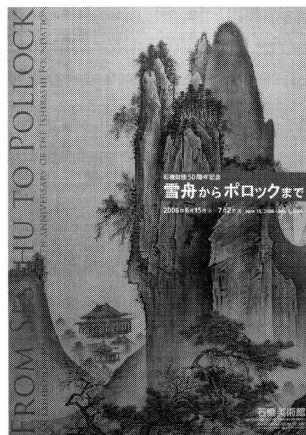
From Sesshu to Pollock: an exhibition marking the fiftieth anniversary of the Ishibashi Foundation

出品目録

図版(カラー14図)

編集・発行: 石橋財団石橋美術館(2006年6月)

30.0×21.0cm 8p



「石橋美術館開館50周年記念 坂本繁二郎展」(特別展)

Sakamoto Hanjiro : Ishibashi Museum of Art fiftieth anniversary celebration

本文:

序にかえて / 富山秀男 (p.10-12)

坂本繁二郎生涯と芸術 / 植野健造 (p.13-19)

東京を、20年で通り抜けた坂本繁二郎 / 貝塚健 (p.182-191)

帰国、そして久留米から八女へ / 田内正宏 (p.192-195)

平凡のなかの非凡—坂本繁二郎のまなざし / 森山秀子 (p.196-199)

坂本繁二郎装本の仕事 / 後藤純子 (p.200-203)

出品目録 [章・作品解説 / 植野健造, 貝塚健, 森山秀子, 田所夏子]

1. 洋画との出会いと模索 1898-1920

2. フランス留学と自己への確信 1921-1924

3. 美しき郷里と馬 1925-1942

4. 深まる芸術—能面と静物 1943-1963

5. 晩年のはなやぎ—一月と馬 1964-1969

資料 [資料解説 / 植野健造, 森山秀子, 後藤純子]

資料編

坂本繁二郎の東京時代の居住地(貝塚健編)

坂本繁二郎の東京時代—美術家、文学者との交流(貝塚健編)

坂本繁二郎滞欧期旅程一覧(尾籠恵子編)

坂本繁二郎旧蔵図書(後藤純子編)

坂本繁二郎年譜(植野健造編)

坂本繁二郎参考文献(後藤純子編)

出品一覧

図版(カラー176図, 作家肖像2図)

執筆: 富山秀男(前プリヂストン美術館館長)田内正宏(石橋美術館顧問)

制作: 昭和堂

発行: 石橋財団石橋美術館, 石橋財団プリヂストン美術館(2006年4月)

28.0×23.0cm 279p ISBN4-901834-03-7C

「石橋美術館開館50周年記念 坂本繁二郎展」(特別展)
Sakamoto Hanjiro : Ishibashi Museum of Art Fiftieth Anniversary
Celebration

出品目録

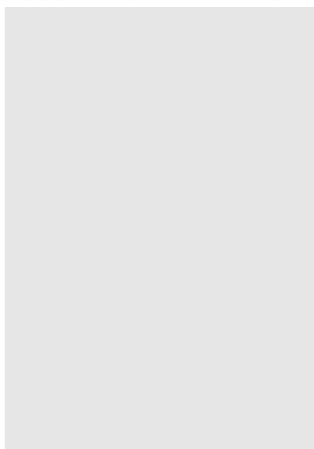
[発行：石橋財団石橋美術館(2006年)]
30.0×21.0cm 四つ折りリーフレット



「石橋美術館開館50周年記念 坂本繁二郎展」(特別展)
Sakamoto Hanjiro: an exhibition marking the fiftieth anniversary of
the Ishibashi Museum of Art

出品目録

図版(モノクロ1図)
編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館(2006年6月)
30.0×21.0cm 8p



「50th Anniversary企画第2弾 サウンド・オブ・ミュージアム」(企画展)

出品目録

編集・発行：石橋財団石橋美術館(2006年6月)
30.0×21.0cm 1枚もの



「なつの常設展示—印象派から21世紀へ」(拡大常設展)

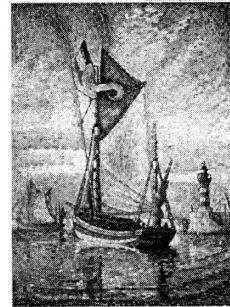
Works from the Collection: from Impressionism to 21st-century art

出品目録

図版(カラー1図)

編集・発行: 石橋財団ブリヂストン美術館(2006年7月)

30.0×21.0cm 8p



なつの常設展示—印象派から21世紀へ

Works from the Collection: From Impressionism to 21st Century Art

2006年7月発行
2006.7.1 - 2006.9.30
ブリヂストン美術館

「プリズム：オーストラリア現代美術展」(特別展)

Prism: contemporary Australian art

本文:

メッセージ—ブリヂストン美術館 オーストラリア現代美術展 / ジョン・ハワード(オーストラリア首相) [英文併記] (p.6-7)

プリズム展に際して / 島田紀夫 (p.13-15)

カタログ [英文併記]

オーストラリア現代アートの一断面—プリズム展をめぐって / 中山朋子 (p.95-100)

プリズム—オーストラリアの現代美術、あるいはアボリジナル・アート革命の後オーストラリア美術に何が起こったか? / クリスティン・ニコールズ (p.101-117)

作家略歴 / フリンダーズ大学フリンダーズ大学美術館 (p.118-125)

On "Prism" / Shimada Norio (p.127-128)

A glimpse of PRIM exhibition / Nakayama Tomoko (p.129-133)

Prism: contemporary art in Australia, or whatever happened to Australian art after the Aboriginal art revolution? / Christine Nicholls (p.134-148)

Biography / Flinders University Art Museum, Flinders University (p.149-155)

主な参考文献

出品作品リスト

図版(カラー91図)

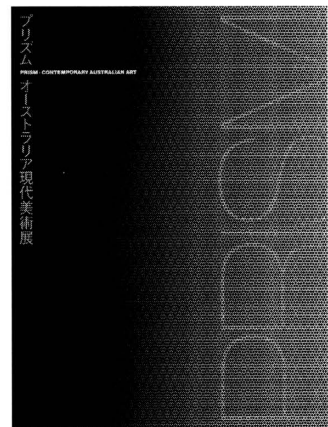
編集: 中村節子

表紙デザイン: 飯田京子

制作: 印象社

発行: 石橋財団ブリヂストン美術館(2006年9月)

29.0×23.0cm 163p ISBN4-901528-06-8



「プリズム：オーストラリア現代美術展」(特別展)

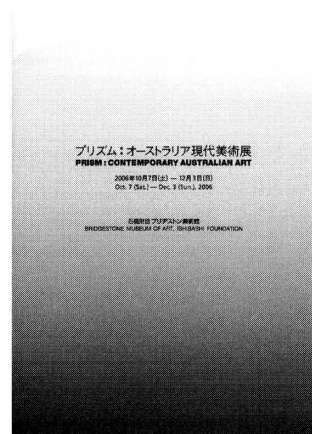
Prism: contemporary Australian art

出品目録

図版(カラー25図)

編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館(2006年10月)

30.0×21.0cm 8p



「50th Anniversary企画第3弾 5×10倍楽しむ石橋美術館」(企画展)

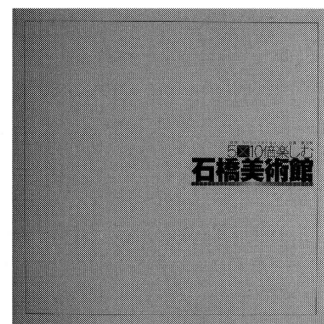
出品目録

図版(カラー6図, モノクロ2図)

編集・執筆：平間理香(石橋美術館)

発行・著作権：石橋財団石橋美術館(2006年10月)

21.0×21.0cm 13p



「国立美術館巡回展 名作と出会う—洋画・日本画・工芸・彫刻」
(特別展)

本文：

「名作と出会う」序章 風土と美術 / 山野英嗣 (p.6-9)

美術における出会い—ひと、画家、作品、そしてコレクション / 植野健造
(p.10-13)

第1章 京都の洋画、久留米の洋画

第2章 近代洋画の名作

第3章 戦後美術の展開

第4章 日本画に見る伝統と革新

第5章 工芸、彫刻

作品解説(山野英嗣、植野健造執筆)

作家解説(山野英嗣、鎌田智子、植野健造執筆)

日本近代美術史略年表(伊藤絵里子編)

出品リスト

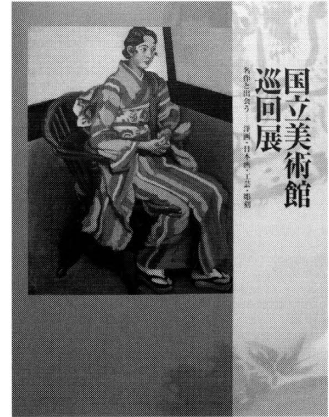
図版(カラー130図)

編集：山野英嗣(京都国立近代美術館) 植野健造(石橋財団石橋美術館)

デザイン：大宝拓雄デザイン事務所

発行：京都国立近代美術館、石橋財団石橋美術館(2006年11月)

30.0×23.0cm 156p



「国立美術館巡回展 名作と出会う
—洋画・日本画・工芸・彫刻 出品目録」(特別展)

出品目録

図版(モノクロ7図)

発行：石橋財団石橋美術館(2006年)

30.0×21.0cm 三つ折りリーフレット



〈その他の刊行物〉

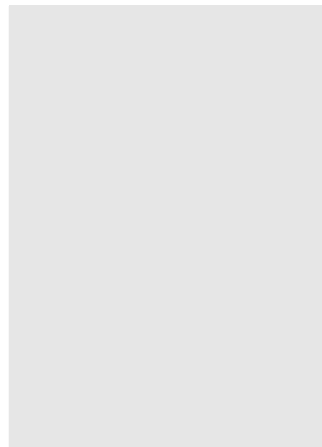
「石橋美術館開館50周年記念 坂本繁二郎展 こどもガイドブック」

図版(カラー14図)

編集: 田所夏子(ブリヂストン美術館), 後藤純子(石橋美術館)

発行: 石橋財団石橋美術館(2006年4月)

21.0×15.0cm 四つ折りリーフレット



「夏休みこどもプログラム2006 よく見て、感じて、表現してみよう」

図版(モノクロ1図)

編集・発行: 石橋財団石橋美術館(2006年7月)

30.0×21.0cm 二つ折りリーフレット



「こどもガイドブック 国立美術館巡回展 名作と出会う
—洋画・日本画・工芸・彫刻—

図版(カラー8図, 作家肖像8図)

編集・発行: 石橋財団石橋美術館(2006年11月)

21.0×15.0cm 三つ折りリーフレット



「石橋美術館50年史 1956-2005」

50 years of the Ishibashi Museum of Art, 1956-2005

本文(部分的に英文併記)：

石橋美術館の活動50年の軌跡 / (p.7-9)

Fifty years of activities at the Ishibashi Art Gallery (p.10-12)

石橋文化センター開園・石橋美術館開館

石橋正二郎の挨拶 (p.15)

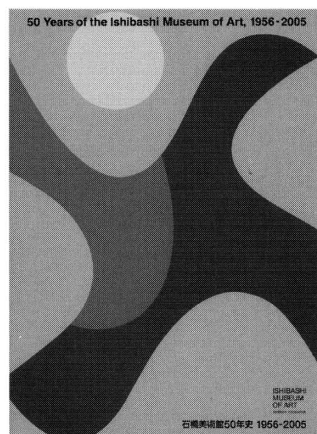
Address by Ishibashi Shojiro (p.15)

石橋美術館の概要 (p.16)

Overview of the Ishibashi Art Gallery (p.16)

開館記念展覧会 出品作品リスト (p.17-24)

Opening exhibition—list of exhibits (p.17-24)



石橋美術館別館開館

石橋幹一郎の挨拶 (p.27)

Address by Ishibashi Kan'ichiro (p.27)

別館開館記念展覧会 出品作品リスト (p.28-32)

Opening exhibition—list of exhibits (p.28-32)

石橋美術館50年の記録

展覧会一覧 (List of exhibitions)

I. 年次記録 (Chronology)

II. 教育普及 (Education)

美術講座一覧

美術講座以外の活動

III. 保存修復 (Conservation)

修復の記録

IV. 刊行物 (Publications)

刊行物一覧

館報収載研究報告一覧 (Research reports in the Annual Report)

文化センター・美術館平面図, 所蔵文献資料, 美術館運営委員, 美術館幹部

職員, 開館日数と入館者数, 入館料の推移, 1階展示室利用状況, 青木繁記

念大賞公募展, 西日本洋画新人秀作展

編集: 石橋財団石橋美術館

監修: 平野 実

責任編集: 田内正宏

編集: 石井 亨, 植野健造, 後藤純子, 平間理香, 森山秀子

表紙デザイン: 與語秀樹

制作: 瞬報社写真印刷

デザイン: 大宝拓雄デザイン事務所

発行: 石橋財団石橋美術館 (2006年4月)

26.0×19.0cm 190p ISBN4-901834-02-9

「館報」54号(2005年度)

Annual report of Bridgestone Museum of Art & Ishibashi Museum of Art

内容:

設立趣旨, 機構・運営

展覧会(特別展, 特集展示, コーナー展示, テーマ展示, 拡大常設展)

教育普及(講座, ファミリー・プログラム, 夏休みこどもプログラム, ギャラリートーク, 館外活動, 実習生受入, 学校における美術館の利用など)

入場者数(2005年度)

新収蔵作品(作品19点)

新収図書

修復記録

マルク・シャガール《ヴァンスの新月》/ 坂本雅美 (p.72-73)

ピエール・スーラージュ《絵画, 26 May 1969》/ 石井 亨 (p.73-74)

和田英作《チューリップ》/ 石井 亨 (p.75)

青木繁《天平時代》/ 石井 亨 (p.76)

青木繁《秋》/ 石井 亨 (p.77)

安井曾太郎《薔薇》/ 石井 亨 (p.78-79)

安井曾太郎《玉蟲先生像》/ 坂井史恵 (p.80-81)

安井曾太郎《桜》/ 坂井史恵 (p.82-83)

関根正二《子供》/ 石井 亨 (p.83-84)

安井曾太郎《安倍能成君像》/ 坂井史恵 (p.85-86)

満谷国四郎《瀬戸内海風景》/ 石井 亨 (p.86-87)

海老原喜之助《青年像》/ 坂井史恵 (p.88-89)

坂本繁二郎《牛》/ 坂井史恵 (p.90)

岡田三郎助《富士山》/ 石井 亨 (p.91)

古賀春江《柳川風景》/ 坂本雅美 (p.92-94)

坂本繁二郎《町裏》/ 石井 亨 (p.94-95)

坂本繁二郎《新聞》/ 坂井史恵 (p.96)

坂本繁二郎《婦人像》/ 石井 亨 (p.97)

モーリス・ドニ《慈愛》ほか版画作品33点 (p.98-106)

《古今和歌集巻第一断簡 高野切》/ 光影堂 虻川真人 (p.107-114)

作品貸出記録

刊行物一覧

研究報告

松田諦晶と古賀春江—松田資料をもとに / 森山秀子 (p.125-132)

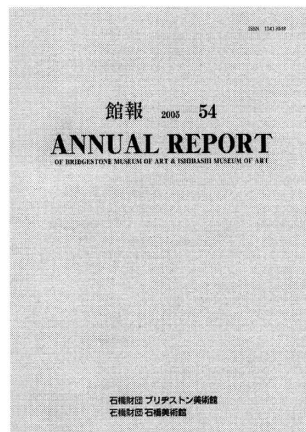
美術館案内

石橋財団職員

編集・発行: 石橋財団ブリヂストン美術館, 石橋財団石橋美術館(2006年12月)

印刷: 昭和堂

26×18.5cm 134p ISSN1341-8548



日本におけるピカソの受容と歴史的回顧—影響, 批評, 収集の軌跡

塚田美香子

はじめに

20世紀芸術を代表する巨匠、パブロ・ルイス・ピカソ(1881-1973)は絵画のみならず、彫刻や版画、陶器、舞台装置や衣装デザイン、詩作までも手がけ、様々な表現手段を駆使して表現の新たな地平を開いた現代美術のバイオニアである。それら無数の作品は、造形革命の旗手《アヴィニョンの娘たち》や反戦平和の記念碑《ゲルニカ》に象徴されるように、ヒューマニスト、あるいはレアリストとして現実を直視して20世紀という時代を表現するだけでなく、予言もしていたのである。

20世紀初頭の日本人は、まだその芸術を正確に理解し得ない状態でピカソに接触したが、彼らのなかには、ピカソを深く理解し、その作品を咀嚼した画家や研究家、コレクターもいた。当館には、彼らの手で集められた日本と関わり深いピカソの名品が多く収蔵されている。《腕を組んですわるサルタンバンク》は1925年、神原泰の著書で図版が紹介され、《女の顔》は同じ年に福島繁太郎によって早くも入手されていた。また《道化師》は、1930年に海老原喜之助によって日本に初めて紹介されたピカソの彫刻作品であったのである。

日本におけるピカソ受容はどのような道をたどって今日に至ったのであろうか。その受容や作品の収集に特徴や傾向がもしあるとすれば、それが日本の近代絵画史の形成と関連づけられるのではなかろうか。ピカソといえは、その名がもっともよく知られた西洋画家のひとりだが、その理由を受容史に見出せるであろうか。これらの問題提起のもとに本論では、i) ピカソ受容の初期 ii) 美術関係者のピカソ観 iii) 日本人画家へのピカソの影響 iv) 日本人が所有するピカソ作品、などを調査し考察する。その時期を、彼がフランスを拠点に本格的に活躍し始めた1900年代の初めから第二次世界大戦までを第一次受容とし、世界大戦後から晩年までを第二次受容と区別し、ここでは紙幅の都合上、第一次受容のうち1930年までに留めることをお断りしておきたい。

日本におけるピカソの第一次受容

I. 1900年代—ピカソとの出会い

1900年は20世紀という新時代の開幕にふさわしく、フランスではパリ万国博覧会が盛大に催され、パリは世界中から集まった多くの芸術家や文学者、哲学者、ジャーナリストで賑わっていた。黒田清輝が帰国後に結成した白馬会で学んだ画家たちや、夏目漱石もイギリス留学に先立ち、この時期にパリを訪れていた。

1. 1900年パリ万国博覧会

パリ万国博覧会(1900年4月15日—11月5日)のグラン・パレ会場では3部構成による美術展覧会が開催され、そのうちの第3部、諸外国の美術の十年展には、世界各国が誇る画家たちの作品が一同に集められていた。日本から黒田清輝、久米桂一郎、竹内栖鳳らの作品が出品され、スペインからはパブロ・ピカソの作品が選ばれていた¹⁾。この展覧会に出品されたピカソの作品は、当時バルセロナで流行した世紀末芸術、特に北欧のムンクなどの影響を受けたと推定される《臨終》²⁾である。

久米桂一郎は臨時博覧会鑑査官に命じられ、この博覧会を見学し、『美術新報』に「千九百年巴里大博覧會に於ける列國の藝術」(1903年)³⁾と題してこの時の美術事情を連載した。久米はスペイン絵画では、19世紀末から20世紀初めにかけてのスペイン外光派を代表する画家ホアキン・ソローリャ・イ・バステイーダ(Joaquín Sorolla y Bastida, 1863-1923)や、ピカソの父ホセ・ルイス・プラスコの知人で画家のモレーノ・カルボネーロ(Moreno Carbonero, 1858-1942)などを取り上げているが、ピカソには特に触れていない。

2. 貞奴の舞台

ピカソは1900年10月、友人のカサジェマスと共にパリを訪問し、万国博覧会や美術館、画廊に足繁く通つたらしい。日本人画家たちも万国博覧会を見学しているが、彼らにピカソの作品がどう印象づけられたかは不詳である。しかし、このとき彼らの他

にピカソと関わりがあった一人の日本人女性がいる。日本初の女優といわれ、夫の川上音二郎の率いる川上一座のメンバーとして万国博覧会で公演するためパリを訪れていた貞奴である。当時、貞奴はそのエキゾチックな日本舞踊と美貌で評判になり、「マダム貞奴」の名で空前の人気を得ており、劇場主のロイ・フラーが批評家ギュスターヴ・コキオを介して、ピカソに貞奴のポスターを依頼したという⁴⁾。

ピカソが貞奴を描いたデッサンのうち《踊る貞奴》(La danseuse Sada Yacco, 1900-1901, Pieter C.W.M. Dreesman Collection, London, Z.I:44)は、川上一座の公演『芸者と武士』で貞奴が演じる狼籍の場面を描いている。その素描は、小説家アンドレ・ジイドが貞奴の舞台を見て書いた文章、「彼女の狼籍が惹き起こした混乱の中に、蒼白な、着物をはだけ、髪を振りみだした彼女が眼を釣りあげて再び現はれた」⁵⁾に重なる。貞奴も音二郎もピカソのこの素描については何も語っていないが⁶⁾、現在そのコピーが、貞奴に縁のある名古屋市の文化のみち二葉館(旧川上貞奴邸)と岐阜の貞奴が建立した成田山貞照寺に、関連遺品と一緒に展示されている。

II. 1910年代—ピカソとキュビズムの紹介

前述のように日本とピカソの関係は、少なくとも1900年から始まっているが、ピカソ紹介と彼の作品が日本美術界へ浸透してくるのは、その数年後になってからである。斉藤与里は1906～08年にかけてフランス留学中に、「スタイン氏の家」でピカソの作品を見たという。当時の与里の行動から推測すると、見たのはおそらく1907～08年にかけての冬である。これについては「2. 日本人画家のピカソ解釈」で後述する。

1. ピカソの公式紹介—新聞、文芸誌、展覧会

活字のかたちで日本で初めてピカソのことが紹介されたのは1911年になってからである。この年、ピカソとブラックが創始したキュビズムがパリのサロン・デ・ザンデパンダン(4月21日—6月13日)で公式な美術運動として認められた。さらに同年秋のサロン・ドートンヌ(10月1日—11月8日)で話題になり、ニューヨーク、マドリッド、アムステルダム、そして日本にも『読売新聞』(1911年11月18日)⁷⁾でそのニュースが報じられて、キュビズムが世界中を席卷していった。しかし、キュビズムの創始者で

あるピカソがいずれの展覧会にも出品していなかったため、展覧会を見た石井柏亭⁸⁾や、4月のサロン・デ・ザンデパンダンを見た町田曲江⁹⁾の記事にはピカソの名は出ていない。

1911年にピカソの名前が公表されるようになると、文芸誌の『美術新報』をはじめ、『早稲田文学』や『白樺』等にピカソに触れる文章や図版が次々に紹介されていく。『美術新報』は近代以降のヨーロッパ美術を系統的に紹介した木下杢太郎の「洋畫に於ける非自然主義的傾向」(1913年)¹⁰⁾や森田亀之輔の「泰西畫界新運動の經過及びキュビズム」(1915年)¹¹⁾を掲載した。木下は、石井柏亭とロジェー・アラール(Roger Allard)の論考を交えて立体派を考察し、創始者はドラン、ブラック、ピカソ、ル・フォーコニエ等であると紹介している¹²⁾。一方、森田は、キュビズムを詳細に論じ、結びにはカンディンスキーの絵画理論を紹介するための例としてピカソの《マンドリンを持てる女》(1910年、ニューヨーク近代美術館, Z.IIa:235)を引き合いに出している¹³⁾。彼らの小論には、《マンドリンを持ってピアノに依れる女》(1911年, Národní Galerie Prague, Z.IIa:237)¹⁴⁾や《ギタアルを弾く人》(1911年, Gianni Mattioli Collection, Milan, Z.IIa:292)、既述の《マンドリンを持てる女》、《或る詩人》(1912年, パーゼル市立美術館, Z.IIa:313)¹⁵⁾といったピカソの分析的キュビズムの作品が挿図に紹介されている。

武者小路実篤らが1910年に創刊した同人誌『白樺』は、展覧会も主催してヨーロッパ美術を積極的に紹介した。1913年4月の第六回美術展覧会(4月11日—20日、東京議員クラブ)¹⁶⁾に、ロダン彫刻の他、白樺派が関心を寄せたセザンヌやゴッホ、ゴーガン、マティス、ピカソ¹⁷⁾などの複製や版画を出品した。実篤は当初「キュビストや、未来派はまだ自分達にはしつくりは来ない」¹⁸⁾と述べていたが、同展覧会にはキュビストのアンドレ・ロート(1885-1962)とジャン・メッツァンジェ(1883-1956)の作品が出品され、観客の間でなにかと話題になったようだ¹⁹⁾。

白樺派と交流のあった木村莊八は、ピカソを含む印象派以降の画家たちに強く魅せられ²⁰⁾、絵画を学びながら西洋美術書の翻訳や評論などの執筆²¹⁾もしていた。著書の『未来派及び立体派の藝術』(1915年)²²⁾には、未来派と立体派の論考の他に対話形式でそれらを説明する箇所がある。青年B(莊八も含める)²³⁾は「以前にはピカソー氏の畫を極端なわけの分らぬ物と思つてゐました。然しそれは自分に繪畫藝術なる先入主があり、形や色に對する固定的概念があつたからです。つまりあの繪に一定

の所謂形がないから解らなかつたのです。氏の昔の繪が解つて今の繪の解らないのは、氏が固形的形體を實在に觀取する境地から立體派の所謂形體を觀取する現在に推移したその行程に理解がなかつたからです。元より現在と雖も理想的には解つてゐますまい。があれが徒らに不思議なものでない事は肯定します。且氏が彼所まで突き進んでゐる點も解る氣がします。もつと自分が立體派に親しんだら、あの繪は非常に懐かしい物になるかも知れません。」²⁴⁾とピカソを再考した。青年Bが参照する「あの繪」とは挿図とされたピカソの《ギターを弾く人》(1911年, Z.IIa:292)を指している。こうして振り返れば、日本におけるピカソの受容は難解な分析的キュビズムの時代に始まっており、その意味でもピカソ芸術への戸惑いは十分に理解できよう。

2. 日本人画家のピカソ解釈

ここで、当時パリ滞在中の日本人画家と、渡仏せずに日本に留まりヨーロッパ美術の新傾向を研究した画家たちのピカソ解釈や、彼らの制作への影響を考察してみたい。

2.1 パリ留学一齊藤与里、石井柏亭、梅原龍三郎、藤田嗣治、正宗得三郎

1900年代の初めに留学した高村光太郎(1908~09年留学)は、当時のパリ美術界の様子を次のように回想している。「キュービズムの繪はポツポツと現れていたが、この派の畫家たちの作品は、畫商の店には出ず、普通の家にいきなり看板をかけて、ドアを開けて入つてゆくと、その派の繪がならんでゐるという状態であつた。(中略)ブラックとかピカソなどでも、畫商の店に出るところまではいつていなかった。」²⁵⁾

高村の回想の2年前の1906年にパリに渡った齊藤与里は、1907~08年にかけての冬に、ガートルード・スタインとその兄の家²⁶⁾でピカソの作品を実際に見ている。与里は初めて目にしたピカソの3枚の繪について、「一枚は猿を連れた旅藝人が春の田舎の唯ある路傍で玉乗を演つてゐる繪でした。十三四位の娘の子が薄桃色のシャツを着て、玉の上で危く重心を保ちながら踊つて居る、勞れた旅藝人の悲みと春の光！ 一枚は、夜、女が、窓に寄り掛つて居る處を乳房の邊迄描いたもので、何處を見ると云ふ當てもなくポカッと開けて居る目元に少なからず憂愁の想がありました。もう一枚は裸體の男が

土の高くなつた處に、何となく腰掛けて居る稍大作でした。」と述べている。

当初、与里はマティスの繪を見るのが目的だったが、「私の腦裡にはマティスの繪と殆ど同當の力で深く刻み込まれた」²⁷⁾とピカソの作品に感銘した。彼が見たうちの1枚は、ピカソのバラ色の時代の作品で、《玉乗りをする少女》(1905年, プーシキン美術館, Z.I:290)と思われる。ガートルードとレオの収集作品が写された写真(1907年頃) (fig.1)に、この作品がピカソの《馬を引く少年》(1906年, ニューヨーク近代美術館, Z.I:264)や《酒場の二人の女》(1902年, ひろしま美術館, Z.I:132)とともに見出せるからだ²⁸⁾。

与里はスタイン家訪問から5、6年後に、ロジャー・フライがロンドンで企画した第二回ポスト印象派展のカタログを見て、ピカソの画風が急激に変化したことに関心を示す。彼はスタイン家で見たとピカソの一連の作品と、キュビズムの近作とを比較し、「彼は智識を以て繪を作る事に失敗した」という。また挿図の《静物》(1908年, エルミタージュ美術館, Z.IIa:89)を「本號に挿入した静物は何時頃の物か知らないが、私は誠に簡単な馬鹿げた様な此の静物を、此の静物よりも遙かに入念の作と思はれる『男の顔』(1912年, パリ市立近代美術館, Z.IIa:314)よりも好くのである。其處にはピカソ—其の人が少しも飾られないで、實に無造作に抛げ出されてゐる。」²⁹⁾とピカソの一面を述べている。

石井柏亭は、1911年4月のパリのサロン・デ・ザンデパンダンと同年10月のサロン・ドートヌヌ、次いで1912年ベルリンのゼツェッション展などを見学し、印象派以後のフォーヴィズムやキュビズムなどのヨーロッパ美術の新傾向について「フォーヴィズムとアンチ、ナチュラリズム」³⁰⁾と題して論述



fig.1
1907年頃のレオとガートルード・スタイン兄妹のコレクション

The Baltimore Museum of Art:
Dr. Claribel Cone and Miss Etta Cone Papers,
The Baltimore Museum of Art

した。柏亭は文頭で、昨年のキュビズムには驚かされたが、何度も新聞に紹介されて世間の話題になり、新人の個展を見るうちに、驚かなくなった³¹⁾と述べている。

柏亭はベルリンのゼツェッション展に出ていたピカソの作品を、「ピカソの一枚に『ボン・ヌーフ』(1911年, Philippe Nordmann Collection, Genève, Z.IIa:248)と題した風景(?)があつた。巴里のボン・ヌーフかも知れないが、そんな如實の自然は全く蔑視せられて、たゞ橋のアーチの孤線幾つ、兩岸堤防の直線煙突等のモチーフが極めて非自然的に散布されたに過ぎない、其上カンゲンスキーの多色とは違つて、彼れの色は故らに貧しく鈍んで居る。私はたゞ好奇心の満足を得たと云ふ丈で、決して彼れの非自然主義に同感することが出来なかつた。」³²⁾と批評した。

与里や柏亭は、印象派以降のヨーロッパ美術の新傾向を紹介し、フュウザン会や二科会といった新しい美術団体を設立して、日本美術界に新時代の扉を開いたが、当時のピカソの作風の豹変ぶりやキュビズム的手法については、戸惑いや拒否反応を隠さずにはいられなかった。

梅原龍三郎(1908～13年留学)が、ピカソを知り得たのは1911年³³⁾のことで、おそらく日本人画家たちのなかでは彼が最初の画家だろう。梅原はピカソと出会った頃を「フランス人の友達がつれて行ってくれたのだがブルヴァール・ピギャールの大きなアトリエにフェルナンドという女と住んでいた。」「もう立体派をやっている、いつも五六人の取巻きがついていた。シルク・メドラノがピカソの家の直ぐそばだったので毎晩の様に行っていたらしい。」と回想し、梅原もピカソと一緒に2、3回シルク(サーカス)を見に行つたことがあるそうだ³⁴⁾。

若き梅原はキュビズムの考察を、有島生馬(壬生馬)に「キュビストの方はまだ中々盛んで、今年のアンデパンダンを賑わして居る。段々穩かになつて進行して行く様だ。然し数年の後にはきつと所謂キュビストなるものは姿を消さう。然しキュビズムといふものは現に今日多くのよい美術家に明かに影響を與へた。自分の意見ではアンスタンクチーブなキュビズムならば美しい畫をなす一つの要素だと思ふて居る。セザンヌの望の中にどれ位美しいキュビズムが潜んで居るか、探して見るがい。然しキュビズムの不幸と禍は餘り一時に多くの野次馬を得た事であつた。」³⁵⁾と伝えた。

藤田嗣治はピカソと知り合つたことを1914年2月10日付の妻とみ宛の書簡に、「こゝで一番の新派の

画家ピカソ氏も訪問」³⁶⁾と知らせている。藤田は1929年に帰国し、出身校の東京美術学校で、「ピカソは其時分未来派、立體派を描いて居りまして、ヴィオリンとかギターを鋸で切つてそれを壁に貼付けて、實際に實物を壊して研究して居る時代でありました、それから横に大きな部屋があつて、其處に黒ん坊のコレクションを澤山持つて居つてそれを作品に應用して居りました。」³⁷⁾と講演した。

藤田がピカソのアトリエを訪れた時期は、ピカソとブラックが分析的キュビズムから総合的キュビズムへ移行し、パピエ・コレやコラージュを用いて、分析的キュビズムで解体された現実世界を再び画面の中に取り戻そうとしていた頃である。当時のピカソはアトリエや自分の作品を盛んに撮影していて、藤田がいうような写真も残っている。藤田自身もパリのキュビズム全盛期のなかで、キュビズム風の水彩画《トランプ占いの女》(1914年、徳島県立近代美術館)や油彩画の《キュビズム風静物画》(1914年、個人蔵)などを描いている。

藤田と同年にパリを訪れた正宗得三郎は、7月にラフィット街にある画商クロヴィス・サゴの店を訪問した。正宗はサゴの店で立体派や未来派の作品に触れ、立体派はおよその意味が想像つくと思へ、またピカソの素描も見て、「ピカソは確かなものを持つてゐる人」と確信した³⁸⁾。そのことが書かれた著書『画家と巴里』(1917年)には《マンドリンの女》(1909年、エルミタージュ美術館, Z.IIa:133)と髪を梳く女のデッサン(1906年)の図版が載っている。正宗は文芸誌『文章世界』(1916年)でも、ピカソら立体派の源にはセザンヌの水浴図があると指摘し、ピカソの総合的キュビズムを「ピカソの畫の或物には新聞を添附し、カンナ屑を添附してゐるのがある。それなどは、直接行動的印象である。又彼のバイオリンは、幾個にも割かれて、畫面は物と物との重なり合つた交叉よりも大氣に廣がる音律をなしてゐる。視覚計りを描くのが必ず繪畫であると云ふ理由もないのである。併し吾々が視覚より再現の藝術を要求し、それより離るゝ事が出来なければ、何持迄もこの非再現的藝術は信ずる事は出来ない。」³⁹⁾と時代に先駆けた批評をした。

2.2 未渡欧の画家—東郷青児、萬鉄五郎、村山槐多

東郷青児はドイツから帰国した作曲家の山田耕柞からヨーロッパの新芸術や動向を教えられ、キュビズムや未来派を取り入れて、《コントラバスを弾く》(1915年、損保ジャパン東郷青児美術館)や、《パラソルさせる女》(1916年、個人蔵)を制作した。

1915年9月に日比谷美術館で開催された東郷青児個人展覧会は「我が邦最初のキュビスト」として注目された。だがその展評には、東郷の《コントラバスを弾く》とキュビストのアルベール・グレーズ(1881-1953)の《バルコニーの男》(1912年、フィラデルフィア美術館)とを比較し、画面上の線や面が無意味なまでに緊張を欠き、「不徹底」と批判された⁴⁰⁾。その後東郷は、1921年に渡仏してピカソや未来派のマリネッティらに会うことになる。

萬鉄五郎はパリへは渡らず、故郷の土沢でキュビズムや未来派を研究した。彼の1912~15年のスケッチブック(岩手県立美術館)にある草稿には、ピカソの名前や、キュビストたちが影響を受けた哲学者アンリ=ルイ・ベルクソンの名が書かれている⁴¹⁾。萬は土着的性格の濃いキュビズムの《もたれて立つ人》(1917年、東京国立近代美術館)(fig.2)を発表し、他にも故郷をキュビズムの造型思考によって描いた風景や、ピカソのアフリカ・オセアニア彫刻の影響を受けた時代の作品を思わせるような自画像シリーズなどを制作した⁴²⁾。

村山槐多は、パリ滞在中の従兄の山本鼎などからヨーロッパの前衛美術を知り、1913年の中学5年のときに、すでに立体派や未来派風の水彩画を描いて、校内で展覧会を開いている⁴³⁾。また、槐多は神社の絵馬堂を美術の展示場にするという斬新な考えを発表し、「(中略)吾は我が好む夫の北野や祇園などの神社の絵馬堂で日本画に限らず版画や油絵や水画やブロンズの裸像をも見ることの出来る日、柏手の物寂びた音と共に未だ裏若い声がマチスやピカソを語り合う声の朱の玉垣を洩れて聞ゆる美しい、そして楽しい敬神の日の、この古き都に來らんことを切に待つ。」⁴⁴⁾とピカソの名を上げている。

1915年1月12日の日記に、「1915年は実にオレにとつて楽しみだ。この年こそは真にオレと云ふ物

の存在が有意味になり得る時だ、(中略)オレはゴヤであらねばならぬー ピカソであらねばならぬー スパニエールの血と心とよ！」と記して自らを奮起させた。同年に、「未来のわが製作をして…」と「モデル女に」の2点の詩⁴⁵⁾を詩作し、その中でピカソを賞賛している。決意した槐多は、10月の第二回院展洋画部に《カンナと少女》(1915年、水彩画)を出品して院賞を受賞した。

1910年代の日本美術界は、黒田清輝を中心とする白馬会系の外光描写や、鹿子木孟郎などの太平洋画会系の写実主義から、ヨーロッパの新しい美術の動きに目が向けられる時代であった⁴⁶⁾。そうしたなか、ピカソはキュビズムの始祖として日本に紹介され、新進の前衛画家として注目されたが、ピカソを受け入れる者や拒む者など、その反応は様々であった。

Ⅲ. 1920年代—ピカソの本格的受容の始まり

1910年代から続くヨーロッパ美術の新傾向の紹介と、渡欧した作家たちが伝える情報によって、日本美術界でピカソの受容が顕著になっていくのは1920年代である。この時期、海外の画商の協力や日本人コレクターによって、ようやくピカソを含めた西洋美術のオリジナル作品が輸入され、国内で本格的に西洋絵画の展覧会が開催されるようになる。この事実はピカソ受容の問題に限らず、銘記されてよい。

1. ピカソ作品の初展示

1921年の大原孫三郎蒐集現代仏蘭西名画展(倉敷)や、1922年の松方幸次郎氏所蔵泰西名画展(大阪)など、日本の二大コレクターの買い上げた作品が一般公開され、ピカソの作品は国内の次の主な展覧会に出品された。

1923年4月、フランス人画商のエルマン・デルスニスが企画した第二回仏蘭西現代美術展(会期未詳、上野公園竹之台陳列館)⁴⁷⁾に、ピカソの総合的キュビズムの作品《新聞紙》(1914年、個人蔵、Z.IIb:531)が出品された。さらに三越呉服店の依頼でデルスニス氏が翌年2月に開催したフランス現代水彩画・素描・版画展(2月13日-24日、三越呉服店東館5階)には、ピカソの版画《貧しき食事》(1904年)を含む《サルタンバンク・シリーズ》⁴⁸⁾が展示された。当

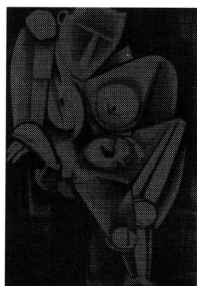


fig.2
萬鉄五郎《もたれて立つ人》
1917年 東京国立近代美術館

時の展評でピカソは新進作家として紹介されている⁴⁹⁾。

デルスニス企画の仏展と同年秋に開催された第十回二科展⁵⁰⁾は、二科会設立10周年を記念し、フランスのサロン・ドートンヌとの交換展を企画する展覧会であった。石井柏亭らの尽力により、マティス、ピカソ、ブラックらヨーロッパの現代作家8人の作品、計32点が特別陳列された。ピカソの作品はローザンペール画廊から《女の顔》(1922年、Z.IV:390)と《静物》(1919年、Neue Nationalgalerie, Berlin, Z.III:165)の2点が出品された。

柏亭はこの10周年記念展準備のために1922年11月に再び渡欧し、パリの画廊を歩き回った⁵¹⁾。彼は1923年1月8日にベルネーム・ジュンヌ画廊でピカソの近作を見て、「ピカソは古典的な半裸像と色と形との幾何的組合せに於ける静物とによつて其兩面を代表されて居る。其古典的な方は希臘の小彫刻にあるやうな線と形とをもつて居る。幾何的な静物の方は彼れの此種のものを始めて見たのでまだ鑑賞するに慣れない。併し其の顔料の付き方はペンキのやうであり、色の平たい塗抹の上へ引かれた黒線のシェエドもあまり美しくは思はれなかった。」⁵²⁾と述べている。彼は29日にポール・ローザンペールの画廊を訪れ、さらに2月21日に兄のレオンスの画廊にも行き、ピカソ、ブラック、メッツァンジェなどの常設作品を見て、「矢張面白味のあるのはピカソとブラックの二人で、(中略)つまり種々理論は列べても結局は素質が肝腎なので、素質の面白い人のはどんな形式を取つても矢張面白いと云ふことになる。」⁵³⁾とピカソの力量を認めているが、当時ピカソが新古典主義と同時に制作していた幾何学的なキュビズム作品には懐疑的であった。

柏亭は秋の二科展へ送る作品を在仏会員と選定し、「ピカソは代表的なものが行く筈だ。」と述べている⁵⁴⁾。二科会員の山下新太郎は、ピカソの《静物》が今回の出品作のなかで一番優れていて、形を無視しても代わりにそれ以上の効果の得られる絵だと述べ、さらにピカソの色彩について「此の畫では決して強烈な色は用ゐてゐない。極く普通の色彩を施して而かも非常に色感が強調されて見える。これは色の対象一つから來てゐるもので、彼の鋭い感官を通して初めて得られる効果だと思ふ。さういふことから古來此の畫の如き色の効果的なものはなかつたとさへ私は感じた。」⁵⁵⁾と評している。ちなみにこの作品は翌年1月の『中央美術』の表紙を飾った⁵⁶⁾。

1925年の光風会第十二回展(1925年2月1日-27日、

上野公園竹之台陳列館)に、黒木三次伯爵家⁵⁷⁾の蒐集品のドガ、シスレー、ピサロ、モネ、ピカソ、ヴェイヤー、ドニ、マルケ、ボナール、ロダンなど合計32点が特別陳列された。ピカソの作品は《室内》と《モンマルトル》⁵⁸⁾で、辻永の展覧会評によると、いずれも立体派以前の作品である。辻は「一はモンマルトルの風俗一寧ろ情景を寫した風俗畫で、一は室内の婦を寫したものである。いかにもロートレック張りのもので、殊に前者に於てその著しきを見る、一種デカタン味の鬼氣人に迫るを覺える。」と述べ、ピカソや黒木コレクションのピカソ作品について「スペイン出の此の若き天才畫家の気魄の如何に旺盛であつたかが覗ひ知られる。(中略)新時代の畫壇に濶歩して居るこの才人の作品が二點も一假令それが若い時の作品でも一此の蒐集品の中に見出す事の出来るのは甚だ愉快である。」⁵⁹⁾と称賛した。

一方、1928年の第七回国画創作協会展(1928年4月27日-5月14日、東京府美術館)には、ピカソの新古典主義時代の《泉》(Z.IV:321)が出品された⁶⁰⁾。このようにして1923-28年にかけて、ピカソの作品の実物が日本へ入ってきたのである。

2. 日本人コレクターのピカソ蒐集

松方幸次郎や大原孫三郎のコレクションにはピカソの作品が少ない。ピカソの妻オルガを描いた《読書する婦人》(1920年、パリ国立近代美術館、Z.IV:180)と《坐る女》(1920年、国立西洋美術館、Z.III:361)⁶¹⁾は松方コレクションに収められていたが、どちらもピカソの新古典主義時代の作品である。大原孫三郎のコレクションにはピカソはなく、大原美術館は第二次大戦後に初めてピカソを購入した⁶²⁾。次に、松方や大原とは対照的な福島繁太郎のコレクションのピカソ作品やその他のコレクターについて述べる。

福島繁太郎は1923年からパリに移り住み、1933年までの10年間で、マティス、ルオー、ドラン、ピカソ、モディリアーニ、ユトリロなど、約150点もの作品を収集した⁶³⁾。福島が初めてピカソ作品を購入したのは、1925年春、ポール・ギョーム画廊で開かれたアポリネールの記念碑建立のための寄付画の売立て会であった。彼はこの売立て会でピカソが直接画廊に下げて持ってきた《裸人立像》(1923年、Z.V:161)を購入し、そのときに店の主人からピカソを紹介されたそう⁶⁴⁾。

福島は前年の1924年春、ローザンベール画廊で開かれたピカソの個展を正宗得三郎と一緒に見た。福島によると正宗は当時マティスに心酔していたが、『恋人たち』(1923年, ワシントン・ナショナル・ギャラリー, Z.V:14)を見て完敗してしまったそうだ。福島もこの作品を「迷ひも淀みもないすつきりした線で端麗な相愛の男女を描き、明快な美しい色で、ほんのりとパステル様に彩色して一気に仕上げてゐる。男は薄い朱色の着物を着、女は白い着物を着てゐるが肩に懸けてゐる絹はひわ色、肉體は白にうつすり紅を差し、綿か何かで拭いた様に筆のタッチの跡もない。どんな素人が見ても、た易く感心する極めて綺麗な繪である。所謂綺麗な繪と云ふものは、得て卑俗に見え下品になり易いものだが、冒険心の強いピカソは敢へてこの危い所に足を踏み入れながら、しかも搖ぎのない構圖と厳しいデッサンに依つて氣高い品位を保たしめ、線の抑揚に依つて繪に強さと深みを與へてゐる」⁶⁵⁾と感嘆し、当時はマティスの方がピカソより定評があったが、この個展でマティスとピカソの評判が入れ替わったと述べている⁶⁶⁾。

福島と正宗がパリで見た1924年のピカソの個展は、ポール・ローザンベール⁶⁷⁾がアメリカへ進出するため前年から企画した一連の展覧会で、ピカソの新古典主義時代の12点の作品を中心に、先の『恋人たち』の他に、同じモデルを描いた『腕を組んですわるサルタンバンク』(1923年, プリヂストン美術館, Z.V:15)も出品されていた⁶⁸⁾。

福島は、1926年4月再び渡仏する途中、ローザンベール画廊ニューヨーク支店で『生木と枯木のある風景』(1919年, プリヂストン美術館, Z.III:364)⁶⁹⁾を購入した。この作品は20世紀のアヴァンギャルド美術を収集するアメリカ人のジョン・クインの遺産で、福島は他に『泉』(Z.IV:304)も買った。彼は5月にパリでもこのクインの遺産の『母子像』(Z.I:115)と『農民』(Z.III:371)を購入し、さらに1928年にはローザンベール画廊から『アルルカン』(Z.V:142)を買ったが、値段が2年前に比べて4倍だったと述べている⁷⁰⁾。また、『女の顔』(1923年, プリヂストン美術館, Z.V:45)は福島が1925年にパリのダバー画廊で入手した作品である⁷¹⁾。『女の顔』はその後、福島が1933年に帰国後、岸本吉左衛門に売却され、その後に当館へ入ったのがその来歴である⁷²⁾。福島は前述した『裸人立像』と青の時代の『婦人像』(1903年, Z.VI:548)以外はローザンベール画廊から買っていて⁷³⁾、当時17点ものピカソ作品を収蔵していた。

福島旧蔵の主なピカソ作品は、当館の他に次の国内美術館に収蔵されている。『鳥籠のある静物』(1925年, Z.V:456): 大原美術館、『青い帽子の女』(1923-24年, Z.V:181): 箱根彫刻の森美術館、『裸婦(フェルナンド)』(1909年, Z.IIa:165): ひろしま美術館等である。その他の福島旧蔵品のうち、『アルルカン』(1923年, ティッセン=ボルネミッサ, マドリッド, Z.V:142)以外の『農民』(1919年, ニューヨーク近代美術館, Z.III:371)、『婦人像』(1901年, クレーラー・ミュラー国立美術館, Z.I:64)、『泉』(1921年, スtockホルム近代美術館, Z.IV:304)、『母子像』(1901年, ハーヴァード大学フォッグ美術館, Z.I:115)は、福島が帰国する前にすでに手放していた。

福島は趣味で絵を買った。「キュビズムが嫌いになるとピカソも買わぬと云う人もありますが、私の好みはそう片寄っているとは思いません。」⁷⁴⁾と述べているが、その多くは新古典主義時代の作品である。矢代幸雄は福島コレクションについて、「日本にピカソの青の時代や古典時代のしっかりした作を持ち歸つて、その逞しさと崇高さを我國に最もよく示してくれたのは福島君である。」⁷⁵⁾と福島旧蔵の功績を称えている。

福島旧蔵の他にピカソ作品を所有していた当時の日本人コレクターには、実業家の岸本吉左衛門や福原信三などがある。岸本は大阪の製鉄業を営む実業家で、山本鼎など芸術家のパトロンでもあった。岸本は福島からピカソの『女の顔』(1923年, プリヂストン美術館, Z.V:45)を購入する以前に、ピカソの『裸体』[1926年第三回信濃橋洋画研究所展覧会出品]⁷⁶⁾も所有していた。一方、福原はピカソの『美しいオランダ娘』(1905年, クイーンズランド・アート・ギャラリー, Z.I:260)と同じ作風の作品、『裸女』(1905年, グワッシュ, Z.I:259) [1925年第六回中央美術展出品]を1923年頃購入している⁷⁷⁾。

3. 当時のピカソ論

1910年代は、ヨーロッパ美術の新傾向の概要を伝える記述のなかでピカソに触れるだけだったが、1920年代に入るとピカソの伝記的紹介や作風の変遷が取り上げられるようになった。1921年の『中央美術』は、ピカソの作風が転換したことを記事にした。それには「ピカソと云へば現代佛蘭西の畫家の中でも立體派の驍將として有名であるが、最近彼はその近作を巴里で展覧して、一般觀衆を驚駭せしめた。」とあり、挿図に前述の松方コレクション

のピカソ《読書する婦人》(Z.IV:180)が掲載されている⁷⁸⁾。

一氏義良は立体派の運動からピカソの生い立ちやピカソから受ける印象までを論述している⁷⁹⁾。一氏はピカソの印象を「セザンヌ以後の、一番しつかりした男らしさを以て、理知と感覚との充實した積極的の革命をなし來つたピカソ、そしてだれよりも複雑な「カメレオンの豹變」のストラツグルを繼續し來つたピカソ、「かれの仕事を見ると、五人位な人間が合同してやつてゐるやうに見える」といふその精力の所有者たるピカソ―かれは現代の、或る一頂點を示す。しかしわれらはピカソを偶像としてはならない。ピカソは多量のオリヂナリテイをもつと共に、かれはまた他人からの借り物によつて、立體派の中心とまでまつり上げられた代辯者だ。われらはかれをあまりに英雄化してはならない。」と称えつつ、批評も忘れていない⁸⁰⁾。

日本人画家たちもピカソに関する海外文献の翻訳や彼らによる論考を盛んに発表し始めた。1920年代の代表的な前衛的作家の村山知義はポール・ローザンベールの論文「パブロ・ピカソ」を翻訳し⁸¹⁾、アンドレ・ロートに師事した黒田重太郎は、『中央美術』に「立體主義とその中堅作家―現代藝術の諸傾向に關するノオト」⁸²⁾と称して、初めにピカソを取り上げて、彼の作風の変遷を論じた。

中川紀元の著書に、ピカソの《アヴィニヨンの娘たち》(1907年、ニューヨーク近代美術館、Z.IIa:18)に触れた注目すべき文章が登場する。1919年パリに渡り、マティスに師事した中川は、帰国後に『ピカソと立體派』(1922年)を執筆し、その中で「眞に一つの革命である立體派の運動の出發を命令してゐるとも云ふべき劃期的な大作「アギニヨンの娘たち」の中には決して連續性の解決と云ふものがないのである。」と述べ、早い時期に紹介している⁸³⁾。

北村喜八はキュビズムの起源を知るために、ピカソの専属画商であるダニエル＝ヘンリー・カーンワイラーの著作⁸⁴⁾を引用して「立體派への道程」を論じている。その文中で「1907年の始めに、ピカソは女や果物やカーテンを描いた奇異な大きい繪を始めたが、未完成の儘残された。」⁸⁵⁾とカーンワイラーが《アヴィニヨンの娘たち》を未完成と評した一節を訳出している。

中川や北村の著述にはこの作品の図版はなく、またこれ以上の解説もないので、1920年代の日本で《アヴィニヨンの娘たち》が実際にどの程度知られていたかは定かでない。日本の美術関連の誌上に、

この作品の図版が掲載されたのは1930年代⁸⁶⁾になってからである。

ちなみに《アヴィニヨンの娘たち》が世間に公開されたのは1916年⁸⁷⁾のことで、公開にあたってはアンドレ・サルモンがこの作品名をつけた。1924年2月にアンドレ・ブルトンの仲介で実業家ジャック・ドゥーセに売却され、その後1937年にニューヨーク近代美術館が購入して現在に至っている。

画家で理論家の神原泰はピカソや未来派の研究をした。彼は木村莊八などと同様に、『白樺』を通してヨーロッパ美術を知り、パリに洋書を直接注文した。彼はピカソ発見について、「日本人の一般人におけるピカソ発見は極めて劇的な事件で始まった。ある朝書店の丸善の入り口に、英語の立派な装幀の『立體派』という本が75銭の特価でうず高く積み重ねて売りに出された。(中略)アルベル・グレイズとジャン・メツァンジェの共著『立體派について』⁸⁸⁾の英訳本であつた。(中略)その本は一般の日本人の間に立體派につき、ピカソについての好意的な知識を与えた。」と伝えている⁸⁹⁾。

神原は著書『ピカソ』(1925年)⁹⁰⁾で、海外の文献資料をもとに、ピカソの作風の変遷を初期から新古典主義時代にいたるまでを論じている。そしてピカソやブラックが始めたキュビズムとそこから派生したキュビズム一派とを区別するために、ピカソの作風をキュビズム以前のアフリカ彫刻の影響を受けた時代から1912年頃迄を「ピカシズム」⁹¹⁾と定義した。また挿図には《腕を組んですわるサルタンバンク》(1923年、ブリヂストン美術館、Z.V:15)の図版も載っている。これは前述のポール・ローザンベールがアメリカ進出のために企画したピカソの個展をアメリカの雑誌『ジ・アート』(1923年12月号)が特集し、それに掲載された図版の転載である⁹²⁾。

4. 日本人画家のピカソ導入

4.1 パリの日本人画家たち

第一次世界大戦終結後、多くの日本人画家たちが滞欧した。彼らはお互いに顔見知りで、パリでアトリエを借りて滞在し、美術館や画廊を見学して制作に励んだ。同じ頃パリにいたコレクターの福島繁太郎がいうには、ピカソは成功した画家としてパリ市内の中心地ラ・ボエシー通りの閑静な高級住宅街に住んでいた。ピカソは手紙を滅多に見ないため、彼のアトリエを訪問する人は、皆いきなり訪問していたということだ⁹³⁾。

1921年に渡欧した東郷青児(1921~28年留学)は、同年6月にパリでピカソや未来派のマリネッティらに会った⁹⁴⁾。東郷がピカソのアトリエを訪問したのはその翌年の1922年で、その頃の彼の静物画⁹⁵⁾などに、ピカソのキュビズムの影響が窺える。

海老原喜之助(1923~33年留学)は1926年に友人でピカソの弟子のペドロ・プルナの紹介でピカソを訪問し、若い海老原ならではの自己アピールで、ピカソを前にして手品もどきの腸詰め of 芸で驚かせたという⁹⁶⁾。海老原は自分の作品を師の藤田嗣治から「ああ、ピカソか」といわれる度に、悔しい思いをしたそうだ。彼はまたピカソの彫刻を日本で紹介するために、1930年の「第十七回二科展」(1930年9月4日-10月4日、東京府美術館)⁹⁷⁾に《道化師》(1905年、ブリヂストン美術館)を送っている。

前田寛治(1922~25年留学)はパリから帰国の年に、写実主義とキュビズムを合わせた作風の《J.C嬢の肖像》(1925年、倉吉博物館)(fig.3)を制作した。それが1925年の第六回帝展で特選となった。この作品は、前田と同じ東京美術学校の同期生の中野和高(1923~27年留学)の回想によると、1924年、ポール・ローザンバール画廊で前田がピカソの《マダム・ピカソ》(おそらく妻オルガをモデルとした肖像画であろう)を見た直後に、「その時の餘奮を持つて描いた」⁹⁸⁾ということだ。

前田は、セザンヌ作品から造形の法則性を学び、クールベ、アングルとヨーロッパ美術を遡って、重量感ある構図と豊かでたくましい四肢を持つ人物表現を確立する一方で、キュビズム研究のためにアンドレ・ロートの研究所へも通った。前田は「キュビストとして著名な者はピカソ、ブラック(略)、ピカソがこの思索の重点を占め」と述べ、キュビストが《静物》を多く制作した理由をセザンヌの静物画に関連づけて論じた⁹⁹⁾。



fig.3
前田寛治《J.C嬢の肖像》
1925年 倉吉博物館

前田に限らず、里見勝蔵(1921~25年留学)は「セザンヌ以後仏国にいい画家は居ない—なんて言ふ馬鹿者は一人も居なかつた。フォービズム、キュビズム、その他あらゆる傾向の画にも、新しい試みにも、感覚にも私達は鋭敏であつた。」¹⁰⁰⁾と述懐したように、当時の留学生は古典も新しい美術様式も同時に学んで吸収した。

里見勝蔵や中山巍(1922~28年留学)は、キュビズムよりもフォーヴィスムに傾倒したが、里見の《石膏像のある静物》(1927年、東京国立近代美術館)にはピカソのキュビズム的な人体表現、中山の《家婦》(1924年)には新古典主義時代の肖像画の要素が窺える。また前田と東京美術学校の同期生の伊原宇三郎(1925~29年留学)は、ピカソの新古典主義時代に感化される一方で、留学時代にピカソのキュビズム作品の模写をして研究している。伊原については1930年代で再び触れることになる。

4.2 キュビズムの援用

1920年代に、渡仏してピカソには師事せず、アンドレ・ロートやフェルナン・レジェ、オシップ・ザツキンなどに学び、キュビズムを絵画制作に援用した日本人画家たちがいる。しかし、彼らの当時の回想や手紙からはピカソを意識して絵画を制作していたことが推察できる。ちなみにピカソは、1917年以降から作風が「アングルの時代」、すなわち新古典主義へと転回しながらも、それと平行して総合的キュビズムのスタイルで制作していた時期であった。

川口軌外(1919~29年留学、途中一時帰国)は、ピカソ風のキュビズムを日本に導入した。彼はロート研究所で学んだ古典の理論的な解説がキュビズムへの理解に役だったと述べ、またレジェからは「デッサンこそ絵画の主体である」と教えられたと

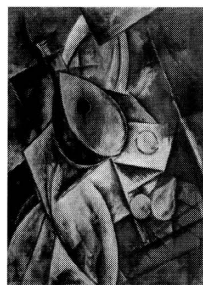


fig.4
川口軌外《静物 (マンドリン)》
1927-31年 東京国立近代美術館

いう¹⁰¹⁾。彼はキュビズムの影響を受けた《風景(モントパン)》(1926年, 福岡市美術館)¹⁰²⁾や、ピカソやブラックがキュビズムに用いたモチーフのひとつ、マンドリンを描いた《静物(マンドリン)》(1927-31年, 東京国立近代美術館) (fig.4)などを制作した。

坂田一男(1921~33年留学)は、1923年からフェルナン・レジェに学んで、キュビズム研究に没頭した。彼の滞欧作品にはピカソのキュビズム風の作品がある。坂田は1925年、妹の日出に次のような手紙を書いている。「今ピカソ等との展覧会の絵を殆んど仕上げてる所だ。二本の足のやり場で四苦八苦、もうフラフラとなつて連夜のブツ通しだ。まるで機械を見る様な絵だ。キュビストの詩だ、ビュールなものだ。」¹⁰³⁾。その頃、制作した作品が《キュビズムの人物像I》(1925年, 岡山県立美術館)である。

山口長男(1927~31年留学)は、当時の多くの日本人画家たちがフォーヴィズムをとり入れたのとは反対に、意識的にキュビズムを摂取した画家である¹⁰⁴⁾。彼は1928年、先輩の西村叡の紹介でザツキンと知り合い、彼のアトリエに通った。彼の留学時代の作品《室内》(1930年)や《二人像》(1930年, 東京国立近代美術館)には、キュビズムの影響がよく反映されている。彼は「ローザンベールのピカソとブラックの作品がある二つの小さい部屋には習作が出来なくなると駈けつけた。1時間余りもここにぼんやりと居ると元気づいた。」¹⁰⁵⁾とその当時の自分の心境を回想している。

一方、国内でキュビズム研究に励んだ画家たちもいる。古賀春江は、キュビズムと仏教的テーマを融合した《埋葬》(1922年, 総本山知恩院)や、母性をキュビズムの手法で描いた《母子》(1922年, 東京国立近代美術館)などを制作した。キュビズム手法の研究をするために、ピカソの作品の模写(1925年頃, 水彩, 石橋美術館) (fig.5)をしている。その模写

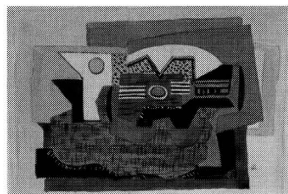


fig.5
古賀春江 ピカソ作品の模写
1925年頃 石橋美術館

のオリジナルは神原泰の著書『ピカソ』(1925年)に掲載された《赤い布の上のギター》(1922年, Z.IV:440)の図版で、それを写したと考えられる。

岡本唐貴は1922~23年にかけて、かねてから考えていたキュビズム研究に取りかかり、ピカソやブラック、レジェに惹かれたという¹⁰⁶⁾。テーブルの上の洋食器やテーブルクロス、アルファベットの文字などをキュビズム風に描いた《静物》(1923年, 東京国立近代美術館)や、ギターのモチーフを描いた《静物》などを制作した。後者の作品は、「ピカソ風の『静物』これは圖案としての面白味はあると思ふ。べにがら色は気持ちよく見られる。」と萬鉄五郎に評された¹⁰⁷⁾。

5. 新興美術運動とピカソの関わり

1920年代は、次々に新興美術運動が結成され、日本のアヴァンギャルドが一斉に開花した時代である。神原泰や中川紀元が結成したアクション、村山知義らのマヴォ、普門暁らの未来派美術協会などがそれであり、彼らのグループへのピカソの影響に注目したい。

ピカソやブラックがおこなったパピエ・コレやコラージュは、1910年代に、正宗得三郎によって初めて紹介された。その援用が最初期に見られるのは、鈴木顕児の《日没に於ける大都市の感覚的光の分解》(所在未詳)¹⁰⁸⁾である。この作品は1920年に普門暁らが結成した未来派美術協会の第一回展(1920年9月16日~25日, 銀座・玉木屋)に出品され、「鈴木顕児君の『日没に於ける大都市の感覚的光の分解』は赤と黄と青の三色を主とした色紙を貼り交ぜて變つた表現を圖つてゐるが單なる色紙細工ではない。」¹⁰⁹⁾と『読売新聞』で展評された。

その後、コラージュの手法については1920年10月に来日したロシア未来派の画家ダヴィド・ブルリユークとヴィクトル・パリモフのコラージュ作品が紹介され、さらに1922年、来日した女性画家のワルワラ・ブブノワがロシア構成主義(ロシアのウラジーミル・タトリンの手でピカソがコラージュを彫刻に応用した作品から着想して始まった)を日本に紹介した。日本人作家のコラージュ作品は同年10月、未来派美術協会主催による「三科インデペンデント展」(1922年10月15日~31日, 上野・青陽楼)に登場し、日本の新興美術運動の作家たちの間に浸透していった。

一方、1922年、二科会会員の前衛的傾向の作家、中

川紀元や矢部友衛、神原泰らが中心になって結成したアクションは、未来派や立体派をモデルにして積極的に芸術運動をおこなった。彼らは第一回展(1923年4月2日-7日、三越)、翌年に第二回展(1924年4月23日-28日、三越)を開催するが、世間の評判は必ずしもメンバーの期待通りにはならなかったようだ¹¹⁰⁾。ドイツ留学から帰国した村山知義は第二回展を見て「一番多いのはピカソやブラックを煮しめて骨抜きにしたフランスの帝展式の真似をした連中」¹¹¹⁾と辛辣な批評をした。

アクションはこの第二回展以後、二科展でもメンバーの多くが落選し、同年10月に解散した。その後、アクションの旧メンバーが中心となって、「造型」というグループを1925年に結成した。古賀春江は造型の第一回展覧会(1926年3月23日-29日、銀座・松屋)を評して、その展示風景から理解されるように、「その表現形態に於いて、ビザンチン式顔容と、ピカソの形態と、泥繪の色感の共通する者が大部分」¹¹²⁾ (fig.6) と総括する。前述の村山の批判や古賀の展覧会評から、アクションや造型グループの画家たちの多くはピカソを皮相的にしか捉えていなかったと思われる。

村山知義(1922~23年留学)は、ドイツ留学中にヨーロッパの前衛芸術に接したなかで惹かれた画家の一人にピカソを上げている¹¹³⁾。村山¹¹⁴⁾とピカソの作品が「第1回デュッセルドルフ国際美術展」(1922年5月28日-7月3日、ティーツ百貨店)で一緒に展示されたことを「私は自分の絵が、ユツタリと、ぜいたくに、ピカソやブラックの絵にまじって、掛けてあるのを見て、至極満足した」¹¹⁵⁾と回想している。

彼は自叙伝のなかで、19歳のときに未来派の人体のデッサンを描いた¹¹⁶⁾理由として、ローザンペー

ルのピカソ論を挙げている。村山はこれを翻訳し、著書『現在の芸術と未来の芸術』(1924年)¹¹⁷⁾に収録して出版し、その序文に、「私が意識的構成主義の宣言を出すことが出来る迄には尙此の種の準備的な本が数冊必要だらう。」と述べた。村山の芸術にはピカソの存在が欠かせないことが窺える。

村山は帰国後、表現派的な絵画形式からスタイルを変え、コラージュを用いて、「意識的構成主義」を唱え、1923年5月に「村山知義の意識的構成主義の小品展覧会」を開催した。彼は《コンストルクチオン》(1925年、東京国立近代美術館)について、「ピカソやブラックやゲオルゲ・グロッスが、文字の印刷物を画面のごとく一部に貼りつけたことを知っていた」と述べ、「私のような材料を(なかならず毛髪や縫いぐるみやスリッパなどを)私のようなやり方で使ったものを知らなかった」とその独自性を主張した¹¹⁸⁾。同年6月に、村山をはじめ、柳瀬正夢、門脇普郎、大浦周蔵、尾形亀之助が日本のダダともいわれるグループ、「マヴォ」を結成し、彼らは1924年7月から翌年8月にかけて雑誌『マヴォ』を刊行した。これは最も美しいアヴァンギャルド雑誌といわれ、沢青鳥の《コンストルクチア》(『マヴォ』1号、1924年7月)のキリル文字コラージュや、高見沢路直《ラシヤメンの像》(『マヴォ』3号、1924年9月の表紙)のカラーコラージュなどが掲載されている。

1920年代は、二科展の特別陳列やその他の展覧会で、ピカソの初期から新古典主義時代のオリジナルの作品が次々に紹介されると共に、新興美術運動の画家たちに支持されるようになり、ピカソの存在が、特に若い前衛的な日本の美術風土において確かなものとして根を下ろしていった時代である。続く1930年代以降の展開は次号に掲載される予定である。

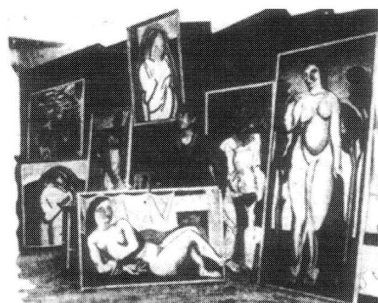


fig.6
造型第一回展会場写真「万朝報」
1926年3月21日

以下は注釈

- 1) 3部構成は次の通りである。1.「フランス美術の百年展」、2.「フランス美術の十年展」、3.「諸外国の美術の十年展」。出品作家は他にベルギーのアンソール、クノップフ、オランダのトーロップ、スイスのホドラー、オーストリアのクリムト、ミュシャ、イギリスのバーン=ジョーンズ、アメリカのサージェントなど。(丹尾安典「パリ万国博覧

- 会と日本美術』『日本美術院百年史2巻』日本美術院, 1990年, pp.441-442) / ジュゼップ・パウラ・イ・ファブレはピカソの出品について次のように述べている。「1900年2月24日、『ラ・パンダアルディア』紙には受理された美術家の最終リストが発表され、われわれの画家はパブロ・ルイスの名前で、「油彩画(複数)」を提出している。」(ジュゼップ・パウラ・イ・ファブレ, 大高保二郎・永澤峻共訳『不滅のピカソ1881-1907』平凡社, 1983年, p.162)
- 2) 現在, "dernier moment" と題された《臨終》の行方は不明だが, 《ラ・ヴィ(人生)》(1903年, クリーヴラント美術館, Z.I:179)のX線調査の結果, 塗り消された下層の絵が出品作だったとするのが今日の一般的な見解。(大高保二郎「死とタナトス」『ピカソ天才の誕生, パルセロナ・ピカソ美術館展』上野の森美術館, 2002年, p.119) / 《臨終》については『不滅のピカソ1881-1907』(前掲註1), p.168, pp.172-173, p.202が詳しい。
 - 3) 久米はスペイン絵画を「西班牙の部は以前の如く人屍, 流血, 残忍, 陰晦の観なく, 清鮮爽明にして飛躍快活の趣あるは, 其の變動の極めて大なるを卜するに足るなり。」と評した。(「千九百年巴里大博覧會に於ける列國の藝術(五)」『美術新報』第2巻第17号, 1903年, p.3)
 - 4) Lesley Downer, *Madame Sadayakko: the geisha who bewitched the West*, Gotham Books, c.2003, pp.187-188. / John Richardson, *A Life of Picasso*, vol.I 1881-1906, Random House, 1996, p.203
 - 5) アンドレ・ジイド(小林秀雄訳)「アンジェエルへの手紙」『アンドレ・ジイド全集』第7巻, 1937年, pp.131-132
 - 6) 前掲註4, p.188. Downerによれば, 貞奴と音二郎はピカソよりもBernsteinという彫刻家が鑄造した二人の胸像に感心し, 音二郎がそれを日本の新聞に伝えたという。二人の胸像は, 貞照寺にある。
 - 7) 「巴里畫界の最新派」『読売新聞』(1911年11月18日)に, ピカソがキュビズムの師匠として報じられ, サロン・ドートンヌでキュビズムが公認されたことやキュビズムの概念についての記事が載った。/ 浅野徹「立体派, 未来派と大正期の絵画」『東京国立近代美術館年報 昭和51年度』1978年3月, p.88
 - 8) 石井柏亭「サロンドートンヌを觀る」(上中下)『東京朝日新聞』(1911年11月9日, 10日, 11日)
 - 9) 町田曲江「最近巴里の美術界」『読売新聞』(1911年7月9日)(前掲註7, p.88)。石井柏亭もアンデパンダン展の記事を『東京朝日新聞』(1911年7月21日, 22日, 29日)に送っている。
 - 10) 木下空太郎「洋畫に於ける非自然主義的傾向」『美術新報』上: 12巻4号, 中: 12巻5号, 下: 12巻8号, 1913年
 - 11) 森田亀之輔「泰西畫界新運動之經過及キュビズム一附り其批評」『美術新報』上: 14巻3号, 上承前: 14巻4号, 中: 14巻5号, 中承前: 14巻7号, 下の上: 14巻10号, 下の下: 14巻11号, 1915年
 - 12) 前掲註10, 上: 12巻4号, pp.11-12
 - 13) 前掲註11, 下の下: 14巻11号, p.21。森田は「其繪には女もマンドリンも充分に説明せない様な幾多の線が交錯してゐるに過ぎぬ。けれど, 作者が此繪を創作しつゝある時に, 其心眼にはちゃんとマンドリンも女も存在してる。(中略)ピカソの抽象は外界に基礎を置いているが, カンデンスキーは内的生活に基礎を持つてる。」との確に論じている。
 - 14) 《マンドリンを持てピアノに依れる女》の挿図は, 前掲註10の上: 12巻4号に掲載。
 - 15) 《ギタールを弾く人》の挿図は, 前掲註11の上承前: 14巻4号, 《マンドリンを持てる女》と《或る詩人》は, 下の下: 14巻11号に掲載。
 - 16) 第六回美術展覽會は赤坂区靈南坂下三會堂会場(1913年2月8日-16日)で開催されたが, 会場の都合で中止になり, 衆議院構内虎ノ門倶楽部(1913年4月11日-20日)へ変更になった。
 - 17) 白樺の第六回美術展覽會目録には「セザンヌ複製画15点, ゴッホ複製画50点, ゴーギャン複製画30点, マティスの複製画30点, その他ピカソ」とあり, ピカソ作品は《女の肖像》《静物》《化粧》である。
 - 18) 武者小路実篤は「キュビストや, 未來派はまだ自分達にはしつくりは來ない, だから今の所まだ本物が嘘物かはつきりはしない。」と述べている。(「個性に就ての雜感」『白樺』3巻10号, 1912年, p.56)
 - 19) 記者は当時の反響を「與謝野氏出品のキュビストの作品は色々の問題の的になつて居た。」と記している。(「第六回美術展覽會記事」『白樺』4巻5号, 1913年, p.131)
 - 20) 1912年7月11日の莊八の日記に, 「(中略)岸田來る。後で彼の家へ行き, 清宮, 岡本と共に柳氏を訪問し, ゴーホ, ゴーガン, マチス, ピカソ等の画が何枚も何枚もあつて, もう堪らなくなつてしまつた。」と記している。(『木村莊八日記[明治篇]』東京文化財研究所, 2003年, p.175)

- 21) 『藝術の革命』(洛陽堂, 1914年)や「英・佛・露現時の後期印象派」(『フューザン』第4号, 1913年)など。後者はロジャー・フライがロンドンのグラフトン・ギャラリーで1912年に開催した第二回ポスト印象派展(*Second post-Impressionist Exhibition*, Grafton Galleries, London, Oct.5-Dec.31, 1912)の展覧会カタログの訳出。この展覧会には絵画250点のうちピカソ作品は16点出品され、多くは画商カーンワイラーの所蔵作品であった。
- 22) 木村莊八『未来派及び立体派の芸術』天弦堂, 1915年。立体派の訳文の出典は, Albert Gleizes, Jean Metzinger, *Cubism*であると「或る對話一序にかへて」(p.26)に記してある。
- 23) 前掲註22, p.1。「或る對話一序にかへて」には青年B(自分の意を含んで未来派や立体派の畫家を訪問した青年)と記してある。
- 24) 前掲註22, p.154
- 25) 高村光太郎「遍歴の日」(昭和26年8月27日談話筆記)『高村光太郎全集第十卷』筑摩書房, 1958年, p.144, 初出は『中央公論』第66年第12号。
- 26) 齊藤与里「スタイン氏のコレクション」『白樺』3巻1号, 1912年, pp.131-142。与里が文中, 話題にしたマティスの作品は《豪奢Ⅰ》で, 1907年のサロン・ドートンヌ(与里が見たセザンヌ大回顧展と同じとき)に出品後, ガートルードの兄マイケルとサラ夫妻のバリの食堂に1908年頃から数年かけてあった。一方, ガートルードともう一人の兄レオはバリの仕事場の壁に彼らが収集した美術品を掛けていて, その記録写真が残っている。
- 27) 齊藤与里「ピカソの道」『フューザン』第4号, 1913年, p.74
- 28) 1906年から1914/15年にかけて撮影されたレオとガートルードのパリ市内の仕事場(27 rude de Fleurus)の8枚の写真から当時の彼らの収集品の様子がわかる。(Four Americans in Paris: the collection Gertrude Stein and her Family, New York, Museum of Modern Art, 1970, p.90.)
- 29) 前掲註27, pp.77-80
- 30) 石井柏亭「フォーヴィズムとアンチ, ナチュラリズム」『早稲田文學』第85号, 1912年
- 31) 前掲註30, p.2。「今年のアンデパンダンの展覧會場へ入つた時にもう此方も大分度胸が据はつて居た。」
- 32) 前掲註30, pp.12-13
- 33) アカデミー・ジュリアンの同級生ジョルジュ・デニケスの紹介。(嶋田華子編「主要作品解説」『色彩の画家梅原龍三郎展』読売新聞, 2006年, p.99)
- 34) 益田義信「梅原龍三郎滞欧雑談」『美術手帳』no.13, 1949年, p.5
- 35) 梅原良三郎(龍三郎), 1913年4月30日の手紙。(「花市の河岸より」『白樺』4巻6号, 1913年, p.143)
- 36) 藤田の書簡: 1914年2月10日, 発信地: パリ, 受信地: 千葉町千葉県教育会女子部養成所内寄宿舎内(『藤田嗣治書簡—妻とみ宛—』(一)パリ留学初期の藤田嗣治研究会, 2003年)
- 37) 藤田嗣治「巴里に於ける画家の生活」『巴里の横顔』実業之日本社, 1929年, p.240
- 38) 日記によると正宗は1914年7月25日にサゴの店を訪れている。(正宗得三郎「ヴィラ・ファルギエール日記」『画家と巴里』日本美術学院, 1917年, p.45)
- 39) 正宗得三郎「仏蘭西畫壇の印象」『文章世界』152号, 1916年, p.18/ 五十殿利治「構成物の時代—未来派美術協會から三科展まで」『大正期新興美術運動の研究』スカイドア, 1995年, p.696
- 40) 「我が邦最初のキュービストとして多少の注目を引けり」(『美術界消息』『中央美術』1巻2号, 1915年, p.131)/ 東郷の描く線や面について《コントラバスを弾く》とアルペール・グレーズの《露臺の男》とを比較し, 一目瞭然と指摘している。(『東郷青児氏の展覧會』同号, p.121)
- 41) 1912~1915年頃に, 東京及び土沢で使用されたと推定される。(佐々木一成「萬鉄五郎のスケッチブック」『岩手県立博物館研究報告』第6号, 1988年8月, p.96)草稿は『鉄人画論』(中央公論美術出版, 1968年, pp.68-70)に収録されている。
- 42) 土方定一「編集後記」『鉄人画論』1968年, 中央公論美術出版, pp.388-392
- 43) 匠秀夫『異端の画家たち』求龍堂, 1983年, p.44
- 44) 「絵馬堂を仰ぎて」『朝日新聞』京都付録版(1914年5月6日)(『ユリイカ』1999年6月号に掲載)
- 45) 『村山槐多全集』彌生書房, 1963年, 2つの詩: pp.55-58, 日記: p.353
- 46) 未来派はキュビズムより先に紹介された。森鷗外はイタリアの詩人フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティの未来派宣言を「棕鳥通信」(『スバル』1909年5月)に紹介した。
- 47) 「佛國サロンの名畫と彫刻七百點を展覧すべく再び來朝す デルスニツク氏が携えて」『横濱貿易新報』(1923年3月11日)によると「4月1日から5月1日迄上野で展覧會を開きます」とある。
- 48) 「佛蘭西現代水彩畫・素描・版畫 展覧會陳列目録」(1924年)によると, シリーズのうち《舞踊》《女の顔》《曲馬團の女》《女の横顔》《曲馬團の

- 宿舎》《小兒の化粧》《貧しき食事》《曲馬師》の8点である。なお《貧しき食事》は2006年の調査では荒井記念美術館、宮城県美術館、富山県立近代美術館、上原近代美術館、姫路市立美術館、和歌山県立美術館、高松市美術館、北九州市立美術館の8館が所蔵していることを把握している。
- 49) 仲田勝之助「フランス現代美術展を観て」『東京朝日新聞』（1923年4月15日）/「佛蘭西現代美術展水彩素描版畫」『東京毎日新聞』（1924年2月15日）
- 50) 開会初日の9月1日に関東大震災が発生し、東京ではやむなく中止。10月から大阪、京都、福岡に巡回した。（『二科七十年史資料編』『二科70年史1914-1943』社団法人二科会、1985年、p.263）
- 51) 石井柏亭『美術と自然 滞欧手記』中央美術社、1925年、pp.24-77
- 52) 前掲註51、p.26
- 53) 前掲註51、p.76
- 54) 前掲註51、pp.111-112
- 55) 山下新太郎「二科のフランス現代畫」『中央美術』9巻10号、1923年、pp.40-41
- 56) 『中央美術』10巻1号、1924年、表紙
- 57) 『藝天』の展評によると「黒木大將の息で實業界の氏が洋行中に集めたものである。同氏夫人は松方巖氏の娘竹子さんであるのも首肯出来る。何でも自身作家と交渉して、畫商によらなかつたさうだ。」とある。（『藝天』第14号、1925年、p.7）
- 58) 光風会第12回展覧会出品目録に、《室内》と《モンマルトル》とある。《室内》は作品の特定が不可能。《モンマルトル》の図版は次を参照（『日本美術年鑑』中央美術社、1925年）
- 59) 辻永「光風會展覧會に就て（中）」（『国民新聞』中：1925年2月11日、上：2月10日、下：2月13日）
- 60) 『第七回国画創作協會展覧会目録』朝日新聞社、1928年、目録no.191
- 61) 《読書する婦人》はフランス政府が接收した作品のうち、日本に返還されなかった1点。《坐る女》は1959年にフランス政府より寄贈返還された。（『松方コレクション西洋美術総目録』1990年、神戸市立博物館）
- 62) 大原孫三郎の後継者、総一郎が福島繁太郎からピカソの《鳥籠》を1951年に4,500,000円で購入し、翌1952年には《頭蓋骨のある静物》をルイー・レイリス画廊（東京画廊を通じて）から10,000,000円で購入している。（『大原美術館創立70周年記念』『大原美術館紀要』0号、2000年、p.69、p.76）
- 63) 塚田美香子「福島繁太郎」『西洋美術に魅せられた15人のコレクターたち1890-1940』石橋財団ブリヂストン美術館、1997年、p.44
- 64) 福島は「ピカソが包んだ絵を下げて入ってきました。ピカソに紹介されたのはこの時ですがピカソが帰ってから包みをほどいてみるとあの絵です。これを買おうとかく決心しました。」と述べている。（福島繁太郎「私のコレクションについて」『旧福島コレクション みづゑ増刊号』no.597、1955年、p.2）
- 65) 福島繁太郎『ピカソ』新潮叢書、1951年、pp.41-42
- 66) 前掲註65、p.43。「今日では信じられない事ではあるが、當時に於てはマチスの聲價が既に定評あつたに引換へ、ピカソは評價まちまちであつたのだが、この展覧会で反對論は一舉に押しつぶされ、世紀の巨匠である事が確認された。」
- 67) ローザンベール画廊主のポール・ローザンベールは、ピカソと1918年から専属契約を結んでいた。（マイケル・C・フィッツジェラルド、別宮貞徳監訳『ギャラリー・ゲーム ピカソと画商の戦略』淡交社、1997年、pp.101-158）
- 68) ピカソの個展は1923～24年にかけて、ニューヨークのウィルデンスタイン画廊、シカゴ、パリへと巡回した。当館の作品は1923年のニューヨークのウィルデンスタイン画廊の出品目録ではSaltimbanque、no.11、1924年のパリのローザンベール画廊の目録にはno.3、Saltimbanqueとある。
- 69) この作品はその後、ブリヂストン美術館創立者の石橋正二郎が1963年に福島の妻慶子から購入し、1976年に石橋財団へ寄贈された。
- 70) 前掲註64、p.3
- 71) 1977年4月27日付Jacques Daberより嘉門安雄宛の手紙によると、福島は1925年、Galerie Daber、Parisより60,000フランで購入した。
- 72) 石橋正二郎が岸本吉左衛門から《女の顔》を購入したのは1945-46年で、これは石橋正二郎の西洋美術コレクションのうちモネ《アルジャントゥイユの洪水》やユトリロ《サン＝ドニ運河》に次ぐ、早い時期にあたる。
- 73) 前掲註64、p.8
- 74) 前掲註64、p.7
- 75) 『藝術のパトロン』新潮社、1958年、p.270
- 76) 『美術新論』第2巻第1号、1927年、p.10
- 77) 福原は「日本へも、先年來たことのあるヴィルドラック氏の夫人が畫商をやつてゐて、この人の手からルヌワールの静物や、ピカソの赤の時代の裸體を手に入れたのであつた。これはオランダの

- 少女を描いたものなどと同じ畫風のものである。ピカソの繪を乗せた船が横濱であの關東の大震災に遭つたが、若しもその時ドックに這入つてゐたら、或は火災に罹つたことかも知れない。私も買つたはよいが震災で、その代金を拂はなくてはならず、にがい経験をなめた想出をもつてゐる。」と述べている。(福原信三「蒐集を語る 1 モネー、ピカソ、ゴンチャロバなど」『アトリエ』15巻6号, 1938年, pp.51-52)
- 78) 「ピカソが轉換したーピカソの近作展覧会」『中央美術』7巻9号, 1921年, p.101
- 79) 一氏義良『立體派, 未來派, 表現派』アルス社, 1924年
- 80) 前掲註79, p.288
- 81) 村山知義「パブロ・ピカソ」『みづゑ』no.229, 1924年(『現在の芸術と未来の芸術』長隆舎書店, 1924年に収録)
- 82) 黒田重太郎「立體主義と其中堅作家ー現代藝術の諸傾向に關するノオト」『中央美術』10巻5, 6, 7号, 1924年。ピカソについては10巻5号で触れている。
- 83) 中川紀元『ピカソと立體派』日本美術学院, 1922年, p.11
- 84) Daniel-Henry Kahnweiler, *Der Wegzum Kubismus*, Munich, Delphin Verlag, 1920. (D.H.カーンワイラー『キュビズムへの道』(SD選書46)千足伸行訳, 鹿島研究所出版会, 1970年)
- 85) 北村喜八「立體派への道程」『中央美術』10巻1号, 1924年, p.153
- 86) 《アヴィニヨンの娘たち》の図版が載った文献: 佐波甫「ピカソ論(中)」『みづゑ』no.387, 1937年
- 87) 1916年7月, アンドレ・サルモンが第一次世界大戦中のサロン閉会を補うために企画し, サロン・ダンタンで開催された。
- 88) 日本語版は蘇武緑郎訳『キュビズム』向陵社, 1915年
- 89) 神原泰『大原美術館神原泰文庫目録』大原美術館, 1990年, p.vi
- 90) 神原泰『ピカソ』アルス, 1925年
- 91) 前掲註90, pp.61-63
- 92) 前掲註89, p.119
- 93) 「日本の様にいきなり訪問する事はヨーロッパでは大變失禮な事になつてゐるが、ピカソの所だけは皆出し抜けに行つたものだ。」(福島繁太郎『ピカソ』新潮叢書, 1951年, p.49)
- 94) 「マリネツティーヤルツソロ, そしてピカソーなどにも會ひました(六. 一九, 巴里で)」『読売新聞』(1921年7月24日)
- 95) 東郷の滞欧作の画集には自ら解題をつけている。「『静物』No.1 (1922年)これはピカソの家に出入りしてゐた最初の頃に描いた作品だが、ピカソの影響があんまりむき出し過ぎると自分ながらに思つてゐる。しかしmatièreの點で、膠や砂や、セメントや金剛砂を試験的に畫面に使つてみた。」(「解題」『東郷青児画集』第一書房, 1931, p.2)など。
- 96) 海老原は初対面の挨拶に、まるで魔術師のように胸からどんどん腸詰めを出して、ピカソを驚かしたと、ピカソの弟子ペドロ・プルナが藤田嗣治の甥の芦原英了に語つた話がある。(大沢健一『海老原喜之助』日動出版, 1990年, p.102)
- 97) 「第十七回二科展」彫刻目録no.35, 《道化役者》
- 98) 中野和高「ピカソ」『アトリエ』9巻1号, 1932年, pp.25-26
- 99) 前田寛治「現代佛蘭西諸畫派に就いて」『美之國』3巻3号, 1927年, p.34
- 100) 里見勝蔵「中山と私」『中山巍画集』独立美術協会編, 建設社, 1930年, p.5
- 101) 川口軌外「分析と綜合ーロオトに学ぶ」『美術手帳』no.90, 1955年, pp.62-64
- 102) 前掲註101, p.64。川口は第16回二科展に出したが「当時日本ではなかなか理解してくれませんでした。」と述べている。
- 103) 1925年1月25日付け妹の日出宛の手紙(坂田一男の手紙(抄)小倉忠夫編『宿命の抽象画家 坂田一男』美術出版社, 1966年, p.139)
- 104) 三宅正太郎は「佐伯や里見勝蔵や中山巍のようにフォーブに行かずに、キューブに行つたことはたしかだし、それが彼の氣質に合つたのである。」と述べている。(「彷徨から抽象絵画への開眼 山口長男〈滞欧青春賦〉」『美術手帳』no.158, 1959年, p.142)
- 105) 山口長男「プリミティブから近代造形へ」『美術手帳』no.90, 1955年, p.80
- 106) 『岡本唐貴自伝的回想画集』東峰書房, 1983年, p.15
- 107) 萬鉄五郎「大正13年第十一回二科展評」『中央美術』10巻10号, 1924年, p.32
- 108) 五十殿利治「構成物の時代ー未來派美術協会から三科展まで」『大正期新興美術運動の研究』スカイドア, 1995年, p.627
- 109) 「未來派」『読売新聞』1920年9月20日, 7面/前掲註108, pp.627-628
- 110) 前掲註108, 「多様な協働のもとに「アクション

ン」, pp.284-90。「第一回展での同人たちの気負いは現実にはかえって空転した格好になり, 期待は必ずしも報われなかった (中略) 神原も同誌同号の「アクション展覧会雑記」において「然しこんなにまでして, 人の嘲りと, 罵倒と, 冷笑とを受けなければ『新しい時代の精神の為に』前衛となることが出来ないのか?」と失望を隠さなかった」/ 神原泰「アクション展覧会雑記」『みづゑ』no.219, 1923年, p.30

- 111) 村山知義「アクションの諸君に苦言を呈する」『みづゑ』no.232, 1924年, pp.28-29
- 112) 古賀春江「造型第一回作品展覧會を観る」『みづゑ』no.255, 1926年, pp.25-27
- 113) 村山知義「陸軍中將未亡人の家」『演劇的自叙伝第2部』東邦出版社, 1970年, p.19
- 114) 前掲註108, 「ベルリンの「日本未来派」」, p.380, p.391。村山の出品作品は《踊り子ゲルトルート・ファルケ》《ハーレンゼー橋》《アウクスブルガー街》である。
- 115) 前掲註113, 「画商との出会い」, p.29
- 116) 当時, 本郷三丁目にある洋画研究所で, 木炭デッサンをしたときに, 未来派的に三角形を積み重ねて, 人体を構成したという。(村山知義「未来派へのアプローチ」『演劇自叙伝第1部』東邦出版社, 1970年, pp.312-316)
- 117) 村山知義『現在の芸術と未来の芸術』長隆舎書店, 1924年(復刻版(抄)本の泉社, 2002年)
- 118) 前掲註113, 「絵具以外の材料の探究」, pp.63-64

*・本文中の「」は原文のまま引用した。

- ・作品名《》後の()内は, 制作年, 現在の所蔵先, ピカソ作品総目録番号 (Christian Zervos, *Pablo Picasso*, vol.1-33, Paris, Cahiers d'Art, 1932-1978.ギリシャ数字は巻数, アラビア数字は目録番号を指す)の順である。
- ・今回, 本文中のピカソの作品図版については, 諸般の事情により掲載を見送ることにした。

日本におけるピカソの受容略年表（1900－1930年）

年代	月	日本人のピカソ言及、関連事項 ◇は出典先	ピカソ関連事項 ○は西洋美術関連
1900年 (明治33)	4月～11月	パリ万国博覧会 グラン・パレ会場で開催の美術展の第三部、諸外国の美術の十年展にスペインからピカソ、日本から黒田清輝、久米桂一郎、藤島武二等の作品が出品される。パリに、黒田、久米、小代為重、岩村透、留学中の岡田三郎助、和田英作らが集まる。	1900年10月、カサジェマスと一緒にパリを訪問。パリ万国博覧会や画廊巡りをする。12月、バルセロナに戻り、マラガへ旅立つ。
1900-01年 (明治33-34)		貞奴 パリ万国博覧会で川上音二郎一座がロイ・フラー劇場で公演。ピカソが貞奴のポスターのためにデッサンを制作する。	1901年5月、2度目のパリ滞在。6月、ヴォーラル画廊で二人展を開く。批評家ギュスターヴ・コキオがカタログの序文を書く。
1907-08年 (明治40-41)	冬	斉藤与里 スタイン氏の家で、ピカソの青の時代、バラ色の時代の作品を見る。◇「スタイン氏のコレクション」『白樺』3巻1号, 1912年	1905年春、彫刻《道化師》を制作。夏、オランダを旅行する。レオとガートルード・スタイン兄妹と知り合う。 1907年4月末～7月初、《アヴィニョンの娘たち》を制作。キュビズムの探究を始める。夏、画商ダニエル＝ヘンリー・カーンワイラーと知り合う。 ○1907年10月、サロン・ドートンヌでセザンヌ回顧展
1911年 (明治44)	4月、10月 5月以降 11月18日	石井柏亭 4月のサロン・デ・ザンデバンダンや10月のサロン・ドートンヌを見る。◇『東京朝日新聞』7月21, 22, 29日/『東京朝日新聞』11月9, 10, 11日 梅原龍三郎 アカデミー・ジュリアンの同級生ジョルジュ・デニケスの紹介でピカソと知り合う。 『読売新聞』 サロン・ドートンヌでキュビズムが公認され、ピカソがキュビズムの師匠として報じられる。◇「巴里画界の最新派」『読売新聞』11月18日	1911年4月のサロン・デ・ザンデバンダンと10月のサロン・ドートンヌにピカソは出品しない。10月、ニューヨーク、マドリッド、アムステルダム各新聞でピカソ不在を報道する。7月、ピカソとブラックはセレで共同制作し、分析的キュビズムが頂点を迎える。秋、エヴァと知り合う。
1912年 (大正元)	7月11日 夏 冬	木村莊八 柳宗悦を訪問し、ゴッホ、ゴーガン、マティス、ピカソなどの画(複製?)を見たとき日記に記す。◇『木村莊八日記[明治編]』東京文化財研究所, 2003年 石井柏亭 ベルリンのゼセッション展でピカソのキュビズムの作品《ボン・ヌーフ》を見る。◇「フォーヴィスムとアンチ、ナチュラリズム」『早稲田文学』第85号 与謝野寛(鉄幹) サロン・ドートンヌに出品されたメゾン・キュビストを見る。◇「立体派の諸作」『東京朝日新聞』12月1日	1912年春、コラージュ作品の制作を始める。10月、ラスバイユ大通りに転居する。秋、パビエ・コレ手法の作品を制作する。12月、カーンワイラーと契約する。
1912-15年 (大正元-4)		萬鉄五郎 東京もしくは土沢で、スケッチブックにピカソや哲学者ベルクソンの名前などを明記した草稿を書く。	
1913年 (大正2)	2月 3月 4月 4月30日 冬	木下杢太郎 立体派について論及する。ピカソの《マンドリンを持ってピアノに依れる女》の挿図 ◇「洋画に於ける非自然主義的傾向」(上)『美術新報』12巻4号 斉藤与里 ロジャー・フライの第2回ポスト印象派展のカタログを見て、ピカソの作風の豹変について論じる。ピカソの《静物》《男の首》の挿図 ◇「ピカソの道」『フェウザン』第4号 白樺主催第六回美術展 ピカソの複製画(版画?), 《女の肖像》《静物》《化粧》と題する3点が展示される。(衆議院構内虎ノ門倶楽部) 梅原龍三郎 有島生馬(壬生馬)にキュビズムについて報告する。◇「花市の河岸より」『白樺』4巻6号 斉藤佳三 シシューキンのコレクションのピカソ作品を見る。◇「表現派と立方派と未来派」『美術新報』13巻6号, 1914年	1913年5月、父ホセ死去。夏、恋人エヴァとシェールシェール通りに住む。秋、ヴォーラルがピカソの1904-05年のサーカスを主題にした版画14点を買ひ、《サルタンパンク》シリーズとして再版する。年末、ロシアの芸術家ウラジーミル・タトリンがピカソを訪問し、ピカソの立体作品を知る。

1914年 (大正3)	2月 5月 7月25日	藤田嗣治 ピカソを訪問する。◇とみ宛ての書簡：1914年2月10日『藤田嗣治書簡-妻とみ宛-』(一)パリ留学初期の藤田嗣治研究会, 2003年 村山塊多 絵馬堂を美術館にする考えのなかでピカソの名を上げる。◇「絵馬堂を仰ぎて」『朝日新聞』(京都版)5月6日 正宗得三郎 画商クロヴィス・サゴの店を訪問し、ピカソの素描を見る。◇『画家と巴里』日本美術学院, 1917年	1914年, 第1次世界大戦が勃発し、ブラックが戦地に赴く。秋(または夏)アヴィニオンで《画家とモデル》を描く。11月初, エヴァとパリに戻る。
1915年 (大正4)	1月12日 2月～9月 3月 9月	村山塊多 1915年1月12日の日記に「(中略)オレはゴヤであらねばならぬー ピカソであらねばならぬー スパニエールの血と心とよ!」と記す。「未来のわが制作をして…」と「モデル女に」を詩作し、ピカソを称賛する。◇『村山塊多全集』彌生書房, 1963年 森田亀之助 キュビズムについて論じる。ピカソの《ギタールを弾く人》(上承前), 《マンドリンを持てる女》《或る詩人》(下の下)の挿図 ◇「泰西画界最近運動の経過及キュビズムー附り其批評」『美術新報』(上承前, 下の下)14巻4号, 14巻11号 木村莊八 ピカソの《ギターを引く人》の挿図 ◇『未来派及立体派の芸術』天弦堂 東郷青児 第一回個展(日比谷美術館)を開き、我が国初のキュービストとして注目される。	1915年12月, 恋人エヴァの死去。年末カーンワイラーが不在中, レオンス・ローザンバールがピカソの作品を取り扱う。
1916年 (大正5)	9月	正宗得三郎 ピカソの総合的キュビズムについて論ずる。◇「仏蘭西畫壇の印象」『文章世界』152号	1916年6月末, コクトーの紹介でディアギレフやサティと知り合う。7月, サロン・ダンタンで《アヴィニオンの娘たち》が公開される。10月, モンルージュへ引越す。
1917年 (大正6)	9月 10月	萬鉄五郎 故郷の土沢でキュビズムを探求した成果である《もたれて立つ人》を第4回二科展に出品。 森口多里 萬鉄五郎の《静物》を「ピカソの初期立方主義時代の作品に見るような新しい物質感と反印象的色彩」と評する。◇「二科会及び美術院洋画」『早稲田文学』10月号	1917年2月～5月, イタリア旅行。ロシアのパレエダンサー, オルガと知り合う。5月, パリでピカソが舞台装置と衣装を担当するロシア・パレエ団の「バラード」が上演される。○第1回ダダ展, チューリッヒで開催。藤田嗣治, シェロン画廊で初個展。 1918年7月, オルガと結婚し, 11月ラ・ボエシー街に住む。
1920年 (大正9)	9月	未来派美術協会第一回展 新興美術運動作家のコラージュ手法の作品が展示される。◇「未来派」『読売新聞』9月20日	1920年2月, 「ブルチネッラ」の舞台装飾の素描を描く。5月, パリのオペラ座で「ブルチネッラ」が初演される。 ○カーンワイラー『キュビズムへの道』
1921年 (大正10)	6月 9月	東郷青児 マリネッティ, ルッソロ, ピカソなどに会う。 ◇『読売新聞』7月24日 『中央美術』ピカソの作風がキュビズムから新古典主義に変化したことを伝える。ピカソの《読書する婦人》の挿図 ◇「ピカソが転換した ピカソの近作展覧会」『中央美術』7巻9号	1921年2月, 息子パウロ誕生。4月, モーリス・レイナールによるピカソの最初の伝記的研究書が出版される。
1922年 (大正11)	1月 5月～7月 7月 10月	山本鼎 欧米の現代画家の一人としてピカソを紹介する。ピカソの《猿のいる軽業師の家族》等, 6点の挿図 ◇「欧米の現代画家 西班牙ピカッソ」『みづゑ』no.203 第1回デュッセルドルフ国際美術展 村山知義とピカソの作品が一緒に展示される。 神原泰 ピカシズムについて, ピカソの《俳優》を例に言及する。◇「立体派の発生」『みづゑ』no.209 中川紀元 ピカソの《アヴィニオンの娘たち》に触れる。 ◇『ピカソと立体派』日本美術学院	1922年初, デザイナーのジャック・ドゥーセはアンドレ・ブルトンらの勧めで《アヴィニオンの娘たち》を購入する。6月, ディナールで《海辺を走る二人の女》を描く。

年代	月	日本人のピカソ言及、関連事項 ◇は出典先	ピカソ関連事項 ○は西洋美術関連
1922-23年 (大正11-12)		岡本唐貴 キュビズム研究にとりかかる。	
1923年 (大正12)	1月～2月	石井柏亭 1月8日ベルネーム・ジュンス画廊でピカソの新古典主義の半裸婦と幾何学的静物画を見る。1月29日ローザンペール画廊, 2月21日兄のレオンス・ローザンペールを訪問。 ◇『美術と自然 滞欧手記』中央美術社, 1925年	1923年2月, 《腕を組んですわるサルタンバンク》を描く。11月, ニューヨークのポール・ローザンペール-ウィルデンスタイン画廊で, ピカソの16点の近作展が開かれる。
	4月	第二回仏蘭西現代美術展 フランス人画商デルスニス氏将来のピカソの《新聞紙》等が出品される。(上野公園竹之台陳列館)	
	9月	第十回二科美術展覧会 ピカソの《女の顔》と《静物》がローザンペール画廊から出品される。*開会初日9月1日に関東大震災が発生し, 東京展は中止。10月から大阪, 京都, 福岡に巡回	
	々	福原信三 評論家ヴィルドラック氏の夫人(画商)から購入したピカソ《裸女》が日本へ到着する。◇「モネー, ピカソ, ゴンチャロバなど」『アトリエ』15巻6号, 1938年	
	11月	山下新太郎 第十回二科美術展覧会に出品されたピカソの作品について評する。◇「二科のフランス現代画」『中央美術』9巻10号	
1924年 (大正13)	1月	『中央美術』 第10回二科美術展覧会出品のピカソの《静物》が表紙になる。◇『中央美術』10巻1号	1924年4月, ラ・ボエシー街のポール・ローザンペール画廊で, ピカソの個展が開催される。6月, バレエ「メルキューール」の舞台装飾と衣装を担当する。シャンゼリゼ劇場で初演されたロシア・バレエ団「青い列車」の緞帳に《海辺を走る二人の女》が用いられる。11月, 『シュルレアリスム革命』の創刊号にピカソの《ギター》とマン・レイが撮影したピカソの肖像写真が載る。 ○アンドレ・ブルトンのシュルレアリスム宣言発表
	々	北村喜八 画商カーンワイラーの著述を引用し, 《アヴィニヨンの娘たち》を表す一節を訳出する。◇「立体派への道程」『中央美術』10巻1号	
	2月	仏蘭西現代水彩画・素描・版画展《貧しき食事》を含むサルタンバンク・シリーズ》が出品される。(三越呉服店東館)	
	3月	村山知義 ポール・ローザンペールの「パブロ・ピカソ」を訳出する。◇『みづゑ』no.229(収録『現在の芸術と未来の芸術』長隆舎書店, 1924年)	
	4月	福島繁太郎 ポール・ローザンペール画廊でピカソ個展を正宗得三郎と見て《恋人たち》に感動する。◇『ピカソ』新潮叢書, 1951年	
	々	前田寛治 前田は中野和高と ローザンペール画廊でピカソの《マダム・ピカソ》を見て感化される。◇中野和高「ピカソ」『アトリエ』9巻1号, 1932年	
	5月	一氏義良 立体派の理論, ピカソの生涯や印象などについて論じる。◇『立体派・未来派・表現派』アルス	
	6月	アクション第二回展 村山知義から「一番多いのはピカソやブラックを煮しめて骨抜きにしたフランスの帝展式の真似をした連中」と酷評される。◇「アクションの諸君に苦言を呈する」『みづゑ』no.232	
	7月	『マヴォ』 創刊される。第1号に沢青鳥《コンストルクチア》, 第3号の表紙に高見沢路直《ラシヤメンの像》などのコラージュ作品が掲載される。	
1925年 (大正14)	2月	光風会第十二回展 黒木三次伯爵家のピカソを含むコレクション32点が特別陳列される。ピカソの作品は《室内》《モンマルトル》である。(上野公園竹之台陳列館)	1925年7月15日, 『シュルレアリスム革命』第4号に《アヴィニヨンの娘たち》と《ダンス》の図版が掲載される。11月, パリのピエール画廊で開催された第1回シュルレアリスム絵画展にキュビズム作品を出品する。
	4月	神原泰 ◇『ピカソ』アルス ピカソの《生木と枯木のある風景》《腕を組んですわるサルタンバンク》の挿図	
	5月	第六回中央美術展 福原信三所蔵のピカソ《裸女》が出品される。(上野公園竹之台陳列館)	
	春	福島繁太郎 ポール・ギョーム画廊で初めてピカソの《裸人立像》を購入。そこで店の主人にピカソを紹介される。	

		◇「旧福島コレクション」『みつゑ』no.597, 1955年4月臨時増刊号 福島繁太郎 ピカソの《女の顔》をダバー画廊から購入する。 村山知義 《コンストラクション》を制作。 古賀春江 ピカソの《赤い布の上のギター》の図版を写す。	
1926年 (昭和元)	4月 5月 9月 12月	福島繁太郎 ローザンベール画廊ニューヨーク支店でアメリカ人蒐集家ジョン・クインの遺産から《生木と枯木のある風景》《泉》を購入する。 造型第一回展 古賀春江は「ビザンチン式顔容と、ピカソの形態と、泥絵の色感の共通する者が大部分」と総評する。◇「造型第一回作品展覧會を観る」『みつゑ』no.255 荒城季夫 ポール・ローザンベール画廊のピカソの個展に出品された 1925年代制作の10枚の静物画をこれまでの中で最も見事と評する。◇「パブロ・ピカソの近業」『日佛藝術』2巻15号 第三回信濃橋洋画研究所展覧會 岸本吉左衛門所蔵のピカソ《裸体》が参考出品される。 海老原喜之助 ピカソの弟子ベドロ・ブルナの紹介でピカソを訪問する。◇大沢健一『海老原喜之助』日動出版, 1990年	1926年6月～7月, ポール・ローザンベール画廊でピカソ58点の個展が開かれる。○クリスティアン・ゼルヴォスが『カイエ・ダール』を創刊。
1927年 (昭和2)	9月	大久保作次郎 ピカソの《海辺を走る二人の女》の綴帳について。◇「芝居の思ひ出のうちから」『美術新論』2巻9号 川口軌外 ピカソやブラックがキュビズムに用いたモチーフ、マンドリンを描いた《静物(マンドリン)》(1927-31年)を制作する。	1927年1月, マリー=テレーズと知り合う。冬, 画商ヴォラルの依頼でオノレ・ド・バルザックの『知られざる傑作』の挿絵を制作する。
1928年 (昭和3)	4月 々	第七回国画創作協会展 ピカソの《泉》が出品される。 小島烏水蒐集泰西創作版画展覧會 小島烏水が蒐集した版画コレクション展でピカソ《ふたつの裸体》等, 計4点が展示される。(東京朝日新聞社ギャラリー)	1928年1月, ミノタウロスを主題とした作品を初めて制作する。3月, 彫刻家フリオ・ゴンサーレスと彫刻作品を制作する。
1929年 (昭和4)	2月	福島繁太郎 福島コレクションの83点が紹介される。ピカソ14点の挿図のうち2点はカラー。◇『美術新論』4巻2号 藤田嗣治 帰国して母校で、ピカソのアトリエの様子について語る。◇藤田嗣治『巴里の横顔』実業之日本社	1929年5月, 《赤い肘掛け椅子の裸婦》を制作。 ○ニューヨーク近代美術館開館
1930年 (昭和5)	9月	第十七回二科展 海老原喜之助によりピカソの彫刻《道化師》が出品される。(東京府美術館)	1930年, 《磔刑》を制作。

* ピカソについては主にWilliam Rubin (ed.) : *Pablo Picasso. A Retrospective*, The Museum of Modern Art, New York (W. ルービン編集 山田智三郎・瀬木慎一監修『パブロ・ピカソ 天才の生涯と芸術』旺文社, 1981年) を参考にした。

ブリヂストン美術館

Bridgestone Museum of Art

所在地 東京都中央区京橋1-10-1(〒104-0031)
TEL(03)3563-0241
URL <http://www.bridgestone-museum.gr.jp>
開館時間 午前10時—午後8時(火—土)
午前10時—午後6時(日・祝)
休館 毎月曜日 年末年始
入場料 個人:
一般 800円 シニア(65歳以上)600円
大・高生 500円 中学生以下 無料
団体(15名以上):
一般 600円 シニア(65歳以上)500円
大・高生 400円 中学生以下 無料
なお、特別展の場合は変更することがある。

Address 1-10-1, Kyobashi, Chuo-ku, Tokyo
104-0031, Japan
Phone: +81 (3) 3563-0241
URL <http://www.bridgestone-museum.gr.jp>
Hours 10:00 to 20:00 (Tuesday-Saturday)
10:00 to 18:00 (Sundays, national holidays)
Closed on Mondays, New Year holidays
Admission Individual:
Adults ¥800; Seniors 65 or over ¥600;
Students ¥500; Children under 15 free
Group (15 or more):
Adults ¥600; Seniors 65 or over ¥500;
Students ¥500; Children under 15 free
Different fees will be charged during special
exhibitions.

石橋美術館

Ishibashi Museum of Art

所在地 福岡県久留米市野中町1015(〒839-0862)
TEL(0942)39-1131
URL <http://www.ishibashi-museum.gr.jp>
開館時間 午前10時—午後5時
休館 毎月曜日 年末年始
入場料 個人:
一般 500円 シニア(65歳以上)300円
大・高生 300円 中学生以下 無料
団体(15名以上):
一般 400円 シニア(65歳以上)200円
大・高生 200円 中学生以下 無料
なお、特別展の場合は変更することがある。

Address 1015, Nonaka-machi, Kurume-shi,
Fukuoka-ken 839-0862, Japan
Phone: +81 (942) 39-1131
URL <http://www.ishibashi-museum.gr.jp>
Hours 10:00 to 17:00
Closed on Mondays, New Year holidays
Admission Individual:
Adults ¥500; Seniors 65 or over ¥300;
Students ¥300; Children under 15 free
Group (15 or more):
Adults ¥400; Seniors 65 or over ¥200;
Students ¥200; Children under 15 free
Different fees will be charged during special
exhibitions.

(2006年12月現在)

石橋財団職員

常務理事	中山	暁
美術品保存管理課長	石井	亨

事務局

事務局長	遠藤	長夫
	森田	麻利子
	鈴木	弥生
	石黒	経子
	土屋	益子

ブリヂストン美術館

館長	島田	紀夫	広報課	広報課長	中村	邦子
部長	遠藤	長夫			久野	朝子
管理課	荒井	桂	学芸課	学芸課長代理	中村	節子
管理課長	金森	大輔	主任学芸員		貝塚	健
	塚田	美香子			塩島	明美
	石川	久子			田所	夏子
	小原	田鶴子				

石橋美術館

館長	平野	実	学芸課	学芸課長	森山	秀子
顧問	田内	正宏	主任学芸員		植野	健造
総務課	後藤	純子			平間	理香
総務課長	富松	弘美				
	原	朋子				
	河野	何奈				
	平島	たか子				

2006年12月31日現在

